蘭燈情話

近松秋江

蘭燈情話

並松林訳

蘭燈情話

蘭燈情話目次

情　火……一
愛着の名殘り……一三
惜春の譜……一〇五
流　れ……一六一
仇なさけ……一九五
津の國屋……二三九

情

火

さうして、それとゝもに遣る瀬のない、悔しい、無念の涙がはら〳〵と溢れて、夕暮の寒い風に乾いて總毛立つた私の痩せた頰に熱く流れた。

涙に滲んだ眼をあげて何の氣なく西の空を眺めると、冬の日は早く牛込の高臺の彼方に落ちて、淡蒼く晴れ渡つた寒空には、姿を沒した夕陽の名殘が大な、車の輻のやうな晒色の後光を大空一ぱいに美しく反射してゐる。さういふ日の暮れてゆく景色を見ると、私はまた更に寂しい心地に滅入りながら、それでも矢張り今柳澤に毒々しく侮辱された憤怒の怨恨が、嬲り殺しに斬り苛まされた深手の傷のやうにむづ〳〵五體を疼かした。

音羽の九丁目から山吹町の街路を歩いて來ると、夕暮を急ぐ多勢の人の足音、車の響が赫とぐつた頭を、その上にも逆せ上らすやうに轟々とどよみをあげてゐる。私はその中を獨り狂氣のやうになつて歩いてゐた。そして山吹町の中程にある、とある薪屋の處まで戻つて來ると、何といふわけもなく始めて傍にある物象が眼に着くやうになつて來た。そしてその陰氣な灰色の薪を積み上げてあるのを凝乎と見据ゑながら、

『これから直ぐお宮の處に行かう。』　私は口の中で獨語をいつた。

色の白い、濃いけれど柔かい地藏眉のお宮をば大事な秘密の樂しみにして思つてゐたものを、根性の惡い柳澤の嫉妬心から、靈魂の安息する棲家が引蛻さまはされて、汚されたと思へば、喪失してしまつて、身體が萎えたやうになつて、うはの空に、

『もうやめだ。もうお宮はやめだ。』

柳澤が、あのお宮……を買つたと思へば、全く興覺めてしまつて、神經を惱む病人のやうに、そんなことをぶつ〳〵口の先に出しながら拳固を振上げて柳澤を打

つゝもりか、どうするつもりか、自分にも明瞭とは分らない、唯憎いと思ふ者を打毆る氣で、頭の横の空を打拂ひ〳〵歩いて來たのだが、

『これッきりお宮を止めてしまふ。柳澤が買つたので、すつかり面白くなくなつた。』

と、殘念で溜らなく言ひつゞけて此處までの道を夢中のやうになつて歩いて來たが、それでもまだどうしても止められない愛着の情が、むら〳〵と湧き起つて來た。さうして斯ういふことが考へられた。

強盗が入つて妻が汚された時に、夫は、その妻に對してその後愛情に變化があるだらうか。それを思ふと、それが現在あることゝいふのでなく、たゞ私が自身で想像に描いて判斷してゐるだけなのだが、丁度今自分の身にさういふ忌しい災難が降りかゝつて來てゐるかと思はれるほど、その夫の胸中が痛ましかつた。

さうしたら夫は、どうするであらう。妻は可愛くつてかはいくつて堪らないのである。然るにその可愛い妻の肉體は看す〳〵淺ましくも强盗のために汚されてしまつた。妻は愛したくつて、あいしたくつて堪らないのであるが、それを愛しやうにも、その肉體は汚されてしまつた。その場合の夫の心ほど氣の毒なものはない。その時はたゞ靜と觀念の眼を瞑つて諦めるより他はないだらうか。私はそんなことまで考へて、お宮も强盗の爲に汚されてしまつたのだ。まして秘密に操を賣つてゐるお宮は、明らさまに柳澤が買つたといへばひどく氣に障るやうなものゝ、柳澤の他に自分が見知らぬ人間に幾たび接してゐるか分らない。

さうも思ひ反へすと、その柳澤に汚されたお宮の肉體に對して前より一層切ない愛着が增して來た。

『さうだ！　これから今晩すぐ行つてお宮を見やう。』

さう決心すると、柳澤が今晩もまた行つてお宮を呼びはしないかと思はれて、氣が急けて少しも猶豫してはゐられない。そして柳澤が買つたのでもお宮に對する私

の愛情には變化はないと思ひ極めてしまふと、もうこれから早く一旦自家に歸つて、出直して蠣殼町にゆくことにのみ心が澄んで來た。

喜久井町にかへると、老母さんは、膳立てをして六疊の机の前に運んで來た。私はそれを食べながら、錢の工面をして、出掛けやうとすると、

『また何處かへお出でなさるんですか。』老母さんは、門の木戸を明けてゐる私の背後から呼びかけた。

『えゝ、ちよつと。』と、いつたまゝ、私は急いで歩き出した。

そして先達つてお宮の連れ込みで行つた、清月といふ小さい待合に行つてお宮を掛けると、直ぐやつて來た。

一と口挨拶をした後は默つて座つてゐるその顏容から姿態を稍しばらく凝乎と瞻つてゐたが柳澤がどうもせぬ前と何處にも變つた處は見えない。肌理の細かい眞白い顏に薄く化粧をして、頸窪の處のまるで見えるやうに頭髪を搔きあげて廂を大き

く取つた未通女い束髪に結つたのが惡毒氣なさゝうなお宮の顏によく映つてゐる。そしてその女の癖で鮮かな色した唇を少し歪めたやうにして眩しさうに眸をあげて微笑みかけながら默つてゐた。

『どうしてゐた？』

私は、やつぱりじろ〳〵とその顏を見守つた。傍で、その顏を見てゐる者があつたら薄氣味わるく思つたかも知れぬ。

『いゝゝ。』お宮は何ともいへない柔かな可愛い聲を出した。

これが、あの柳澤にどうかされたのだ。と思へば他の男のことは不思議になんとも感じないのに、たゞそればかりが愛情の妨げになつて、名狀しがたい、淺ましい汚辱を感じて堪えられない。

『お前ねえ、私の友達の處にも出たらう。——併しそれは構はないんだけれど……』

私は凝乎と平氣を裝つてからいつて見た。

『いゝえ。そんな人知らない。』頭振をふつた。

『あゝ、そりやお前は知らないかも知れぬ。お前は知らないだらう。けれども出るのは出たんだ。僕がその友達から聞いたんだから。』

『いや、知らない。あなたの友達なんか、ちつとも知らない。』

『いや、知らないわけはないんだ。お前は知らないんだけど。……四五日前に、背の低い色の淺黑い、ちよつときりッとした顏の三十ばかりの人間が來たらう。』

さういふと、お宮はしばらく思ひ起すやうな顏をしてゐたが、

『あゝ、來た。久留米絣かなんかの羽織と着物と同じなのを着た。さつぱりした人よ。あの人よ、此間鳥安に連れて行つてくれた人。』

私はそれを聽くと、また赫と逆上せて耳が塞つたやうな心地がした。

『さうだらう。あれが私の友達なの。』

私はその言葉で强ひて燃え立つ胸を靜めやうとするやうに溫順しくいつた。

『あはゝゝ。』お宮は仕方なく心持ち兩頰を紅く光して照れたやうに笑つた。が、その、ちよつとした笑ひ方が何ともいへない莫連者らしい惡性な感じがした。

それつきり私は暫らく默つてまた獨りで深く考へ沈んだ。

つい先達つて來た時にお宮と一處に藥師の宮松亭に清月の婆さんをつれて女義太夫を聽きにいつて遲く歸つた時、しるこか何か食べやうかといつたのを、二人とも何にも欲しくない、

『あなた欲しけりや、家へ歸つて、叔母さんに洋食を取つて貰つてお食べなさい。おいしいのがあつてよ。』と、いつて、清月の小座敷でお宮とそれを食べてゐる時、

『鳥安の燒いた鳥は甘いわねえ。』と、いつた。

『鳥安知つてゐるの？』

『えゝ、此間初めてお客に連れていつてもらつた。そりや甘かつたわ。』

こんなことをいつてゐたが、ぢや、その客は柳澤であつたかと、私は思つた。かういへば、お前にもすぐ解るだらうが、私といつたら始終自分の小使錢にも不自由をしてゐるくらゐだが、柳澤は拾圓札を束にして懷中に入れて歩いてゐるといふ話のあるほどだ。私が錢を勘定しい〳〵お宮と遊んでゐるのに、柳澤は錢に飽して遠くに連れ出すなり、外に物を食べに行くなりしやうと思へば、爲たい三昧のことが出來る。

それで、私は、先達つて鳥安につれてつた客が柳澤であつたといふことが分ると、もうお宮を取つてゆかれさうな氣がして、また堪えられなくなつて來た。

『そりや何日ごろの事？』

『うむ、つい此間さ。』

つい此間といへば、何日のことだらう。先達つてからお宮は、深い因緣の纏綿つた男が、またひよつこり、自分が復た此の土地に出てゐることを嗅ぎつけて來たといつて、今にも何處かへ姿を隱すやうにいつてゐたのが、一週間ばかりして、また當分何處へもゆかないといつて、それで、先に來た時に一緒に義太夫を聽きにいつたりしたのだ。あの時もう鳥安に行つたことを言つてゐたから、ぢや私が一週間ばかり來なかつた、その間に柳澤は來て、私がまだ女をつれて外になど少しも出ない時分に鳥安なんかへ行つたのだ。女にかけては、世間では私などを道樂者のやうにいつてゐるが、よつぽど柳澤の方が自分より上手だ。と思ふと、私は尙ほのことお宮のことが心元なくなつて來た。そしてつまらぬことをお宮に根掘り葉掘り訊きたいのを、靜と抑へて耐えながらも矢張り耐えられなくつて、さあらぬやうにして訊ねだ。

『あの人、好い男だらう。』

『本當に好い男よ。私、あんな人大好き。着物なんか絹の物なんか着ないで、着物も羽織も久留米絣かなんかの對のを着て、さつぱりしてゐるは。』

『何か面白い話しがあつたか。』

『うむ、あんまり饒舌らない人よ。さうしてじろ〳〵人の顔を見ながら時々口を利いて、ちつとも無駄をいはない人。私あんな人好き。』

お宮には本當に柳澤が氣に入つてゐるのらしい。

『君が買つた女だと思つたから、凝乎と顔を見てゐてやつたら非常に興味があつた。』

こんなことを、柳澤は、先刻饗庭もゐる前で話してゐた。

此方は、柳澤がそんな意地の悪いことをするとは知らないから、胸に奸計を抱いてゐてお宮を傍に置いてゐたことはない。柳澤の方ぢやさうぢやない。これが雪岡の呼んでゐる賣女であると初めつから知つてゐて、口を利くにもその腹で口を利いてゐる。烏安なんぞへつれ出すにも、さういふ胸に一物あつてしてゐることだ。

かういふと、お前は、つまらない、蠣殼町の女風情を柳澤に取られたといつて、そんな他人聞きの悪いことをいふのはお止しなさい。あなたの器量を下げるばかりだやありませんか。と、いふであらうが、それは私も知つてゐるけれど、まあ、そんな具合で柳澤は最初お宮を呼んだのだ。さういへば、お前にも柳澤の爲ることが大抵判斷がつくだらうと思つて。

そんな厭な思ひをしながらも、やつぱり傍で見てゐれば見てゐてお宮の美目形が好くつて、その柳澤の買つた女をまた買つた。

さうして疲れて戻つて來ると、神經が一層惱まされてお宮のことが氣になつて氣になつて仕方がない。私がいつてゐる間だけは安心してゐるが、見ないでゐると、その間は柳澤が行つて、あゝもしてゐるであらう、かうもしてゐるであらう。と思ひ疲れてゐた。

それから柳澤とは、なるたけ顏を合さぬやうにしやうと思つて暫らく遠ざかつてゐたが、またあんまり柳澤に會はないでゐると、今日もお宮の處に行つてゐるであ

らう。いつてゐるに違ひない。きつと行つてゐる。と思ひめぐらすと、どうしても行つてゐるやうに思はれて、柳澤の樣子を見なければ氣が濟まないで久しぶりに行つて見た。

例の片眼の婆さんに、

『旦那はゐるかね？』と、訊くと、

『えゝ、おいでになります。』

何だか氣に入らぬことでもあると思はれて佛頂面をしていふ。

柳澤が家にゐるといふので、私はいくらか安心しながら、婆さんがお上んなさいといふのを、すぐには上らず、婆さんに案内をさせて、高い階段を上つてゆくと、柳澤はあの小い體格に新調の荒い銘仙の茶と黑との傳法な厚褞袍を着て、机の前に堂乎と趺座をかいてゐる。書きさへすれば彼方でも此方でも激賞されて、賣り出してゐる眞最中なので、もう正月の雜誌に出す物など他人よりは十日も早く手まはしよく形付けてしまつて、懷中にはまた札の束がふえたと思はれて、いなせに刈つたばかりの角がりの頰の邊に肉つきが眼につくほど好くなつて、淺黑い顏が艶々と光つてゐる。

私は、何よりもその活々とした景氣の好い態度に蹴落されるやうな心持ちになりながら、恐々しながら、火鉢の脇に座つて、

『男らしい人よ。私あんな人大好き。』と、いつた宮の言葉を想ひ浮べて、それをまた腹の中で反復しながら、柳澤の顏と見比べてゐた。

柳澤は最初から、私が階段を上つて來たのを、じろ〳〵と用心したやうな眼付で瞻つたきり口一つ利ないでやつぱり默りつゞけてゐた。私も駄り競をするやうな氣になつて、何時までも默つてゐた。

『どうだ。この頃は蠣殼町にゆくかね？』打つて變つたやうな優しい顏をして捌けた口を利いた。

『うむ。ゆかない。もう止めだ。つまらないから。君はどうだね？』
『僕もあんまり行かないが、……その後お宮を見ないかね？』
柳澤は、日頃に似ぬ何處までも輕い口の利きやうをする。
私には、何だか兩方が互の腹を探つてゐるやうな感じがして來た。さうして柳澤との仲でそんな思ひをするのが厭でいやで耐らないのだけれど、今度のことは最初から柳澤が私達二人の中へ横から割込んで來たのだから仕方がない。
『いや、見やしないさ。あれつきり行かないから……』
といつたが、お宮が、私が來たといふことを、もし柳澤に話してゐたら、すぐ尻が割れてしまふ。そんな嘘を言つて隱し立てをしてゐる此方の腹の中を見透かされると、柳澤の平生の性質から一層嵩にかゝつて逆に出られると思つたから、
『……おゝ、あれから一度ちよつと行つたかナ。』
と、さあらぬやうにいつた。さうして腹の中では、何處までも、どこまでも後を追跡してゐられるやうで氣持ちが惡かつた。
『よく賣れると思はれて、何時行つて見ても居たことがない。』柳澤はやゝ語聲を强めていつた。
ぢやあ柳澤はあれから度々いつて、お宮を掛けてゐるのだナ。と、私は秘に思つてゐた。
『君はこの頃また大變に肥つて、英氣颯爽としてゐるナ。』
柳澤の顏を見守りながら、私は話頭を轉ずるやうにいつた。
『うむ。僕はこの頃食べる物が何を食つても甘い。』
愉快さうにいつて、柳澤は兩手で頰のあたりを撫でた。
『君はこの頃何だか影が薄くなつたやうな氣がする。』
と、冷かに笑ひ〳〵いつて、また私の顏をじろ〳〵凝視めながら、
『さうして、段々不可なくなつて……』

柳澤は、慘めな者を見るのも、聞くのも、さも〳〵厭だといふやうに、顔を顰めていつた。

『あゝ、影が薄くなつたらう。』　私は憮然として痩せた兩頰を撫でゝ見た。

さうして斯う思つた。自分は、何も柳澤に同情をしてもらひたくはないが、しかし私がどうして今此樣なになつてゐるか、その原因に就いては、とても柳澤は理解する人間ではない。或は解るにしてもそのことが私ほど馬鹿〳〵しく骨身に喰ひ入る人間ではないと思つたし、お前に置き棄て同然の目に逢されたが爲にかうなつてゐるのだともいへないし、またそんな氣持は話したからとて、さういふ經驗のない者には解るものでもないから、私は唯さういつたまゝまた默り込んでしまつた。

『お宮が、雪岡さんを見ると氣の毒な氣がする。と、いつてゐた。』

柳澤は、またさういつて笑つた。

『……』　私は悄然けたやうに默つて笑つてゐた。

『……今日はお宮ゐるか知らん。……これからいつて見やうか……』

柳澤は私を戯弄ふのか、それとも口では何でもなくいつてゐても、その實自分で大いにお宮に氣があるのか、或はまた影の薄い私が思ふやうにお宮の顔を見ることが出來ぬのを慘めに思つて、お勝手口の塵埃箱に魚の骨を打棄りに出たついで、そこに犬のゐるのを見て、そつちへ骨を投げてやるやうに、連れていつてお宮に逢してやらうといふお情かと、私はちよつと考へたが、それはどちらにしたつて構はない、とにかく柳澤とお宮と一座したら、兩方にどんな樣子が見られるか、柳澤にはお宮が好いのには違ひない。さう思案すると、

『あゝ、行つてもいゝ。』

これから二人はやゝ暫らく氣の置けない雜談に時を過しながら點燈ごろから蠣殼町に出掛けていつた。

柳澤は歳暮にしこたま入つた錢の中から、先達つて水道町の丸屋を呼んで新調さ

した越後結城か何かのそれも羽織と着物と對の、黑地に茶の千筋の厭味つ氣のない、隆とした着物を着て、大黑さまの頭巾のやうな三圓五十錢もする烏打帽を冠つてゐる。私はあの銘仙の焦茶色になつた野暮の絣を着て出たまゝだ。

小石川は水道町の場末から九段坂下、須田町を通つて兩國橋の方へつゞく電車通りにかけて年の暮れに押迫つた人の往來忙しく、賣出しの廣告の樂隊が人の出盛る辻々や勸工場の二階などで騷々しい音を立てゝゐた。私はそんな人の心を焦悶しがらすやうな街のどよみに耳を塞がれながら、喪失したやうな氣持ちになつて、柳澤が電車の回數券に二人分鋏を入れさせてゐるのを見て、何も斯も人まかせにして窓枠に頭を凭してゐた。

『今日ゐるか知らん？』

電車を降りると柳澤は先に立つて歩きながら小頸を傾けて、

『何處へゆかう？』

『さあ、何處でも可いが、その、君の先達つて行つた處がよかないか。』

私は、これから後々自分が忍んでゆく處にしやうと思つてゐる清月に柳澤と一緒にゆくのは厭であつた。

『ぢややつぱり彼家にしやう。……僕もあんまり行かない待合だがお宮を初めて呼んだ待合だから。』

さういつてお宮のゐる置屋からつい近所の待合に入つた。

『……宮ちやんすぐまゐります。』女中は報らせて來た。

『ゐたナ！』私は微笑しながらいつた。

『うむ。』柳澤は、わざと苦い顏をした。

『今日はどんな顏をしてゐるか。此間、晝、日の照つてゐる處へ連れ出したら顏の蒼白い處へ白粉の斑に剝げてゐるのが眼について汚くつてたまらなかつた。』

さういつて柳澤は顏を顰めて、

『どう見ても高等淫賣としか見えない。』

『藝者とも何處か違うしねえ。』

『そりや藝者と違うさ。此間鳥安に連れていつた時に鳥安の女中が默つて笑つてゐたが、これは淫賣をつれて來たなと思つたのだらう。少し眼のこえた者には誰れが見てもすぐそれと分るもの。』

柳澤は頻りにお宮のことを氣にして話をする。柳澤がそんなに女といふものに興味を持つて話をするのは、まだ一緒に學校にいつてゐる時から十年の餘知つてゐる仲だが、つひぞこれまでに聞かぬことである。

『これは、餘程執心なのだナ。』と、私は、ます〳〵柳澤の心が飲込めて來るにつれて、どうしてもこれは吾々の間に厭な心持ちのすることが持上らずにはゐない。困つたことだと、秘密に腹の中で太息を吐いてゐた。

『それでもこの間歌舞伎座の立見につれていつてやつたら、丁ど重の井の子別れの處だつたが、眼を赤くして涙を流して默つて泣いてゐた。あれで人情を感じるには感じるんだらう。』

柳澤は、そのお宮の涙をしをらしさうにいつた。

『歌舞伎座にもつれて行つたの？』

『うむ。』

『何時？』

『やつぱり此間鳥安につれて行つた時に。』柳澤は濟まない顔をして、さういつて、ちよつとそこを間切らすやうに『立見から座外に出ると、かう好い月の晩で、何ともいへないセンチメンタルな夜だつた。僕は默つてゐるし、お宮も默つてとぼ〳〵と蹤いて來てゐたが、ふと月を見上げて「い〻月だわねえ。」と、いひながら眞白い顔を此方に振り向けた時には、まだ眼に涙を滲ませてゐて、そりや綺麗なことは綺麗だつたよ。』

流石に柳澤も思ひ入つたやうにいつた。

私は、それを聽いてゐて胸が塞がるやうな氣がした。私が僅かばかりの錢の工面をして、お宮にたゞ逢ふのでさへ精一ぱいでゐるのに柳澤はもうお宮とそんな小說の中の人間のやうな樂しい筋を運んでゐるかと思ふと、世の中のものが何も斯も私を虐げてゐるやうな悲痛な怨恨が胸の底に波立つやうに衝動げて來た。さうして餘處目には氣拔けのしたものゝやうに呆然として自分一人のことに思ひ耽つてゐた。すると自分が耐力もなく可哀相になつて來て、今にも泣き溢れさうになるのを凝乎と呑込むやうに抑へてゐた。

やゝ暫く經つてから取着手もない時分になつて、

『歌舞伎座にもつれて行つたのか！』と、曖昧な勢のない聲を出した。

『その歸途に鳥安にいつたのだ。』

そして私は腹の中で、先日お宮が、

『書生らしい、厭味のない人よ。鳥安を出てから淺草橋の處まで一緒に歩いて行つたの。「僕は此處から歸る。電車賃だ。」と、いつて十錢銀貨をすうつと私の掌に載せて、自分はそれきり電車に飛び乘つてしまつて。』

かういつて思ひ味ふやうにしてゐたのを、自分でもまた想ひだして、下らなく繰返してゐた。

そこへ靜つと襖を明けてお宮が入つて來た。後からも一人若い女がつゞいて入つた。

『あらッ！』とお宮は、入つて來るから丁ど眞正面にそつち向さに趺座をかいてゐた柳澤の顏を見て燥いだやうに笑ひかゝつた。

毎時よく例の小豆色の矢絣のお召の着物に、濃い藍鼠に薄く茶のしつぽうつなぎを織り出したお召の羽織を着てやつて來たのだが、今日は藍色の地に細く白い雨絣の銘仙の羽織に、やつぱり銘仙か何かの荒い紫紺がゝつた綿入れを着てゐるのが、

良い家の小間使か、ちよつとした家の生娘のやうで格別悪毒氣なく美しく見えた。
さうして私は、柳澤が何時か小間使といふものが好きだ。といつて、嘗て大倉喜八郎の家へ新聞記者で招待せられた時、そこで一人の美しい小間使が眼にとまつて、
『僕はあんな女が好きだ』と話してゐたことを思ひ出してゐた。
白い顔に薄く白粉をして、兩頰に少し縱に長い靨笑を刻みながら、眩しいやうな長い睫毛をして
『どうしてゐたの？　あなた。暫らくぢやないの。』
やつぱり柳澤の方に向つてさういひながら餉臺を挾んで柳澤と向ひ合つて座つた。
そしてその横手に默つて坐つてゐる私の方をチラリと振向きながら、
『ゐらつしやい！』と、一口低い調子でいつた。
『よく賣れると思はれて何時來たつてゐないね。』　柳澤はじろ／＼お宮を瞻りながらいつた。

『あら、あれから來たの。だつて來たと言はないんだもの。』
『僕は來たつて、來たといふことを誰にもいはないもの。名なんかいやあしないものの。』
さういふ名をこんな土地で明して、少しでも女に好かれやうとするやうなことは自分はしないのだといはぬばかりにいつた。
『あなたの名は何といふ名？』
『俺には名なんかないのだ。』
今にも對手を嚙み付くやうな恐ろしい顏をしてゐながら柳澤は頻りに輕口を利いて女共の對手になつてゐた。
『ぢや、名無し權兵衞？』も一人の十六七の瓢簞のやうな形の顏をした口先のませた女がいつた。
『あゝ、僕は名無しの權兵衞。』

『好い名だわねぇ。』

『うむ、好い名だらう。』

柳澤は、まるで人が違つたやうに氣輕に饒舌つてゐた。

『今日お前は何時の餘所ゆきと違つて大變直な生な身裝をしてゐるねぇ。』

私は、お宮を見上げ見下していつた。

『うむ。僕は、あんなお召や何かあんな物を着たのよりも、此樣な風をした方が好きだ。……君は好い着物を持つてるねぇ。』

柳澤がよくいひさうなことをいつた。

『さう。これがそんなにあなたに氣に入つて？』お宮は乳のまはりを見廻しながらさういつて、柳澤の方を見守りつゝ、

『あなたも今日は大變好い着物を着てるねぇ。……今日はあの絣を着て來なかつたの。あれが私大好き。活潑で。……だけどその着物も好い着物だわ。此度拵へたの？』

『うむ。好いだらう。』柳澤も自分の胸の邊を見まはして、氣持ちよさゝうに言つた。

『私も此度好い春着を拵へたわ。……もう出來て來たわねぇ。』

お宮はも一人の小女をちよつと誘ふやうに見ていつた。

『どんな着物だい？』私は默つてゐた口を開いた。

『どんなつて、ちよつと言へないねぇ。羽織は縮緬の紋付、着物は上下揃つた、やつぱりお召さ。』

そこへ誂へた壽司が來た。

『君達も食べないか。』私は女どもにすゝめながら摘んだ。柳澤はもう默つて口に押込んでゐた。

『食べようねぇ。』お宮はも一人の女に合圖して食べた。

柳澤は口をもぐ〳〵させながら指先の汚れたのを何で拭かうかと迷つてゐた。

『あゝ拭くもの？……これでお拭きなさい。』

お宮は女持ちの小い、唐草を刺繍した半巾を投げやつた。

柳澤はそれで掌先を拭いて、それから茶を飲んだ後の口を拭いた。

『君、あつちい二人で行つたらいゝぢやないか。』

柳澤は氣を利かして靜と私に目配せした。

『うむ。……まあ好いさ。……君はどうする？』私は自分でも明かに意味の解らないことをいつて訊いた。

『僕は、お前と此處で話しをしてゐるねえ。』柳澤は浮戯けたやうにも一人の女の顏を窺くやうに見ていつた。

私は、自分の愼むべき祕密を人にあけすけに見てゐられるやうな侮辱を感じたけれどこんな處に既に來てゐてそんな外見をしなくつても可いと思つたから、遠慮をしないでお宮をつれて別の部室に入つていつた。

間もなく私達は其待合を出て戻つた。

『ふん！　あんな變な女を連れて來て。』

柳澤は人形町の電車通りまで出て來ると、吐き出すやうにいつた。

『君は、どうもしなかつたかね？』

『どうもするもんか。あんな小便臭い子供を。お宮はあんな奴を、自分の妹分だといつて、あれを他の客によく勸めるんだ。だれがあんな奴を買ふものがあるもんか！』

中二日置いて、この間からいつてゐた、外套を買つてやる約束があつたのでまたお宮に逢ひに行つた。清月にいつて掛けるとお宮はすぐやつて來た。

『今日外套を一緒に買ひにゆかう。』

『今日。』と、お宮は嬉しさを包み切れぬやうに微笑ひ〳〵『これから？　遲かな

くつて？』行きたうもあるし、躊躇ふやうにもいつた。

『ゆかうよ。遲かない。』

『さうねえ。何だか私、今日怠儀だ。……あなた一人行つて買つて來て下さい。私何處へもゆかない、此處に待つてゐるから……その邊にいくらもある。』と、無愛相にいふ。

『いや、それはいけない、僕は一緒に物を買ひにゆくのが樂みなのだ。』

先達てから、

『私コートが欲しい。あなた表だけ買つて下さい。裏は自分でするから。』

といつてゐた。私はお前と足掛け七年一緒にゐたけれどコート一枚拵へてはやらなかつた。それに三四度逢つたばかりの蠣殼町の賣女風情に深切立てをしていくら安物とはいひながら女の云ふがまゝにコートを買つてやるなんて、どうしてそんな氣になつたらうかと、自分でも阿呆のやうでもあり、また可笑しくもなつて考へて見た。さうすると先き立つものは涙だ。

『あゝ、おすまには濟まなかつた。七年の間碌々着物を一枚着せず、何時も褄掛けの水仕業ばかりさせてゐた。』

さう思ふと、賣女にたつた拾五圓ばかりのコートの表を一反買つてやるにしても、お前に對して濟まないことをするやうで氣が咎めたけれど、また

『俺が、蔭でこんなに獨りの心で、あゝ彼女には濟まない。と思つてゐるのをも知らないで、九月の末に姿を隱したきり私の處には足踏みもしないのだ。あんまりな奴だ。……あんまり非道いことをする奴だ。……ナニ構ふものか、お宮にコートを買つてやる！　買つてやる！　おすまが見てゐなくつても可い、面當てにお宮に買つてやるんだ！』

誰れもゐない喜久井町の家で、机の前に我れながら消然と趺座をかいて、そんな獨言をいつてゐると自分の言葉に急きあげて來て悲しいやら哀れなやら悔しいやら

に洪水の湧き出るやうに涙が滲んで何も見えなくなつてしまふ。

それで當然ならば正月着の一つも拵へなければならぬ冬なかばに、またありもせぬ身の皮を剝いだり、惜しいのばかり取殘して置いた書籍を賣つたりして漸と入るだけの錢を工夫してお宮の氣嫌をとりにやつて來たのだ。

それを、さぞ喜ぶかと思ひの外、有難うともいはないで、何か厭な處へでも行くやうに忘儀さうにいふ。女といふものは斯樣なにも我儘なものか、今に罰が當るだらう。と腹の中で思つたが此間は柳澤と一緒に外に出て、歌舞伎座や鳥安に行つたことがあるので、私もぜひ何處かへ連れていきたくて仕方がなかつた。それで『この不貞腐れの賣女め！』と思つたが、素直に嬉々と立たうとしないのが業腹で、どうかして氣嫌よく連れてゆかうと思つて

『ねえ行かうよ。そして歸途に何か食べよう。』と、優しくいふと、

『さう、ぢや行かうかねえ。すぐそこらに幾許もあるよ。』いけ粗雜な口でいふ。

『あゝ、お前は先刻からすぐ其處らで買ふつもりでゐたの？　それで私に一人で行つて買つて來てくれといつたのか。』

『さうさ！　あんな物何處にだつてあるよ。』

『いや、そりやいけない。何處かもつと好い處にゆかう。』

『日本橋の方へ？』

『あゝ。』

『さう、ぢや私ちよつと自家へ歸つて主婦さんにさういつて來るから。』

と、いつてお宮は歸つていつた。間もなくやつて來て、今度は前と打つて變つて、過日一週間も逢はないでゐて久し振りにお宮のゐる家の横の露地口で出會つた時のやうにげらゲラ顔を崩しながら

『自家の主婦さん、「雪岡さん深切な人だ。緩りいつてお出で」と、いつてゐたわ！』

此度は、そんなことを言やあがる。何といふむらつ氣の奴だらうと癪に障つたけ

れど、一緒に連れ出したいのが腹一ぱいなので氣嫌を直して行くといふから、此方も嬉しくつて外に出た。

『主婦さあ、「日本橋の松屋においで、松屋が安くつて好いから」と、いつてゐたわ。うちの主婦さあも彼店で買ふの、』

お宮が氣の浮いた時によく出す主婦さあといふやうな調子で聲を出しながら嬉々として歩いた。

『安いといつたつて、何程違ふものか。』と思ひながら

『ぢやそこへ行かう。』私は、お宮の云ふとほりになつた。

蠣殼町から汚い水の澱んだ堀割を新材木町の方へ渡つてゆくと、短い冬の日はもう高い棟の彼方に姿を隱して、夕暮らしい寒い風が問屋物を運搬する荷馬車の軋つて行く跡から涸き切つた砂塵を卷き揚げていつた。

柳澤の言草ぢやないが、かうして連れ出して見ると、もう暗い冬の日光の照りやんだ暮れ方だからまだしもだとはいひながら今更にお宮の姿が見る影もなくつて、例のお召の羽織はまあ可いとして、その下には變な唐草模樣のある友禪めりんすの袷衣か綿入れを着てゐるぢやないか。それが忙がしさうに多勢の往來してゐる問屋町の前を通つて行くのがひどく目に立つて、私は折角の思ひに連れ出してゐながら、獨り足早に颯々と先きに立つて歩いた。

そんな風をした女をつれて松屋へ入つて行くのが冷汗をかくやうであつたが誰れも知つた人間に遭ひはしないだらうかと恐る〳〵二階に上つてゆくと、よくしたもので二階のすぐ上り口の鼻先に知つた人間が夫婦で買ひ物をしてゐる。私はちよいとお宮の袖を引張つてすうと物蔭に隱れてしまつた。間もなく其等が降りていつたので私は恥しさうに賣場の番頭の前に安物の下着のやうなめりんす友禪を着たお宮をつれて行つた。

すると、お宮が丁どお前と同じことだ。どうして女といふものはあゝなんだらう。

お前に何時か袷衣にするからといつて紡績物の絣を買つた時にどうだつたらう、私が見立てゝ買つて來てやつたのを、柄が氣に入らぬからといつて、何といつた？

『あなた、そんな押付けるやうなことをいふもんぢやないわ、何か買つて來た時は――「お前に斯樣な物を買つて來てやつたが、どうだい、氣に入るか」つて、先づ訊くものよ。』

そんなことをいつた。あの時お前は、先の亭主は、それは深切であつた、深切であつたと、よく口癖のやうにいつてゐたから、

『それはお前の先の亭主はそんなことをいつてお前を可愛がつたか知れないが、俺はそんなことをいふのは厭だ。』

と、いつて笑つてやつたら、その時お前は氣嫌惡さうな顏をしながら笑つた。でも、やつぱりその柄が氣に入らないからといつて、折角私とその呉服屋の息子とで見立てゝこれが好いときめた物を、また他なのを子僧に持つて來さして比べて見た。

そしてやつぱり先のがお前にも氣に入つた。それから早速仕立てゝ着て見たら、

『あなた、これはなか〳〵好い柄ですよ。姉の處に着て行つたら、「好いのが出來たねえ」つて、引張つて見てゐました。』

さういつたぢやないか。

お宮がそのとほりだ。

たかゞセルのコートを一枚買ふのに、いろ〳〵番頭の出して見せる品物を、

『あゝこれが好い！』と、手に取上げてゐるかと思ふと、後から變つた柄のが出ると、

『あゝこの方が好いわ！』そしてまた其方に手を出す。

『ぢや、その方に定めたらいゝだらう。』と急くと、

『やつぱり此方の方が好いわ。』と、指を一本口の中に入れて考へたやうにしてゐる。私は番頭の手前つく〳〵穴にも這入りたくなつて、

『ぢや、そつちのにするさ。』

『……』

『これも、なか〳〵およろしい柄でございます。』

番頭がさういつて、お宮が手放した方を取上げて斜に眺めてゐると、

『ぢやあ、あつちにしやうか？』かうだ。

『さあ〳〵!!　もう可い加減にしてどれかに早くきめたらいゝぢやないか。』私は焦れつたくなつて、せき立てた。

『いえ、どうぞ御ゆつくりと御覽なすつて下さいまし。』番頭はお世辭をいつた。

『これがおよろしいぢやございませんか。』こんどは先のと違つたのを取つて見た。

『ぢや、あれにするわ！』お宮は口から指を出していつた。そして遂に番頭が二度めに取上げたのにきめた。

きめたのは可いが、後で聞くと、家へ持つて歸つてから多勢にいろ〳〵にいはれて、翌日自分でまたわざ〳〵松屋まで取換へにいつて、他なのを取つて來ると、また主婦や他の賣女どもに何とか斯とかいはれて、此度は電話をかけて持つて來てもらつて、多勢で見比べたが、やつぱり元のにきめたのださうな。

私はそんなことを聞いてから、お宮といふ奴はよつほど浮氣な、始終心の動搖いてゐる賣女だと、ちよつと厭になつたが、それでもやつぱり止められなかつた。

松屋から歸途に食傷横丁に入つて、彼處の鳥料理に上つた。私は海鼠の肴で飲けぬ口ながら、緩りした氣持になつて一ぱい飲みながら、お宮のために鳥を燒いてやつて

『どうだ？　甘いか。』と訊くと

『あんまり甘くないわねえ。……私今日晝から齒が痛いの。』

さういつて澁面をして、口を歪めてすゝり込むやうな音を立てゝゐた。

その夜遲くなつてから

『俺はもう歸らう！』

考へてゐると、段々つまあらなくなつたので、私はむくりと起上つて此方もあんまり口を利かないで戻つて來た。自家に戻るといへば可いが、やう〳〵電車に間に合つて寒い深更に喜久井町に歸つて來ると婆さんは、今晩もまた戻つて來ないと思つてか、疾に戸締りをして寢てゐた。どん〳〵叩いて起すと、

『あなたですか、また遲くかへつて！』

と、ぶつ〳〵口の中でいひながら戸を明けてくれた。

私は押入れを明けて氷のやうな蒲團の中へ自棄糞にもぐりこんで軒下の野良犬のやうに丸く曲つてそのまゝ困睡した。

老婆さんは、前にもいつたやうに屹度お前や柳町の入れ智恵もあつたのだらうが、私に此家のうちを出ていつてくれといつて、後には毒づくやうに言つて追立てやうとした。

私も、お前が何處にどうしてゐるか、それを知りたいばかりに喜久井町の家で鬱ぎこんで濕つぽい日を暮してゐるものゝ、そこにゐたつて所詮分るあてのないものとなれば何處か他の、もつと日當りの好い清洒とした間借りでもしやうかと思つてゐたが、それにしても六年も七年も永い間不如意ながら自分で所帶を以つて食べたい物を食べて來たのに、これから他人の家の一間を借りて、戀でも情でもない見知らぬ人間に氣兼ねをするのが私には臆劫であつた。それでづる〳〵にやつぱり居馴れた喜久井町の家に腐れ着いてゐたのだ。

すると弟の柳澤のゐた、あの關口の加藤の二階が先達つてから明いてゐて、柳澤の處の老婢に

『雪岡さん、本當にお出になるんでせうか、おいでになるんなら、なるんでそのつもりで明けておくから。』

といつて、加藤の家の主婦さんが傳言をしてゐたといふから、それで喜久井町の家の未練を思ひ切つて其家へ移ることに決心した。

それは確か十二月の十七日であつた。宵から矢來の婆さんのところの小倉の隱居に頼んで置いて荷物を運んでもらつた。

萎えたやうな心を我れから引立てゝ行李をしばつたり書籍をかたづけたりしながら其處らを見舞はすと、何斯につけて先立つものは無念の涙だ。

『何で自分はこんなに意氣地がないのだらう。男が斯樣なことでは仕方がない。』

と、自身で自身を叱つて見たが、私にはたゞ耐力もなく哀れつぽく悲しくつて何か深い淵の底にでも滅入りこんでゆくやうで耐え性も何もなかつた。

小倉に一と車積み出さしておいて、私は散かつた机の前で老母の膳立てしてくれた朝飯の箸を取り上げながら

『お老母さん、長いことお世話になりましたが、私も今日かぎり此家を出てゆきます。もう此家を出てしまへば私とおすまやあなた方との緣もそれで切れてしまひます。七年の間には隨分あなたやおすまに對して非道いことをいつたこともありますが、それは勘辨してもらひます。……私も出て行つてしまへば、もうおすまをどうしやうとも思ひませんから安心して下さい。……眞實におすまはどうしてゐるんです。私がかうして綺麗に引拂つて出てゆくんですから、それだけ言つてきかしたつて別條ないでせう。』

私は心から詫びるやうな氣になつて優しくいつた。すると老母さんはどう思つたか、屹度そんな言葉には何とも感じなかつたらうが、膳を置いてゆきがけに體を半分襖に隱すやうにして

『おすまは女の兒の一人ある年寄の所に嫁いでゐます……』

老母さんの癖で言葉尻を消すやうに唯それだけいつて、そのまゝ襖をぴたりと閉めて勝手の方へ行つてしまつた。

私はそれを聽くと一時に手腕が痲痺れたやうになつて、そのまゝ兩手に持つてゐた茶碗と箸を膳の上にゴトリと落した。一と口入れた御飯が、もくし上げて來るやうで咽喉へ通らなかつた。

そして引越の方はそのまゝ小倉に任せておいて私はまるで狂氣のやうになつて家を飛び出した。

『あゝ、七年添寢をしてゐたあの肉體は、もう知らぬ間に他の男の自由になつてゐたのだ。あゝもう未來永劫取返しのつかぬ肉體になつてゐたのか！』

と、心を空にその年寄だといふ娘の子の一人ある男の顏容などを種々に空想しながら、矢鱈に道を歩いていつた。

さうして過日矢來の老婆さんが

『どうもおすまさんは傳通院の近くにゐるらしい。』

と、いつたことを思つて山吹町の通りから逸散に小石川の方に出て傳通院まで行つて、彼處の裏邊りのごみ〳〵した長屋を軒別見て廻つた。そして喪然疲れた脚を引擦りながら竹早町から同心町の界隈を當度もなくうろ〳〵驅けまはつてまた喜久井町に戻つて來た。

『もう皆な小倉さんが持つていきなすつたんですよ。もう何にもありやしません。』

老婆さんは、何しに來たかといふやうに言つた。

段々減つてゐた私の所持品といつては小い荷車一つにも足らなかつた。小倉は暇に任かせて近い處を二度に運んでいつた。

さうなくてさへ薄暗い六疊二間が伽藍として荷物を運び出した後がまるで空家のやうに荒れてゐた。

私は老母さんのぶつ〳〵言つてゐるのを尻目にかけながら座敷に上つて喪心したやうにどかりと尻を落してぐつたりとなつてゐた。

家外は靜かな暖かな冬の日が照つて、何處かそこらを歩いたらば、どんなに愉快

だらうと思ふやうにカラリと空が晴れてゐた。

漸やく立ち上つて私は其處らの家ん中を見てまはつた。すると臺所の板の間に鼠入らずがあるのに氣がついて、

『あゝ、これは高い錢を出して買つたのだと思ひながら、方々の戸棚を明けて見るといろんな物が入つてゐる。よく二人の仲が無事であつた時分に私が手傳つて西洋料理をこしらへて食べた時のパン粉やヘットの臭ひがして、戸棚の中に溢れてゐる。小抽斗の中には新らしい割箸がまだ澤山にある。

『お客に割箸の一度使つたのを使ふのは、しみつたれてゐますよ。あんな安いものはない。それでもよく黑くなつたのを出す家がありますよ。私はあんな人氣が知れない。』

さういつて割箸の新しいのなどには缺かさなかつたお前の効々しい勝手の間の働き振りなどを、私はふと思ひ起して暫時惚然と鼠入らずの前に立ち盡して考へ込んでゐた。すると、

『なんです？』

老母さんが四疊半の部屋から顏を窺けて私が鼠入らずの前に突立つて考へてゐるのを見て

『あなたその鼠入らずまで持つておいでなさるんですか？　それはおすまに遣るんぢやありませんかおすまにやるとおいひなすつたんちやありませんか。』

口の中で獨語でもいふやうにぶつくさいつた。

私は癪に障つたから、道具屋を呼んで來て其奴を叩き賣つてやらうといふ考へが起つた。

なるほどこれはお前に遣るとはいつたことはあるやうだが、矢來の老婆さんの處に來ての話しにも

『お姑さん、此次雪岡が來たら、さういつて所帶道具などは安い物だ。後腐りのな

いやうに何も斯も賣つて仕舞ふやうにいつて下さい。あんな物が何時までも殘つてゐて始終眼についてゐると却つて種々なことを想ひ起していけないから。』

と、さういつてゐたといふのを思ひ浮べたから、私は外の通りに出て古道具屋を探したが、一軒近くにあつた家では亭主が出てゐて、ゐなかつた。それでまた『え、面倒くさい！』と思つて老母さんのいふがまゝに打遣らかして到頭喜久井町の家を出て加藤の家へやつて來た。

加藤の家では主婦が手傳つて小倉と二人がゝりであの大きな本箱を二階に持つて上つて置き場を工夫してゐる處であつた。

南向の障子には一ぱい暖かい日が射して、そこを明けると崖下を流れてゐる江戸川を起して牛込の窪地の向に赤城から築土八幡につゞく高臺が糢糊と靄にとざゝれてゐる。砲兵工廠の煙突から吐き出す毒々しい煤煙の影には遠く日本銀行かなんかの建物が微かに眺められた。

私は、そこの欄子窓の閾に腰をかけてつひ此の春の初めまでゐた赤城坂の家の屋根瓦を彼れか此れかと遠目に探したり、日本橋の方の人家を眺めわたしたりして、いくらか伸々とした氣持ちになつてゐた。

まだ一緒にゐる時分よく先の中、お前が前の亭主と別れて歸つた時の話しをして、四年前一緒になる時にも仲に立つた人間が、

『おすまさんも滿更惡くもなければこそかうして四年もゐたのだから、あの人の顏を立てゝ半歲の間はどんな好い緣談があつても嫁かないようにして下さい。』

と、いつて別れて戻つたと言つたぢやないか、私とは滿七年近くも一緒にゐて、それで私がまだ現在お前の親の家にゐる間にそんなことをしたかと思ふと、どれほど私の方であゝ濟まぬことをした、苦勞をさした、氣の毒である、可愛さうだと思つてゐても、さう思つてゐればゐるほどお前等一族の者の不人情な仕折ちを胸に据

忍かねて、その儘あのとほりの手紙を寢床の中で書いたのだ。

柳町の新吉の奴、どうしてくれやう。まだ暑い時分であつた。私が、ともかくもお前と別れることになつて、當分永い間東京に歸らぬつもりで函根にいつて、二十日ばかりゐて間もなくまた舞ひ戻つて來た時、

新橋に着くとやッと青の電車の間に合つて、須田町まで來ると、既う江戸川ゆきはなかつた。やう〳〵電車賃が片道あつたばかりだから俥にも乘らず、幸ひ夏の夜で歩くのによかつたから、須田町から喜久井町までてく〳〵歩いて戻つた。

思ひ切つて一旦出て去つた家へ歸るのは、それは仲に入つて口を利いた柳町に對しても好かあないと思つたけれど、一時過ぎてから門を潜つて庭から廻り四疊半の老母さんに聞えぬやうにお前の枕頭と思ふ六疊の緣側の戸を叩くと、

『あなたですか!?』

と、お前が眼を覺して内から忍ぶやうに低聲で合圖をしてくれた。

私は、やれ嬉しやと、お前が起き出て明けてくれた雨戸から靜と這入りこんだ。夏の夜更の、外は露氣を含んで冷々と好い肌觸りだけれど部室の中は締込んでゐるので蒸つと寢臭い蚊帳の臭ひに混つてお前臭いにほひが、夜道に歩き疲れた私の肉體を浸すやうにそこらに籠つてゐた。私は何とも言ひ難いそのにほひの懷しさにそのまゝ蚊帳の裾をはねて寢床に轉げ込むと、初めの内はやさしく私を忍ばせたお前が何と思つたか寢床に横はりながら

『あなた彼方いつてお休みなさい。別にあなたの蚊帳を吊つてあげますから……此處は私の寢る處ですぐ。』

と、神經の亢進つたやうにはねつけた。

『いんにや、此處でいゝ、もう怠儀だ。』

『怠儀だつて、それはあなたの勝手ぢやありませんか。あなたはもう此處を出て去つた人です。一旦切れて仕舞へば、あなたと私とはもう赤の他人ですから、何處か

他へ宿を取るなり、友達の處に行くなり、餘處へいつて泊つて下さい。』

『……』

『ねえ、さうして下さい。此處は私の家です、あなたの家ぢやありません。かうしてゐて明日老母さんに何といひます。あなた私の家の者を馬鹿にしてゐるんだからそんなことは何とも思はないでせうが、私が翌朝お老母さんに對して言ひやうがないぢやありませんか。私がすき好んでまたあなたを引入れでもしたやうに思はれて……』

『……』

『ねえ、さうして下さい。何處か他へいつて泊つて下さい。あなたは何をいつても私の言ふことなど馬鹿にしてゐる。さうなくてさへ柳町の姉を初め自家の者は皆な私が浮氣であなたとこんなことをしてゐるやうに思つてゐるんですから。あなたは、そりや男だし、ちやんとお錢をかけて一人で食べてゆかれるやうにしてある體ですから、浮氣をしたつて可いでせうが、私は少しもそんな考へであなたと今まで一緒にゐたんぢやない。』

さういひながら段々眼が冴えて來たと思はれて、寢床の上に起き直つて無暗と長煙管で灰吹を叩いてゐた。

蚊帳ごしに洩れくる幽暗い豆ランプの灯影に映るその顏を、密つと知らぬ風をして細眼に眺めると、凄いほど蒼ざめた顏に色氣もなく束ねた束髪の頭髪が蓬々と這ひかゝつてゐた。

私は、いひたいだけ言はしておいて、借りて來た猫のやうに敷布團の外に身を縮めてそのまゝ睡りこけた。

翌朝になると、それでも氣嫌よさゝうに

『お老母さんには、柳町に行つても、あなたのことは何にもいはないやうにしてお

くれ。と、いつて置きました。』

さういつた。

『あゝさうか。』

と、いひながら、私は、久振りで口に馴れたお前の手で漬けた茄子と生瓜の新漬で朝涼の風に吹かれつゝ以前のとほりに餉臺に向ひ合つて箸を取つた。

『あなた、またあゝさうかつて、あゝさうかぢや不可ませんよ。老母さんに口留めしてゐる間に二三日の内に下宿なり、間借りをするなり早く他へ行つて下さい。』

さういはれて、私は折角甘く食べかけてゐた朝飯が溜飲になつてしまつた。

三日目に老母さんから聽いたと思はれて、柳町から新吉が凄じい權幕でやつて來た。

私は折から來客があつたので、老母さんの四疊半の方に上つていつた樣子をチラと認たから、わざとその客を引留めて雜談に時を過しながらヒステリーの女見たいに癇癪の強い新吉の氣を拔いてゐた。

『あなた、新さんが、ちよつと雪岡さんに話しがあるといつて、他室で先きから來て待つてゐます。』

お前が、さも新吉の凄じい權幕に懼えたやうに、神經の硬ばつた相形に強ひて微笑を見せながら、さういつて私の部屋に入つて來た。

『雪岡さん、君は一體どんな考へでゐたんです？　つひ此間函根に行く前に奇麗に此女と手を切つて行つたんぢやありませんか。』

私には、新吉のいふ文句よりもその躍起となつて一時血の循環の止つたかと思はれるやうに眞青になつた相形が見てゐて厭だつた。

私は、その毒々しい顏を見ながら、わざとづるく構へて新吉にばかり言ひたいだけ文句を並べさして默り込んでゐた。

『お前さんはづるいよ、人にこんなに饒舌らしておいて。さあ、どうしてくれるん

だ？　雪岡さん、今此處を出ていつて下さい。』

『あなたがそんなに言はなくつても出てゆくさ。併し出てゆくには出てゆくで、私の方でも下宿するなりとうするなり、種々準備をしなければならぬから。』

私は對手にするのが厭で鄭寧にいふと。

『準備をするのはもう何日も前から分つてゐるぢやないか、そりやお前さんの勝手だ。此方はそんなことは知らない。早く此の老母の家を出て行つておくんなさいッ……さあ出て行つておくんなさいッ。』

私がつひ一と口くちを出すと、また圖に乘つて十口も文句を並べた。

『猫や犬ぢやあるまいしそんなに早く出てゆかれるものか。』

『お前さんのやうな道理の分らない人間は猫や犬を見たやうなものだ。何だ教育があるの何のといつて、人の娘を玩弄にしておいて教育が聽いて呆れらあ。……へんッお前さんなんぞのやうな田舍者に江戸ッ兒が馬鹿にされて堪るものか。』

まるで人間を見たことのない田舍の犬が吠えつくやうに狺々いつた。

私は微笑しながら默つてゐた。

『あなた、今日出て行つて下さい。……義兒さんのいふのが本當です。あなたが一體函根からまた此家へ舞ひ戻つて來るといふのが違つてゐるんですもの。』　さういつて新吉の方に向ひて言葉を柔らげて『私が出します。ほんとに義兒さんには忙多しい處を毎度々々此樣なつまらぬことで御心配ばかりかけて濟みません。』

『えゝ、いや。併しおすまさんもおすまさんぢやないか。雪岡さんがいくら戻つて來たつてお前さんが家へ入れるといふのが可くない……』

『えゝ、それはもう私が惡いんです。その事も此の人によくさういつたんです。お急がしい處をどうも濟みません。屹度此の人も出てゆきますから、どうぞもう引取つて下さいまし。……また大きな仕事を何かお請けなすつたつて。』お前はさういつてほかへ話をそらさうとした。

『いえ、えゝ。』と、新吉は得意げな返辭を洩しながら段々靜かになつて來た。

『……あなた、新さんがあんなにいふんですから、どうぞ新さんの爲に別れると思つて此家を出ていつて下さい。』

新吉が歸つていつてからお前は私の傍に戻つて來てさういつた。

『何だ。あの物のいひ振りは。俺はあんな人間がお前の姉の亭主だと思ふと厭だからいはなくとも早く何處か探して出てゆくよ。』

『初めガラッと門をあけて入つて來た時に、あんまり恐ろしい權幕だつたから、私はどうしやうかと思つた。私を打ちでもするかと思つた。私、あれが新さんが厭なの。そりや姉の亭主だから義兄さんにいさんと下手に出てゐれば親切なことは親切な人なんですけれど。』

『なんだ。教育がどうのかうのって。』

『自分一人偉い者のやうにいつて。』　お前もさういつて冷笑つた。

そんな喧しいことがあつたけれど、私がどうしてもづるゝに居据つて出てゆかなかつたので到頭お前の方から姿を隱してしまつたのだつた。

そしていつの間にか既うそんな處へ嫁いてゐたのだと聽いたから、私は、新吉はじめお前達を身を八裂にして裂て喰つてもなほ飽足らぬくらゐ腹が立つてあんたに、お前を何處の街頭でも構はない、見つけ次第打ち殺すと書いたのだ。

加藤の二階で、寂しさ遣る瀬なさに寢付かれぬまゝその手紙を書きながら、どうあつてもお前を殺すといふ覺悟をしてゐると、いくらか今朝からの怨恨が鎭靜して來たやうだつた。

翌朝その手紙を入れた足で矢來の老婆さんの處にゆき

『をばさん、もうおすまの奴ほかへ嫁づいてゐやがるんだ！』

さういつて、私は身を投げるやうにそこに寢轉んだ。

『へえ！　もう嫁いてゐるんですつて？……誰れがそんなことをいひました。』

昨日これ〳〵でお前の老母さんから聽いたといふ話しをすると、

『さうですか。……どうも私にはそんなには思はれませんがねえ。けれどもおすまさんも年がもう年ですから、急いでさうしたかも知れません。』

老婆さんは手頼りないことをいひながら、相變らず狀袋をはる手をつゞけてゐた。

あんなに私がしほれて正直に出たのだからお前の老母さんがよもや嘘をいひはすまい。さうすると嫁いてゐるに違ひない。嫁づいてゐるとすれば、返すがへすも無念だ。さう思ふとその無念やら怨恨やらは一層お宮を思ひ焦れる情を切ながらした。

お宮のゐる家の主婦とも心易くなつて、

『雪岡さん親切な人だ。大事におしよ。』と、いつてゐたといふのをお宮の口からよく聽いた。

『自家の主婦さあ、雪岡さんの處なら待合にゆかないでもあつち行つて泊らしてもらつといでと、いつてゐるのよ。』

『さうか、ぢや僕の處に來てくれたまへ。』

その内私は加藤の家の主婦にも事故を話して點燈ごろから、丁ど今晩嫁を迎へるやうな氣分で嬉々として蠣殼町までお宮を迎へにいつた。

歸途には電車で迂廻して看町の川鐵に寄つて鳥をたべたりして加藤の家へ土産など持つて二人俥を連ねて戻つて來た。

『それは御無理はありません。七年も八年も奥さんのおあんなさつた方が急に一人者におなんなすつたのでは。誰れか一人樂みがなければつまりません。』

と、いつてくれてゐる主婦は、私が女を連れ込んで來たのを快く迎へて枕の心配などしてくれた。

翌朝目覺めると明け放つた櫺子窓から春といつてもないほどな暖かい朝日が座敷

の隅まで射込んで、牛込の高臺が朝靄の中に一眸に見渡された。

『好い景色ねえ。一遍自家の主婦さんと一緒に遊びに來るわ！』

お宮は窓に凭れて餘念もなく遠くの森や屋根を眺めてゐた。

私はまるで新婚の朝のやうな麗かな心持に浸つて、俄かに世の中の何も斯もが面白いものに思ひ做された。

毎時階下におりて食べる御飯を、今日は主婦さんが小い餉臺を以つて上つて、それに二人の膳立てをしてくれた。

私の大好きな小蕪の實の味噌汁は、先の中自家でお前がこしらへたほど味は良くなかつたけれど久しぶりに女氣がそこらに立ち迷うてゐて、二人差向ひでお宮にたき立ての暖かい御飯の給侍をしてもらつて食べてゐると、まるで御飯が咽喉へ飛び込むやうであつた。女といふものは恐ろしいものだが、どうしてまた斯うお腹の具合を良くするものであらう。それに比べると醫者からもらつた胃の藥なんざあ駄目だなあと思つた。

お宮は五圓札を一枚與ると嬉しさを押包むやうに唇をきゆつと引締めて入口まで送つて出た私の方を格子戸を閉めながらさも思ひを殘してゆくやうな嬌態を見せて、

『左樣なら！』と、眼を瞑るやうにしながら猫のやうな纖細い假聲をして何度も繰返しながら歸つていつた。

私は急いで二階に驅け戻つて、お宮の歸つてゆく姿の見られる西側の小高い窓を開いてそつちの方を見送ると、今しもお宮は露路口の石段を上つて表の通路に出で立ちながら腰帶の緩みをきゆつと引締めながら、

『これから歸つてまた活動するんだ。』と、いはぬばかりに鬼の首をも取らんづ凄じい樣子で眼八分に往來を見おろして歩いていつた。

それを見て私は淺ましい考へにつゞいて厭らしい氣がした。

加藤の家に來てから柳澤の家とはすぐ目と鼻とであつたが、お宮がちよい〳〵私の二階に泊りに來るやうになつてからは、一層氣をつけて柳澤の家へは立寄らぬやうにしてゐた。偶にそれとなく入つていつて柳澤の留守に老婢さんと茶の間の火鉢の處で、聞かれるまゝにお前の噂ばなしなどをしたりして、序に柳澤の遊ぶ話など老婢さんが問ず語りにしてきかすのをきいても、それからお宮の處へは餘り凝つてゆかぬらしい。

私は、兎に角にお宮を自分の物にしたやうな氣になつてゐた。

三日ばかり間を置いて、お宮が病氣で休んでゐるといふ葉書をよこしたので、私は親切だてに好い情人氣取りで見舞かた〳〵顏を見にいつた。

平常でさへ賑かな人形町通りの年の市は殊のほか景氣だつて、軒から軒にかけ渡した紅提燈の火光はイルミネーションの明りと一緒に眞晝のやうに街路の空を照して、火鉢や茶簞笥のやうな懷しみのある所帶道具を置き並べた道具屋の夜店につづく松飾りや羽子板の店頭には通りきれぬばかりに人集りがしてゐた。

他人になつた今でも、それを聞けばお前は、またかといつてさぞ顏を顰めるであらうが、年暮に入用があつて故郷から取寄せた勸業銀行の債券が晝の間に着いたので、それを懇意な質屋に以つて行つて現金に換へた奴を懷中に握つて、いゝ氣持ちになりながら人群を縫ふて通つた。

そして三原堂で買つた梅干あめを懷中にしてお宮の家の店先から窺いた。

狹苦しい置屋の店も緣起棚に燈明の光が明々と照り榮えて、お勝手で煮る香ばしいお、せ、ちの臭ひが入口の方まで臭ふてゐる。

早くに化粧をすました姿に明い灯影を浴びながらお座敷のかゝつて來るのを待つ間の所在なさに火鉢の傍に寄りつどうてゐた賣女の一人が店頭に立ち表はれた。

『お宮ちやん內にゐるのはゐますが……。』

『出られないでせうか。』

『雪岡さんかい？……どうぞお上んなさいと、さうおいひ。』奥の茶の間から主婦の聲がした。

『どうぞお上んなさい。宮ちやんゐます。』賣女は主婦の聲をきいてさういつた。

『さあ、どうぞ。……蒲團を……お敷きなさいまし。……雪岡さんといふお名は宮ちやんから度々きいてゐます。また先日は宮ちやんに何より結構なお品を有難うございました。……宮ちやん今家にゐますよ。この間から少し身體が惡いといつて休んでゐます。宮ちやん二階にゐるだらう。雪岡さんがゐらしつたからおいでッて。』

『宮ちやん、汚い風をしてゐるから行きませんて。』

この前柳澤と一緒に來た時來た瓢簞のやうな顏をした小い女が主婦のいつたことを傳へて二階に上つていつた。

『何をいつてゐる！……汚い風をしてゐたつて構やしないぢやないか、お馴染の方だもの。』おかみは愛想笑ひをしながら『もう我儘な女ですからさぞあなた方にも遠慮がありませんでせう。この間から齒が痛いとか頰が脹れたとかいつて、それは大騷ぎをしてゐるんですよ。……もう一遍いつて雪岡さんがゐらしつたんですから、そのまゝで可いから降りておいでッて。』

お宮は階段を二つ三つ降りて來て階下を覗きながら、

『あはゝゝ！』と笑つた。

二三日逢なかつた懷しい顏は櫛卷に束ねた頭髮に、蒼白く面窶れを見せて平常よりもまだ好く思はれた。

『どうしたの。そのまゝだつて構やしないぢやないか。……何處か二人でその邊を、年の市でも見ながらブラ〳〵歩いてゐらつしやいまし。……どうだい、雪岡さんが見えたから頰の痛むのが癒つたらう。何處か二人で其處らを散歩しといで……。』

『えゝ。あなたどうする？　ゆく。ぢや私も行くからちよつと待つてゐて下さい。』

私の方を見ながら媚びるやうにいつて嬉々二階に駈け上つていつた。

私は主婦と長火鉢の向に差向つてさういふ賣女を置く家の樣子を見ぬ振りをしながら氣をつけて見てゐた。堅氣らしい丸髷に結つてぞろりとした風をした女や安お召を引張つて前掛けをした女などがぞろ〳〵二階に上つたり下りたりしてゐる。

勝手口に近い隣の置屋では多勢の賣女が年の瀬に押迫つた今宵一夜を世を棄て鉢ちに大聲をあげて、

『一夜添ふても妻は妻。假ひ草履の鼻緒でもう……。』

ワン〳〵鳴るやうに燥やいでゐる。私は淺間しく思つてきいてゐた。

やがてお宮は先のまゝの風で降りて來て、

『私もうこのまゝで行くわ！』此の間のめりんすの綿入の上に羽織だけ例のお召を引つかけてゐる。

『そのまゝでいゝとも。』

主婦は、『御夫婦で仲よう行つてゐらつしやいまし。』と、煙草を並べた店頭まで送り出した。

街路はぞろ〳〵と身動きもならぬほどの人通りである。

『どつち行くの。』お宮は例の行儀の惡い惡戯娘のやうな風の口をきいた。

『さあ、どつち行かう。あんまり人の通つてゐない方がいゝ。』

私は、人眼のない薄暗い横丁をお宮と二人きりで手と手を握り合つて歩いて見たかつた。

『もつと人の通つてゐない方に行つて見やう。材木町の河岸の方にでも。』

『あんな處歩いたつて仕樣がないさ。』お宮は齒が痛むといつて、頰を抑へながら怒つたやうにいつた。

『ぢや何處を歩くの？』

『何處つて何處でも。』

『そんなことをいつたつて仕方がない。お前は何處へ行きたいんだ。』

『私は何處へも行きたかない。』

『ぢや行くのが厭なの。』

『いやぢやないさ。』また怒つたやうにいふ。

『さうか。ぢやもつと歩きい〻靜かな處をゆかうよ。』私はまた横丁に曲りかけた。

『そつち厭！』

『ぢや何方だい？』

お宮の太々しい駄々ッ兒を見たやうな物のいひ振りや態度に、私は腹の中で勃然となつた。

『どつちでもゆくさ。』

『だつてお前、私のゆくといふ方は厭だといふぢやないか。』

さういつて、私は勝手にずん〳〵人形町通りの片側を歩いていつた。

さうして水天宮前の大きな四つ辻を鎧橋の方に向いて曲ると、いくらか人脚が薄くなつたので、頰を抑へながら後から默つて蹤いて來たお宮を待つて肩を並べながら、

『宮ちやん、先刻君の家で階段の下に突立つてゐたあの丸髷に結つた女は何といふの。』

私は優しい聲をして訊ねた。

『だれだらう？　丸髷に結つてゐた。……家には丸髷の人多勢ゐるよ。』

『さうかい。い〻ねえ丸髷。かう背のすらりとした。よく小説本の口繪などにある、永洗といふ人が描いた女のやうに眉毛の糢つと刷いたやうな顔の女さ。』

『あゝ、そりや菊ちやんだ。あなたあんな女好き？』

『あゝ好きだ。い〻ねえ丸髷は。宮ちやんお前も丸髷に結ふといゝ。』

『私嫌ひ！』さういひながらお宮はついと退いた。

二人はまた默つて別れ〳〵に歩いた。鎧橋を向へ渡つて山栗の大きな石造の西洋

館について右に曲ると電車の響も絶えて、株屋町の夜は火の消えたやうに閑寂としてゐた。凍てついた道に私達の下駄を踏み鳴らす音が、兩側の大戸を閉切つた土藏造りの建物にカランコロンと吃驚するやうな谺を反した。

私は折角の思ひでお宮と一緒に歩いてゐながら、女の方が思ふやうに自分に對して和かに靡いて來ぬのが飽き足らなくつて、此方でも拗ねた風になつて、忘儀さうにして歩いてるお宮を後にして颯々と兜橋の方に小急ぎに歩いた。

するとお宮は『あなた何處へゆくの？』と齒をすゝりながら後から聲をかけた。

『ねえ、あなた何處へゆくの？……待つて頂戴よ。』

私はその聲をきくといくらか氣持よく感じながら、人通りのぱつたりと途絶えた暗闇を今までよりもなほ急ぎ足に走つた。

『ねえ。ようあなた。何處へゆくんです？』お宮は躍起になつて後から走つて來る樣子である。私はお宮がそんなにしてゐるのが分ると、先刻から一ぱいに塞がつてゐた胸が忽ち和かに溶けて輕くなつたやうになつた。そして兜橋の上まで來ると欄に凭れてお宮の追つかけて來るのを待つてゐた。

『あなた何處へゆくつもり？　こんな寂しい處に人を打棄つておいて。』眞氣になつて傍に寄つて來た。

『どこへも行きやしないさ。お前が忘儀さうにして歩いてゐるから私は一緒に歩くのが焦つたくなつたばかりさ。』私は冷かな口調でいつた。

『……。』

『私、これから歸つて、清月にいつて菊ちやんを呼んでもらはうか知ら！』獨語のやうに考へかんがへいつてやつた。

『あの女、君とちがつて何だか優しさうだ。』さういひながらも私の心の中はお宮に對して弱くなつてゐた。

『そんなに好けりや呼んだらいゝぢやありませんか。先刻から菊ちやんきくちやん

て、菊ちやんのことばかりいつてゐるんだもの。』

暗黒の中に恐ろしい化物かなんぞのやうに聳り立つた巨大な煉瓦造の建物のつゞいた、だゝッ廣い通りを、私はまた獨りで歩き出した。水道の敷設がへでもあるのか深く掘り返した黒土が道幅の半分にもりあげられて、暗を照したカンテラの油煙が臭い嗅ひを漲らしてゐる。

『あなた、また何處へゆくの？』お宮は追かけて來た。

並んで一緒にゐると佛頁面をして默つてゐるのが氣に入らないので、私は少しも面白くなくつて、物をもいはず、とつとゝ走つた。

『ぢや私もう歸る！』お宮は私の後からさう呼びかけて、途中から引返へしたらしい。暫らくして後の方を振顧つて見ると、お宮は本當に後戻りをして、もう向の方に歸つてゆく樣子である。

さうなると此度は私の方で氣になつて後を追かけた。

『おうい、かへるのかい。ぢや私も一緒にかへる。』

お宮はその聲を聞いてから、前より一層早く驅け出した。

『おうい、まてよ。私も一緒にかへるよ。』さういつていくら呼んでもお宮は何處までも驅けていつた。そしてあらめ橋を渡つて新材木町の河岸を先へさきへと一生懸命に走つた。すると暗い處を無暗に走つて來たので二人とも方向のつかぬ街筋に出てしまつた。

二三間先に走つてゐたお宮ははたと佇立つて、

『どちらへ行くの？』けろ〳〵として訊いた。

私は、やつとそれで取り着く島を見つけたやうな氣になつて、

『こつち行くんだよ。』と、いゝ加減に先に立つて歩いた。

『なぜそんなにぷり〳〵するんだい。』

『あなた私を打棄つてゆくんだもの。』

『お前、私と一緒に歩くのがさも〳〵忘儀さうだから。』

漸つと葭町から人形町の見える處まで來たことに氣がつくと、お宮は、

『あなた、私は身體が惡いんですから、もうお歸んなさいッ。』そんな棄て辭をいつておいて、ついと先に立つて驅けていつた。

私は、思ひ切つて歸つてしまふかと思つたが、何で面白くもない加藤の家の二階にそのまゝ戻れるものか。またのめ〳〵とお宮の後を追ふて一と足後れに置屋に舞ひ戻つて來ると、

『一體どうしたんです？　今宮ちやん、息をはづませて歸つて來て、雪岡さんと喧嘩をしたつて、それつきり、何にもいはないで二階に上つてしまひましたよ。……若い人達のすること私どもに分らない。』主婦は、長火鉢の向に私を坐らせて微笑ひ〳〵いつた。

『あなた方あんまり仲が好すぎるんですよ。』

『そんなこともないですがな。』私も笑つた。

『ほんとにどうしたんです。私、あんな浮氣な人嫌ひ。といつてゐましたよ。あなたどうかしたのでせう。』

『はゝゝゝ。さうか、ぢや解つた。先刻ねえ、此家を出てから、私戯談に此家の菊ちやんのことを、あの女好きな人だつて、ほめたの。それで解つた。』

『何だ、くだらない。二人で痴話喧嘩をしたお尻を私の處へ持つて來たつて、私知らないよ。雪岡さん何か奢つて下さいよ。……あゝさう〳〵お禮をいふのを忘れてゐました。先刻はまた子供にまで好いものを。……ぢやあなに一と足さきに清月にいつてゐらしつて下さい。あとからすぐ宮ちやんを遣りますから。』

『だつて齒か痛いとか、頰が脹れたとかいつてゐるんでせう。』

『なに、昨日一日休んでゐたからもう快いんですよ。わがまゝばかりいつてゐるんですよ。……ほんとにあなたにお氣の毒さまです。あんな女だと思つてどうぞ末永

く可愛がつてやつて下さい。』

腹の中ではお宮の氣心をはかりかねて、眞個に嫌はれたのだらうかと、消え入るやうな心地になつてゐたのが、主婦の物馴れた調子に蘇つたやうな氣になつて、私は一と足さきに清月にいつた。

お宮はぢき後からやつて來た。

『あなた、自家の子にいろんな物をやつてくれたでせう。主婦さんさういつてゐた。……あんなにしてもらふと、私顔が立つていゝの。』お宮は横になりながら宵のことは忘れたやうにいつた。

『しばらくだつたねぇ。』

『わたいもしばらくだわ。』

『お前さつきどうしてあんなに怒つたんだい。』

『あなたが、あんまり菊ちやんのことばかりいふからさ。』

その晩はいつにない打解けた心持ちになつて、私は早く歸つた。

加藤の家へも梅干餡を持つて歸つてやると、老人に老婆は大悅びで、そこの家でも神棚に總燈明をあげて、大きな長火鉢を置いた座敷が綺麗に取形づけられて、まはりが年の暮の晩らしう光るやうに照り映えてゐる。

私とお前と一緒にゐた間は、今年の年の暮はと、正月らしい氣持のしたことはつひぞ一度もなかつたのに、加藤の家の老人夫婦の物堅い氣樂さうな年越の支度を見て、私は自分の心までが稀らしく正月らしい晴やかな氣持ちになつた。

そして翌日の大晦日には日の暮れるのをまちかねてまた清月に出かけた。お宮の來るのを待つて一緒に人形町の通りをぞろ〳〵見て歩いた。

『わたし扱帶が一つ欲しいの。あなた買つてくれる？』お宮は眩しいばかりに飾つた半襟屋の店頭に立ちとまつて、そこに懸けつらねた細くけを捻りながらいつた。

『うむ。』と、私は鷹揚にうなづいた。

『ちや、あの松ちやんにもこの細くけを一つ買つてやつてもよくつて。』

『うむ。』

『何か甘い物を買つていつて、食べやうぢやないか。』

『うむ。』

十日ばかりといふもの風ほこりも立たず雨も降らず小春といつてもないほど暖かな天氣のつゞいた今年の年暮は見るから景氣だつて、今宵かぎりに賣れ殘つた松飾りや　橙が見てゐるうちにどん〳〵なくなつてゆく。

さうして軒から軒を見て歩いてゐるうちに、流石に長く雨を見なかつた空から八時ごろになるとぱら〳〵と大きな雨粒を落して來た。そして見る〳〵うちに本降りになつて來た。不意を喰つた人群は總崩れに浮足だつて散らかつていつた。

『あゝ好い雨だ。早くかへらう。』

夜店の商人が雨を押し上げる思ひで怨めしさうに天を見上げながら、

『もう二時間遲いと早いとで大きな違ひだ。』と、舌打ちするやうにいつてつぶやいてゐるのを、私はしつとりとした好い氣持ちに聞き做しながらお宮を連れて清月にもどつて來た。

平常と違つて客はないし、階下で老婢が茹慈を煮る香ばしい臭ひをきゝながら、その夜くらゐ好い寢心地の夜はなかつた。

年が改つてからも今までのとほり時々お宮を呼んで加藤の家に泊めた。それでゐて私は、お宮を落籍すなら受出してすつかり自身のものとしてしまふことも出來なかつた。

『お前、何時までもこんな稼業をしてゐたつて仕方がないぢやないか。早く足を洗つて堅氣にならなけりやいけないよ。』

『ほんとに私もさう思ふよ。』お宮は太息を吐くやうにしていつた。

『僕が出してあげやうか。』

『出してもらつたつて仕方がない。』

少し眞面目な話しにならうとすると、後はさういつてそらしてしまつた。さういふわけで私もしばらくお宮に會はずにゐた。

すると、忘れもせぬ二月の十一日の夜であつた。日がな一日陰氣に鬱ぎ込んでばかりゐた私は、その夜も、つひそこらをちよいと散歩して來るといつて、水道町の通りをぐるりと一と廻りして歸つて來た。私が入口に入る姿を見ると、すぐ上り口の間で炬燵にあたつてゐた加藤の老人夫婦は聲をそろへて微笑ひながら、

『あツもう一と足の處でした。惜しいことをした。』

『どうしたのです。　誰れか來たのですか。』

『あなたの好きな人が今見えました。』　老婦は笑ひ〳〵いふ。

『好きな人つてだれです？』私は、さういひながら、腹の中ではッと度胸を衝きながら、もしやお前でも夜の人目を忍んでたづねて來てくれたのではないかと思つた。

さう思ふと、お前の顏容から、不斷よく着てゐたあの赤ぽい銘仙の格子縞の羽織を着た姿がちらりと眼に浮んだ。

『ぢや、おすまでも來ましたか。』

『いや、お宮さん。あなたがそこへおかへりになる一寸前、まだ終點まで行つてゐられるか、ゐられないくらゐです。お會ひになる筈だがなあ。お會ひにならなかつたですか。』

『いえ、會ひません。……それで何とかいつてゆきましたか。』

今まで何度來ても、それは此方で玉をつけてやるから來るので、向からつひぞ訪ねて來たことなどなかつたのに、めづらしい。どうしたのだらう。と、滅入つてゐた心が俄に引立つて、これはいくらか。惚れられてゐるのだな、と。さう思ふとそこらが忽ち明くなつて、ぞく〳〵嬉しくなつた。

『そしてこれを家へあげますといつて置いてゐらしやいました。』

老婦はお宮の絹手巾で包んだ林檎を包みのまゝ差出した。手に取上げて見るとお宮と一緒にゐるやうな薫の高い香水の匂ひが立ち迷ふてゐる。

『あゝ、さうですか。何か用があるんだな。』

『えゝ、何か御用がありさうでしたよ。御留守ですと申しましたら、ちよつと其處に立つて考へてゐらつしやいましたが、これをあげますといつて、包みのまゝ置いておかへんなさいました。』

『あゝ、さうですか。でもよく向から今日は訪ねて來たな。』

そんな話をしながら私はしばらく老人夫婦の炬燵にあたつてゐた。

『溫順しい、美しい方ですねえ。今日はいつもよりも綺麗に見えた。あなたがお惚れになるのも無理はないと思ひました。』

『うむ、好い人です。』老人までが今夜は老婦に和してお宮の美しく溫順やかなことをほめた。

『あゝさうですか。あれであんな商賣をしてゐるとは思はれますまい。』

『ほんとにさうですよ。ちつともそんな風は見えません。』

『あの人を出して奥さんにしたらいゝでせう。』今夜はどうしたのか、老人がしきりにさばけたことをいふ。

『まさかねえ、蠣殼町の賣女を女房にも出來ますまいが、妾にする分にはかまはない。尤も私は妾でも女房でも同じこつたから……何か用があるんだなあ。』

『また明日でもおいでになりますよ。何か用がありさうでしたから。』

けれども明日になつてもお宮は來なかつた。ほんとに用があるなら手紙でもよこしさうなものだと思つて待ちあぐんでゐたが、手紙もよこさなかつた。堪えかねて此方から手紙を出して見たが、それに對する返辭もない。到頭耐忍しきれなくつて、その次の次の日に清月まで出かけて行つた。

『この間私の留守のまに君來てくれたさうだけれど殘念だつた。何か用でもあつたの？』

面と向つても默つたまゝ何とも口を利かないので、私の方から口をきつた。そして私は腹の中で、この女の勝手につけてはよく饒舌りながら、氣の向かぬ時は怒つたやうにむつつりしてゐるのを、柳澤によく似た女だなと思つてゐた。

『この間は用があつたけれど、もう何にもない。』

まるで義理で口を利くやうな物の言ひぶりをする。

『けれど來た時はどんな用だつたの。それを聞かないと何だか氣になつて仕樣がない。』

私はやさしく訊いた。

『いつたつて仕樣がない。』お宮はまた怒つたやうにいつた。

それで私もその上強ひて訊かうとはしなかつた。そして横になつてから、

『私、朝鮮に行くかも知れないよ。』と、考へ深さうにしていつた。

『また例の男が何とかいつて來るの。』私はこの女を遠くに手放すのが惜しいやうで、それをきくと忽ち失望を感じながら『そんなに朝鮮なんかへゆかなくたつて、東京でどうかなるだらう。』

『だつて仕樣がないもの。もう女郎にでも何にでも身を賣つて、その金を遣つて此度こそ緣を切つてしまふ。』

そんな話しをしてゐても、さらばどうしたらば可からうかとか、何とか私を賴りに相談を持ちかけるといふ風でもないので、此方もあつけなくつて、勝手にしろと思つて泊らずに早く歸つた。

四五日たつてから、加藤の内に來てくれるやうに電話をかけたけれど、留守であつたり何かして毎時のやうにその日に來なかつた。それで此方からわざ〳〵螺殼町まで迎へにいつた。

『宮ちやん、用があるとか何とかいつてゐましたよ。今ゐません。』女中のお清が一人ゐて、さういつた。

その時分は、私は清月にゆかずに、すぐお宮のゐる家にいつて、主婦やお清を對手にしながら話し込むことがめづらしくなかつた。

『雪岡さん、何にもありませんが御飯を食べませんか。宮ちやんと一緒にお食べなさい。』

私は大きな餉臺にほかの賣女どもと一緒に並んで御飯を食べたりなどしてゐた。お宮が外から歸つて來たので、厭といふのを主婦の口添で無理にさそふて連れて來た。すると關口臺町の坂を上つて柳澤の家の前を通るときにお宮は私と肩を並べて歩きながら、

『此處が柳澤さんの家でせう。』といつた。

私は、いつかお宮に『柳澤さんの家は何處？』といつて訊かれたことがあつた。けれど敎へなかつた。敎へなかつたのは私はこんな尾羽打枯した貧乏臭い生活をしてゐるのに柳澤は毎時洒灑りとした身裝をして、三十男の遊び盛りを今が世の絶頂と誰れが目にも思はれる氣樂さうな獨身で老婢一人を使つての生活むきはそれこそ紅葉山人の小說の中にでもありさうな話で、

『まあ意氣だわねえ！』と、藝者などは惚れつくやうにいふだらうと思ふ。それで私がお宮に柳澤の家を明さなかつたのでもない。私はとかくお宮のことについて今までよりも柳澤と私との間をなるたけ複雜にしたくないと思つたのである。

そのころ柳澤は何處か神樂坂あたりにも好いのが見付かつたと思はれて、正月以來好い鹽梅にお宮のことは口にしなくなつてゐた。

いつであつたか、久振りに柳澤の家を覗いて見ると玄關に背の高い色の白い大柄な一目に藝者と見える女がゐて、お召の着物に水除けの前掛けをしてランプに石油を注いでゐた。私は先生味をやつてゐるなと思ひながら、

『柳澤さんは留守ですか。』と訊くと、
『えゝおるすでございます。』といふ。
『老婢さんは？』
『お老婢さんも只今自分の家にいつたとかでゐませんです。』
藝者は、私の微笑んでゐる顔を見て笑ひ〳〵いふ。
そんなやうなわけであつたから、柳澤はあれッきりお宮をつゝきにゆかないものと思つてゐたのだ。それでちよつと不思議に思ひながら、
『お前柳澤の家を知つてゐるの？』と訊ねた。
『えゝ、……いや知らないの。』
『さうぢやあなからう。』
『眞實よ。知らないの。たゞさうかと思つたからちよつと聞いて見たのさ。』
加藤の二階に上つて來てからもお宮は初めから不貞腐れたやうに懷手をしながら默り込んでゐた。
『どうしたの……大變沈んでゐるぢやないか。』
『……。』
『何か心配なことでもあるの？』
『うむ！　……あなた私に暫らく何にもいはずにおいて下さい。……』さういつてお宮はまた默りこんだ。
私は、あまりに人を馬鹿にしたわがまゝな素振りに赫然となつたが、それでも凝乎と耐えて打遣つてゐた。するとお宮はどう思つたか、
『……柳澤さんは好い人ねえ。』と、突如にいつた。
『うむ。……お前柳澤に逢つたの？』
『ほゝゝゝ。』お宮は莫蓮者らしい妖艶な表情をして意味ありさうに笑つた。
『逢つたのだらう。』先刻から少時の間に恐ろしく相形の變つたお宮の顔を瞻つた。

『そりやあ柳澤に逢はふと、だれに逢はふと、どうだつて構はないのだが……』

『私、あなた嫌ひ！』

『さうか、そりやああんまり好かれてもゐないだらうが。嫌ひな男の處へ無理に來てもらつてお氣の毒だつたねえ。ぢやこれから歸つてもらつても差支えないよ。』

私は耐りかねた胸を靜と抑へながらいつた。

『今晩これから柳澤さんの處へ二人で遊びにいつて見やうか。』

お宮は私は馬鹿にしたやうな横着さうな口の利きやうをする。

『うむ。……お前一人行つて見たら可いだらう。』私は、お宮や柳澤のよく云ふ口振りでいつた。

『あなた行かなけりや厭！』

『あなたが行かなきやあッて。お前が自分でいつて見やうと云つたんぢやないか。』

『……。』

『いつて來たら可いだらう。私はもう寢るから。』

二時間ばかり、氣まづい無言の時が過ぎた。

『さあ、どうするの。僕はもう寢るよ。』私は、勝手にしやあがれと思ひながら促した。

『私も寢る。……あなたが行かないんだも。』

私は、それと聞いて何といふ氣隨な横着な女だらうと呆れながら、

『はゝゝゝ、柳澤の處には私が何もゆかうといつたのぢやない。お前が勝手にゆきたいといひ出したのぢやないか。』私は、不愉快を間切らすやうにわざと高笑ひを發した。

お宮は私が立つて床を敷いてゐる間も凝と座つたまゝ何事か深い考に沈んでゐた。そして突如に、

『私、柳澤さんが好いの。』と、泣き聲を出した。

私はそれと聽くと、どうせそんなことであらうとは思つてゐながらも、自分に對する欲目から、お宮の心は私に靡びてゐないまでも、まさか遠くに離れてゐるとも思つてゐなかつた。然るに先刻からさも思ひ迫つたやうに柳澤の家にゆきたがつてゐたあと、さうと口に出されて見ると、私は木から落された猿といはうか何といはうか自分が深く思ひつめてゐればゐるほど、何ともいひ樣のない侮辱を感じた。私は、ありとあらゆるものから獨り突き放されたやうな失望と怨恨に胸が張り裂けるやうな氣持ちがした。

そして『何だ。柳澤が好いといつて、いはゞ現在戀敵の俺の處に來てゐて、ほろほろ泣き聲を出す奴があるものか。』

と、私は怨めしい、腹が立つといふよりも呆れかへつて可笑くなつて、何といふ見境もない駄々兒の、我儘放題に生れついた女であらうと思つた。

『勝手にしやあがれ。』と思ひながら打遣らかして置いて私は颯々と便處に行つて來て床の中にもぐりこんで頭からすつぽり蒲團を被つた。

『私も寢る。』お宮はまたも泣聲でいひながら後から靜と入つて來た。

私はくるりと背を向けて寢た振りをしてゐた。そしてそのまゝ默つて寢入つてしまはうとしたが、胸は燃え、頭は冴えて寢られる處ではない。お宮の方に向き直つて何か言はねば氣が濟まぬのを凝と息を詰めて耐えてゐた。やゝ三四十分もさうしてゐたが、到頭堪え切れなくなつてお宮の方に向きなほりながら、

『お前眞實に柳澤が好いの？　眞實のことをいつてくれ。僕怒りやしないから。』

弱い聲でいつた。するとお宮は、

『えゝ、柳澤さんが好いの。』やつぱり先刻のやうな泣き聲で返辭をした。

私は消え入るやうな心地になつて凝と堪えてゐたが、果は耐えられなくなつて突如、

『あゝ悔しい！！　……思ひつめた女に友達と見變へられた。』といつて癪つと兩手

で頭髪を引掻いて蒲團の中で身悶えした。

するとお宮は、『おう恐い人!!』と、呆れたやうにいつて蒲團の端の方に身を退いて、背後に扭ぢ向いて私の方を見た。

私は、その時お宮と自分との間が肉體は僅か三尺も隔つてゐなくつても互ひの心持はもう千里も遠くに離れてゐる仇同志のやうな感じがした。

さうなつたら憎いが先に立つて、私は翌朝起きてからもお宮には口も利かなかつた。それでも主婦が階下から御膳を運んで來た時、

『御飯をお食べなさい。』と、いふと、

『私、食べない。』といつたきり不貞くされたやうに沈み込んで凝と坐つてゐる。

私も進まぬ朝飯を茶漬にして流しこんだ後は口も利かずに机に凭れて見たくもない新聞に目を通してゐた。

『わたし朝鮮に行つてしまふよ。』と、また泣聲でいつた。

私は、勝手にしろ。朝鮮にゆかうと滿洲にゆかうと此方の知つたことぢやない。と思ひながらも、

『朝鮮なんかへ行くのは止した方がいゝよ。私がどうかしてあげるよ。』と、優しくいつた。

『あなたにどうしてもらつたつて仕樣がない。』

さういふいひ方だ。

私は素知らぬ振りをして稍しばらく新聞を讀んでゐた。

お宮は默つて考へ沈んでゐる。すると突如に、

『あなた奥さんどうしたの?』そんなことをいつた。

『うむ、何處かへ行つてしまつた。』

『もう何處かへ嫁づいてゐるの?……柳澤さんそんなことをいつてゐたよ。』

それを聽いて私はいよ〳〵柳澤が蔭でお宮にいろんなことをいつてゐるのが見え透くやうに思はれた。

『柳澤がどんなことをいつてゐた？』

私は思はず顏を恐ろしくしてきつとお宮を瞻つた。

『うむ、何にもいやしないさ。』怒つたやうにいつた。

私はます〳〵氣に障つたがそれでも尙ほ凝と堪えて、再び口を噤んだ。

『あなた私が柳澤さんの處へいつたらどうする？』お宮はまた泣くやうな聲でいつた。

『行くなら行つたらい〻ぢやないか。何も私に遠慮は入らない。』

『ほんとに柳澤さんの處にいつてもよくつて？』

『そんなにくどく私に訊く必要はないぢやないか。……私にも考があるから。』

『ぢやどうするの？』

『どうもしやあしないさ。』

『私、あなた厭。何でも直きに柳澤さんにいつてしまふから。』

『私が何を柳澤にいつた？』

『あなた何だつて、私があなたに話したことを柳澤さんにいつた。』

『うむ、そりやいつたかも知れないが、お前と私とで話したことを話したまでど、他人の噂でもなければ惡口でもない。柳澤こそさうぢやないか、私は柳澤を友達と思つてゐるから、お前のことばかりぢやない。もつと大切な先の妻君のことまで委しく打明けて話してゐる。それを柳澤がまた他の者に笑ひ話しにするこそ好くないことだ。私は自身の恥辱になることをこそいへ。決して他人の迷惑になることをいやあしない。』

私は柳澤が、お宮に向つて、雪岡は先の妻君がどうしたとか斯うしたとか蔭口を言つてゐるのがよく分つてゐるので、お宮がそんなことを言つたので、勃然となつ

た。さうして何方が善いか悪いか誰れだつて考へて見ろと思つた。すると、

『そんな自分のことを何も他人にいはなくたつて好いぢやあないか。』

お宮は人を馬鹿にしたやうなことをいつた。

私は忽ち赫つとなつた。先達つても誰れだつたか、柳澤さんといふ人は自己に寛にして他人に嚴なる人だといつてゐた。全くその通りだ。またこのお宮がその通りの奴だ。昨夜から自分で勝手なことをいひながら、さも〳〵私がよくないやうなことをいつてゐる。さう思ふと私は、カツとお宮の横着さうな面に唾を吐かけて、横素頬を三つ四つ張り飛して、そのまゝ思ひ切らうと咽喉まで出しかけた啖唾をぐつと押へてまた呑み込み、いや〳〵今此處でお宮を怒らして喧嘩別れにしてしまふとこれまでお宮にやつてゐる手紙を取戻すことが出來ない。先達つても柳澤の言つてゐたことに、眞野がある女にやつた手紙を水野がその女から取上げて人に見せてゐた。他の男が女にやつた手紙を女から取上げて見るのは面白い。水野は腕がある。

さういつて、柳澤自身もそんなことをして見たさうにいつてゐた。私がもしお宮を怒らしてしまふと不貞腐れのお宮のことだから、きつと柳澤に私のことを何とか斯とかいふに違ひない。さうすりや柳澤もます〳〵好い氣持ちになつて此方からやつてゐる手紙をまき上げて讀むに違ひない。女を取られた上に此方の手紙まで讀まれて笑ひものにせられるのが殘念だ。

と、凝と齒を喰ひ縛る思ひで、また聲を和らげながら、

『君が、僕が厭なら厭でかまやしないよ。僕は諦めるから。』

さういつた。けれども私の本心は、此奴にそんなにまで柳澤と見變られたかと思へば、未練といふよりも面が憎くなつて、どうして此の戀仇をしてやらうかと胸は無念の焔に燃えてゐた。するとお宮は、

『ぢやこれから二人で柳澤さんの處にいつて見やうか。』　と思ひ立つたやうにいつた。

私は、また柳澤とお宮と並べて置いて二人がどうするか見たいと思つたから、

『あゝ行つて見やう。』といつて、それから二人で柳澤の家に行つた。

柳澤は例のとほり二階の机の前に趺座をかいてゐたが私達が上つていつたのを見て、笑ふのは厭だといふやうな顔をして默り込んでまじ〳〵他の顔を瞻つてゐた。

『書生の家だから、何にもないだらう。』

お宮がそこらを見廻してゐるのを見て、澤澤はさういつた。

『好い家ねえ。こんな處にゐたらさぞ勉强出來ていゝでせう。』お宮は腹からいふやうにいつた。

私は疊が冷たかつたから、自身で床の間に積んであつた座蒲團を取つて來て敷いた。

するとお宮はそれを見て、

『あなた自分のだけ取つて來て私のは取つて來てくれないの。』ぷり〳〵していつた。

私は聞いて呆れながら、お宮は、私がそんなにして女の氣嫌を取るほど惚れてゐると自惚れてゐるのだらうかと思つて柳澤の顔を見た。柳澤もお宮のいふことが餘りに妙なことをいふとでも思つたか私と顔を見合せて笑つた。

『俺は、そんなにしてまで君の氣嫌を取らなくつても可いのだ。はゝゝ。』

さういつて、私はわざと聲高に笑つた。

お宮は不貞た面をふくらして默りこんでゐたが、暫らくして私の顔をジロ〳〵と汚さうに瞻りながら、

『あなたその顔はどうしたの？』

柳澤もそれにつれて私の顔を汚さうに見てにやり〳〵笑つてゐた。

私の顔はその時分口にするさへ淺間しい顔をしてゐた。

まだ去年の秋お宮の處へ二度めか三度めにいつた時翌朝歸つて氣がつくと鶏んだ

ことになつてゐた。醫師に見てもらふとその病氣だといつて手當てをしてくれたけれど、別に痛くも何ともなかつたから、そのまゝ打遣つておいた。それが一月の末時分から口や鼻のまはりから頭髪に小い腫物のやうなものが出來て來たからまた醫者に行つて見てもらうと醫者は、顏を澁めて、

『あゝ、來た……。丁どあれが斯うなつて來る時分だ。』といつて、いろ〳〵手當をしてくれて『一時頭髪が脫けてしまふよ……ナニまた直き生えるのは生えるけれど。』さういつた。

果して醫者のいつたとほりに顏の吹出物は段々劇しくなつて人前に出されない顏になつた。さうなると私は故郷に年を取つてゐる一人の母親のことを思つた。

親が滿足に產みつけてくれた身體に若し生涯人前に出ることの出來ないやうな不具な顏にでもなつたら、どうしやう。そのことを考へるとまた夜の眼も眠られないことがあつた。お前のことといひ、たとひ高等地獄とはいひながらお宮の義理人情に叛いた仕方といひ、その上にお宮から感染した忌はしい病の爲に一生不具の身となるやうなことがあつては年を取つた一人の親に對して申譯がない。

お宮が私に叛いて柳澤に心を寄せて行つても、私はその淺間しい汚はしい顏を恥ぢて凝と陰忍してゐた。皆を殺して自殺をしやうかと思つた。

『どうしたつて、これはお前からもらつた病氣だ。』

『ふむ？……』お宮はさういつたきりしばらく默つてゐたが、

『何んだ！　あんまり道樂をするからそんなことになるんだ。……おかみさんにも道樂をするから棄てられたんだらう。……おかみさん何處かで妾をしてゐるといふぢやないか。』

さういつてお宮は荒い口も利かぬやうに堪えてゐる私に毒づいた。そして今お宮のいつたことでまたグツと癪に障つたといふのは、おかみさんは妾をしてゐるといふぢやないかといつた一言だ。私は、お前がもしさういふことをして居りはしないか

といふ心當りがあつたから、何時か柳澤にだけはそれを打明けて話したことがあつた。柳澤から私の蔭口に聞いたのでなければお宮がそんなことを口に出す筈がない。

私はさう思つて凝と柳澤の顔とお宮の顔とを見合した。柳澤は、私がいつかさういふことを話したのを、柳澤だからそんなことをも打明したのだと思ふよりも、そんなことを他人に話した私を、腹の中では馬鹿だと嘲笑ひながら聞いておいて、さうして私とお宮との仲をちくり〳〵とつつく爲めにそれを利用したのだらう。

私は急遽立ち上つて二人を蹴飛ばしてやらうかと、むら〳〵となつたが、また手紙のことを思ひ出して凝と胸をさすつて耐えた。

どうして私がそんなにお宮にやつてゐる手紙のことを氣にするかといふのに、私は今度のお宮のことについても、お宮に尙つて柳澤のことを露ほども蔭口めいたことをいつてゐない。唯一番近くにやつて手紙に、柳澤のことを一と口いつてあつた。それをどうかして柳澤の手に卷きあげられて見られるのが厭だ。さうかといつてその手紙にも決してそんな惡口などをいつてあるのではなかつた。柳澤が私の蔭口をきゝ。また私の方でも丁ど柳澤のするとほりに柳澤の蔭口をいつてゐるであらうとは、かねて柳澤が邪推してゐるのだが、私はこれまでそんなことは少しもない。然るに高等地獄に與へたたつた一本のその手紙ゆゑに柳澤の平生の邪推を確實なものにするといふことが私には何よりも耐えられなかつたのである。

『柳澤さんの處を、いくら訊いても敎へないんだもの。』

默つてゐる私に、おつ被せてお宮はまた毒づいた。

柳澤は、私が敎へなかつた心持ちを讀んだやうな鋭い黑眼をしてにやり〳〵笑つてゐた。

けれども柳澤とお宮との關係がどんなになつてゐるかは、まだよく分らなかつた。

柳澤は、お宮が私に向つてそんなに惡態を吐いてゐる間も始終意味ありげにニヤり〳〵と笑つてばかりゐた。

『もう歸らう。』私はお宮を促した。

『えゝ。』といつたきりお宮は尻を上げやうとはしなかつた。

『あなたまだ社へ行かないの。』

『まだゆかない。』お宮は柳澤に對つては優しい口をきいてゐる。

『おいもう歸らう。』しばらくしてまた私はお宮を促した。

『あなた歸るならお歸んなさい。私もつとゐるから。』

私は、自分がもし一人で先歸つたら後で二人どんな話しをするか、それが氣づかはれた。私は、お宮が柳澤と既に二三日前に三日も蠣殼町の待合に居續けして逢つてゐることをちつとも知らなかつたのだ。

それでお宮にさういはれても私は一人で起たうとせず、やつぱりお宮を促して待つてゐた。

『あゝ歸らう。』と、いつてお宮は到頭立ち上りさうにした。

私はもう起ち上つた。

『すぐ行くよ。あなた階下に降りて待つてゝ下さい。』

さういつてお宮は何か柳澤に用ありさうにぐづ〳〵してゐる。

それを見ては、私も其處にゐるのが氣が咎めたから颯々と降りてしまつた。

やがて五分間ばかりしてお宮は降りて來た。そして私のゐる加藤の家を出る時は碌々挨拶もしなかつたお宮が柳澤の處の老婢に對つてべつたり座つて何樣のお孃さんかといふやうに行儀よく挨拶をしてゐた。

いろ〳〵な素振りで、私にはもうお宮の私と柳澤とに對する本心が解つたから、私は怨恨と失望とに胸を閉されつゝ、どうかして私からお宮にやつてゐる手紙を取返すことに苦心した。

二三日立つてからであつた。私にはふとしたことから柳澤とお宮とが何處かで逢

つてゐるやうな氣がしてたまらない。それで柳澤の家を覗いて見ると老婢が一人留守をしてゐて柳澤はゐない。いよ〳〵お宮の處にいつてゐるに違ひないと思ふと、ます〳〵手紙のことが氣になりだした。で、すぐその足でお宮を置いてゐる家までやつて行つた。

八時頃だつたから賣女は大方出ていつて家内は女中のお清が獨り留守をしてゐた。

『お主婦さんはどうしたの。』といひながら私は例の通り長火鉢の向に坐つた。

『おかみさんも今ちよつと出てゐませんよ。』

『宮ちやんは今日何處？』

『ちよつと其處まで行つてゐます。』

『今晩は歸らないだらう。』

『え〳〵、歸りませんでせうなあ。』

私は、もうどうしても柳澤と逢つてゐるに違ひないやうな氣がして來た。

『何時から行つてゐるの？』

『もう大分前からですよ。』

『大分前からつて、いつ頃から？』

『さうですなあ。もう一昨日、その前の日あたりからでせう。』

『一人のお客の處へそんなにいつてゐるの？』

『え〳〵、さうでせう。私よく知らないんですよ。……あなた大變氣にしてゐるのねえ。』

『氣にしてゐるといふわけもないが、……何處の待合？』

『……さあ何處か、私知らないのよ。』

『お清さん君知らないことはないだらう。教へてくれないか。』

『そりや言へないの。』

『いへないのは知つてゐるが、教へてくれたまへ。』

そんなことを戯談半分にいひながら、お清がお勝手口の方へちよつと出ていつた間にふつと火鉢の上の柱に懸つてゐる入花帳が眼に着いたので、秘と取りはずして手早く繰つて見ると、お宮が一昨日からずつと行つてゐる待合が分つた。

その待合は、いつか清月も柳澤に知れてゐるから他に何處か好い處はないだらうかとお宮に相談したら、ぢや有馬學校の裏にかういふ待合があるからといつて敎へてくれたその待合である。

『はゝあ、ぢやあすこに行つてゐるな。すると柳澤と違ふかな。それとも柳澤もそこへ連れ込んでゐるのだらうか。』

そんなことを考へながら、お宮のいつてゐる先がさう分つてしまへばもうお清なんかに用はない。

『お清さん、主婦さんは何處へいつたんだね。大變遲いぢやないか。』

『えゝ、大變遲うございますねえ、大方活動へでも行つたんでせう。』

『さうか。ぢや僕はまた來ます。お留守にお邪魔しました。』

『まあ好いでせう。お宮ちやんがゐないからつて、さう早く歸らなくつてもいゝでせう。今におかみさんも歸つて來ますよ。』

そこを出ると私は心を空にして有馬學校の裏に急いだ。二月も末になると、もう何となく春の宵めいた暖かい夜風が頰をなでゝ、曇り勝ちな浮氣な空から大粒な雨がぽたり〳〵と顏に降りかゝつた。

その待合にいつて、私の名をいはずに靜とお宮を下に呼んでもらつた。

『便處にゆくことにして此方にまゐりますから、どうぞ此室でしばらくお待ち下さいまし。』

物馴れた水戸訛りの主婦が出て來て私を階下の奥つた座敷に通した。

間もなくお宮は酒に赤く火照つた頰を抑へながら入つて來た。

『あッ、あなたですか。私だれかと思つた。』

と入りながらちよつと笑顔を見せたが、すぐ不貞たやうな面をして、

『私酒に醉つた。』　獨語のやうにいつて頰をなでゝゐる。

『だれだえ？　お客は？』　輕く訊いて見た。

『うむ、誰れでもないの。』

『誰れでもないわけはない。だれだらう。それとも君の好きな柳澤さん？』

『うむ、柳澤さんなんか來るものですか。……よく酒を飲む客。一昨日から藝者を上げて騷いでゐるの。』

さういふ處を見ればなるほど柳澤らしくはない。

『さうか。……まあそんなことはどうでもいゝとして、此間私の家へ來た時から私には君の心はよく分つたから、とにかく私が君の處にやつてゐる手紙だけそつくり皆な私に返してくれたまへ。君からもらつた手紙も私はかうして皆な持つて來てゐるから。君の方から返してくれゝば私の方からも皆な返すから……。』

さういつて私は懷中から、丁度折よく持ち合してゐた紫めりんすの風呂敷の疊んだのを取出して、

『これ此のとほり君の手紙は持つてゐる。私のさへ返してもらへばその時これも返すから。』

『私、此處にあなたの手紙なんか持つて來てゐないもの。』

『だから今といふんぢやない。君がも一度よく考へて見て、私の方に來てくれるのが厭ならば、その手紙は私の方に返して欲しいといふんだ。君は柳澤さんの方にゆくんだらう。』

『そりや考へて見るけれど、私、柳澤さんなんか、あなたの友達に身を任すなんてそんなことをする氣遣ひはない。』

私は何を云ふかと思ひながら、

『それならそれでいゝから、私また一週間ばかりして來るから、その時分までよく

考へて置いてくれたまへ。』さういつてそこの待合を出た。

柳澤は行つてはゐなかつた。

ぢや、いろ〳〵思ひまはしたのが自分の邪推であつたらうか、邪推としたら自分は厭な性質を以つてゐる。私自身他人から邪推せられた時ほど厭な心持ちのすることはない。自分はそんな邪推をするやうな人間を何よりも好かぬ。そんなことを考へ〳〵その晩は加藤の二階に戻つて來た。

それから二三日たつて、それでもまだ矢張り柳澤とお宮との間が氣になるので柳澤の家にいつて見た。

すると柳澤は階下の茶の間で老婢に給侍をさせながら御飯を食べてゐたが、

『この間うち家にゐなかつたな。』と、いひながら私は火鉢の横に坐つた。

『うむ。』と、いひながら柳澤は默つて飯を喰つてゐる。

飯が濟んでから柳澤は、

『僕は鎌倉へしばらく行つて來るつもりだ。』と、いふ。

『そりや好いなあ。何日？』

『何日つて、今日か明日か分らない。』

『あれからお宮に會はないかえ？』私は微笑しながら訊ねた。

『會やしないさ。』柳澤は苦い顔をしていつた。

『ラムプ掃除をしてゐた神樂坂の女はどうした？』

『あれは、あれつきりさ。』

『だつてちよつと好い女ぢやないか。』

『あんまりよくもない。……彼女なら君にゆづつてもいゝ。』柳澤は戯談らしう笑ひながらいつた。

私は、はて變なことをいふなあ。と心の中で思つた。

彼女なら君にゆづつてもいゝといふのは、彼女でない女があるといふことだ。そ

れはお宮のことである。ぢや、やつぱりお宮のことを柳澤は思つてゐるのだな。さう思ひながら私は、

『いや、別に僕はあの女が欲しいのぢやないが。』といつて笑ひながら、

『やつぱりお宮の方が僕は好きだ。』と、柳澤の思つてゐることに氣のつかぬもののやうに無邪氣にいつた。

『……お宮はどうしても小間使といふ處だな。……それに襟頸が坊主襟ぢやないか。』と、柳澤は口の先でちよいとくさすやうにいふ。

『うむ。それからあの耳が削いだやうな貧相な厭な耳だ。』私も柳澤に和してお宮を貶した。

『とにかく屢く顏の變る女だ。』

『うむ、さうだ。君もよく氣のつく人間だなあ。實によく顏の變る女だ。』

まつたくお宮は恐しくよく顏の變る女だつた。

やゝ暫らくそんな話しをしてゐた。

『もう出掛けるのか。』

『うむ、もう出る。』

それで私は柳澤の家を出て戻つた。

その翌日であつた、此の間お宮に會つて話しておいたことをどう考へてゐるか、もう一度よく訊いて見るつもりで、此度は本當にお宮の手紙を懷中にして螺殼町に出掛けていつた。

先達て中からよくお宮の家から一軒おいた隣家の洋食屋の二階に上つてお宮を呼んでゐたので、今日もそこにいつてよくお宮の思案を訊かうと思つて何の氣もなく入口のカーテンを頭で分けながら入つていつた。

『いらつしやい！』と、いふ聲をきゝながら、土間からすぐ二階にかけた階段を上

らうとして、ふと上り口に脱ぎすてた男女の下駄に氣がつくと、幅の廣い、よく柾の通つた男の下駄はどうも柳澤の下駄に違ひない。

私は、はつと度胸を突いて、『柳澤は昨日嫌倉に行つた筈だが』と思ひながら尙女下駄をよく見るとそれも紫の鼻緒に見覺えのあるお宮の下駄らしい。丁ど女の歩きつきの形のまゝに脱いだ跡が可愛らしく嬌態をしてゐる。それを見ると私は忽ち何ともいへない嫉妬を感じた。さうしてやゝ暫らく痛い腫物に觸るやうな快い心持ちで男と女の二足の下駄を凝乎と見詰めてゐた。

さうして凝乎と階上の動靜に聽き耳を立てゝゐると、果して柳澤が大きな聲で何かいつてゐるのが聞える。どんな話をしてゐるだらうかと尙ほ凝乎と聽き澄ましてゐると、洋食屋の小僧が降りて來た。

私は聲を立てぬやうに、

『おい！』と手まねぎして、『お宮ちやんが來てゐるのかい？』

『えゝ。』

『ぢやあねえ、私が此處にゐるといはずに一寸宮ちやんを呼んでおくれ。』

小僧は階段をまた二つ三つ上つて、

『宮ちやん一寸。』と呼ぶと、

小僧が階段を降りるすぐ後からお宮は降りて來た。そしてもう二つ三つといふ處までおりて土間に私が突立つてゐるのをちらりと見てるとお宮は、

『あらッ!!』と、いつたまゝちよつと段階の途中に佇立つた。そしてまた降りて來た。

その樣子を見るとまた身體でも良くないと思はれて、眞白い顏が少し面窶れがして、櫛卷に結つた頭髪が細そりとして見える。

階段を降りてしまふと、脱いでゐた下駄を突つかけていきなり私の傍に來て寄り添ふやうにしながら、

『わたし病氣よ。』と、猫のやうにやさしい聲を出して、そうつと萎れかけて見せた。私は、

『この畜生が！』と思ひながらも、自分も優しい聲をつくつて、

『ふむ、さうか。それはいけないねえ。』と、いひつゝまたお宮の頭髪から足袋のさきまでじろ〳〵見まはした。

春着にこしらへたといふ紫紺色の縮緬の羽織にお召の二枚重をぞろりと着てゐる。

『こんな着物が着たさに淫賣をしてゐるのだなあ。』と思ふと唾を吐かけてやりたい氣になりながら、私は鳶衣の袖で和かにお宮を抱くやうな格向をして顔を覗いて、

『おい、この下駄はだれの下駄？』と、男下駄を指した。

『……』

『おい、この下駄はだれの下駄？』

『それは柳澤さんの。』

お宮は例の癖の泣くやうな聲を出した。

『さうだらう。……洋食屋で朝からお樂しみだねえ。』

私は氣味のいゝやうに笑つた。

『ぢやあねえ、先達つて君に話したとほり、もう君の心もよく分つたから、どうぞ私から上げてある手紙を返しておくれ。』私は一段聲をやはらげていつた。

『えゝ……。』と、お宮は躊躇らふやうにしてゐる。

『おい、早くしてくれ。君達にもお邪魔をして相濟まぬから。』

『ぢや、ちよつと待つて下さい。』と、いつてお宮はまた二階に上つていつた。

私は階下でどかりと椅子に腰を落して火の如く燃える胸を凝と鎭めてゐた。

二三十分も經つたけれど、まだお宮は降りて來ぬ。

どうしてゐるのだらう。二階から屋根うらへでも出て二人で逃げたのだらうか。

さうだつたら後で柳澤の顔を見る時が面白い、それとも上つていつて見やうか、

いやそいつはよくない。さう思つて根よく待つてゐると、お宮は笑顔を作りつゝ降りて來た。

『ぢや手紙をお返しゝますから私の家に來て下さいつて。自家の主婦さんが。』

『自家の主婦さんて、お前んとこの主婦さんに何も用はない。』

さういひつゝ私は一軒置いた先のお宮の家に入つて行つた。

長火鉢の向に坐つてゐた主婦はもの〳〵しい顔にわざとらしい微笑を浮べて、

『一體どうしたんです？』と呆れた風の顔をして私の顔を見上げた。

座には主婦の他に女中のお清、お宮と同じ仲間のお菊、お芳、おしげなどが方々に坐つてゐて、入つていつた私の顔をじろ〳〵と默つて見守つてゐる。

『なに、どうもしやあしないさ。私もうお宮さんの處に來ないから、私からよこしてゐる手紙をもらつて行かうと思つて。』

『つまらない。どうしてそんなことをするんです？　……若い人達のすることは私には解らない。』

『そんなことはどうでもいゝんだ。私もこのとほり今まで貰つてゐた手紙を持つて來た。これを戻すんです。』

そこへお宮は二階から金唐紙の小い函を持つて降りて來た。その中には手紙が一ぱい入つてゐる。

そして茶の間の眞中に此方に尻を向けて坐りながら、

『さあ、こんなものがそんなに欲しけりやあいくらでも返してやるッ。』と、山のやうな手紙の中から私の手紙を選り分けて後向きに叩きつけた。

『さあ、これもさうだ！　ありつたけ返してやるから持つて行け。』

私は長火鉢の前に坐つて、それを横眼に見ながら笑つてゐた。

お宮は七八本の手紙をそこに投出して置いて、

『あんまり人に惚れ過ぎるからそんな態を見るんだ。』といひつゝ二階に駆上

つて、函を置いて降りて來ると、
『こんな處に用はない。柳澤さんの處に早くゆかう。』と、棄て科をいつて裏口から出ていつた。
私は、默つて笑つてゐた。
『一體どうしたんです？』主婦は笑ひながらまた同じことをいつた。
私は腹の中で此の畜生め、何も斯も知つてゐやあがる癖に白ばくれてゐやあがる。
と思ひながら、
『いや何でもない。この手紙さへ戻してもらへば私には何にも文句はないんです。』
わざと靜かにいつて、お宮の投出して行つた手紙を取上げて懷中に收めた。
そこへお宮はまた戻つて來て、座敷に突立ちながら、
『柳澤さんが、ちよつと雪岡さんに用があるから來て下さいつて。……でも卑怯者だから、よう來ないだらうつて。』

それを聽くと私はグツと癪に障つた。そして長火鉢に挿してあつた鐵火箸をぎゆうと握りしめて座り直りながら大きな聲で、
『なんだ？　卑怯者だ？　……それは柳澤がいつたことか、お前がいつたことか。お前なんぞのやうな高等淫賣を對手に喧嘩をしたかあないんだ。併し卑怯者といふのを柳澤がいつたなら、卑怯者か卑怯者でないか、柳澤と喧嘩をして見せやう。』
するとお宮は私が本氣になつたのを見て折れたやうに笑ひながら、
『卑怯者とは私がいつたの。柳澤さんはそんなことをしやあしない。』
と、俄に聲を和げた。
私も淫賣のことで柳澤と喧嘩をするでもあるまいと、胸を撫でながら家外に出た。
（をはり）

愛着の名殘り

今日は不思議な日だ。長く會はなかつた先の私の妻であつた女に一日に二度も出會つた。

――別に不思議といふわけもないだらうが、東京が廣いといふことを私はしみぐと感ずるのは、自分もその女も同じやうに東京に住んでゐながら滅多に出會つたことがないのでもわかる。

それが、今日は不思議に二度も偶然外で出會つた。その前偶然出會つたのは、去年の二月時分だつたから、あれから丁度一年半ばかり會はなかつた。その時は夜であつた。私はある一人の友達と寄席にゆくつもりで、街を歩きながらとある電車の通りで、友達が夕刊を買つてゐるのを、ちよつと佇立つて待つてゐると、そこの西洋食料品を賣つてゐる角店の前の明みへ薄暗い横丁から、つと姿を現はして來たのがまぎれもない私の先の妻であつた。

それを見ると私の胸ははつと苦痛を感じた。

その時からまた遡つて考へて見ると、間に滿二年置いて一昨々年の九月時分に途中で出會つたきり足掛け四年見なかつたのだ。自分もその間には一昨年の夏の終から去年の秋の半まで一年あまり京阪に放浪してゐて東京にゐなかつた。

それで、その時は夜目にも兩方で殆ど同時に私であり、彼女であることを認めた。けれども聲は此方から掛けた。

『おいー』

といふと、

『え？』

と、平氣さうに答へながら、此方は立ちとまつてゐるのに、向では少し歩を緩めた

まゝ、私の方を頸だけ曲げて見ながらやつぱり歩いてゐた。

『この頃は東京にゐるのかい。何處？　姉さんの家にゐるの？』

と訊くと、

『えゝ。あなたは？』

と、少し笑みを面に浮べるやうにして訊き返へした。

『私は、すぐ其處の松林館にゐる。……相變らず獨身者だから。』

さういつて答へながら、一分間ほどの間に私は一昨々年の九月から見なかつた彼女の容貌や身裝を見守つた。以前に比べていくらか顔に肉がついたやうで、白い襟卷に藍つぽい立縞の羽織を着てゐる。その羽織は私と一緒にゐた時分こしらへた、あの安物のお召だなと思ひながら、『でも、お前相變らず壯健で結構だな。』と、私は哀れむやうな、傷はるやうな氣持ちになりながら、さういつた。

けれども、女の方では

『えゝ。』

と、いつたきり、早く行きたさうにしてゐたので、こちらが、まだ未練でもあつて話で引留めやうとでもしてゐると思はれるのが厭さに、私はそのまゝ振顧つて友達の方によつて行つた。友達は夕刊を手にして立つてゐた。

私は友達と並んで歩きながら、去年も一昨年もまるきり見ず、一昨々年の九月に見た時から今まで見なかつた間の時日の經過やら、その間に起つてゐるべき彼女の身の上のことなど種々想像に描いた。

『君、今、僕が話してゐた女が、あれが僕の先の妻さ。』

私の友達は、私の話で私達の舊いことを知つてゐた。

『あゝ、さうですか。さうして今どうしてゐるんです？』

『さあ、どうしてゐるか。何處かへ嫁いてゐるんだらう。……あんなことがあつて、仕舞には心持ち惡く別れたけれど、一緒にゐる時分に隨分苦勞もさしたから、あん

まり詰らなくならないやうに無事に暮してゐれば、僕も安心な氣がする。』

さういつて、私は心の中で彼女のために幸福を祈るやうな氣持ちになつた。けれどもその時私の胸がどきッと苦痛を感じたことによつて察すると、不斷は彼女のことを思ひ出しもせず全く忘れはてゝゐるやうでも、まだ胸のどん底に古い記憶が殘つてゐると思はれて、執着に伴ふ不快を感じたのであつた。

やがて寄席に入つて女義太夫を聽いてゐる間に、先刻見た彼女のことはふと念頭から霧のやうに消えてしまつた。

けれどもその夜寄席を出て、自分の獨居の部室に歸つて來て、夜更けて心が澄んで來ると、私はまたふと先刻見た彼女のことが意識の表に浮んで來た。自分では少しも思ひ起さうとしてゐないのに、獨り手に先刻の印象が思ひ出されるのである。白い駱駝の襟卷と藍つぽい羽織が眼の先に浮んで來る。それで私も今度は自分から「この頃はどうしてゐるのだらう。誰れかの妻になつてゐるにちがひない。」と、思ってはみたが、それが以前のやうに私の胸を蝕まなかつた。

丁度その時分から私は、獨りでゐることの安易さを沁々と味つてゐた。私は、どんなに、平常思つてゐる女を待たないことに平靜なる悅びを感じてゐるか知れぬ。

――妻も子もなくして――

去年の夏であつた。私は三ケ月ばかり日光の奥の中禪寺や湯元にいつて暮してゐた。私はその間全く童貞の如き生活をしてゐた。私の頭から女といふものが全然拭ひ去られてゐた。私の眼は毎日々々高い山と白い雲と深い水の色とばかり見てゐた。

すると、中禪寺湖からまだ二里も山深く入つた湯元の温泉にいつてゐる時であつた。それは八月の中旬であつた。東京から畫家のO氏夫妻が私をたづねてやつて來た。その晩O氏の部室で夕飯を共にした。その時妻君は次のやうなことを話した。

昨夜中禪寺に泊つた時、そこの宿で、よく淺海さんをたづねて來る方があります。此の間も夫婦の客で淺海さんのことを訊いたお方がありました。と宿の女中が御飯の給侍をしながら話してゐた。さういはれると、誰れしも好奇心の起るもので、

『へえ！　だれだらう？』私は御飯を食べながら考へた。

『何でも淺草の小島町とかの人だとかいつてゐました。』　O氏の妻君はいつた。

『うむ、そんなことをいつてゐたねえ。』　寡默なO氏は靜にそれに應じた。

『へえ!?　淺草の小島町！　私はそんな處にゐる人間に知つた者はない。小島町といふ處すら知らない。一體何處の邊だらう。小島町といふのは。』

三人とも小島町の處在を明確に知つてゐなかつた。そして中禪寺湖の宿に來て泊つた、私のことを訊いた夫婦者の何人なるかの推測の興味はその時きり忘られてしまつた。それから十日ばかりして私達は三人づれで湯元から中禪寺湖まで戻つて來た。私は、もとの三階の九番の部室に入つた。そこに戻ると私は先達つてO氏夫妻に、ある夫婦の客が私のことを訊ねてゐたといふ話をした女中を呼んで、その小島町の客のことを訊ねた。

『お政さんかい。此の間、此處に來て泊つた夫婦づれの客で私のことを訊いてゐた者があつたといふ話をOさんにしたのは？』

『えゝ、さうです。そのお客さまに出ましたのは私です。あなたのことを訊いておいでになりました。』

『淺草の小島町とかいつたさうだねえ。』

『えゝ、さうです。小島町と仰有いました。』

『さうか。ぢや、濟みませんがつて、一寸お帳場から宿帳をかりて來ておくれ。』

お政は直ぐ宿帳を以つて來た。

『いつ頃だつたい。私が湯元に行つてからだから八月の十四日から後のことだな。そしてOさん達が來たのが二十日だつたから、五六日の間のことだな。』

さういひながら私は宿帳を繰つて見た。

すると、どういふわけか二帖ある宿帳の一つの方に、しかも私が書過ぎにその宿を立つて湯元に行つた八月十四日の日附の處に果して東京淺草區小島町と住處を記した夫婦づれの泊り客の名を發見した。

材木商岩田鐵太郎　三十六

同　すま　三十六

それを見ると私は、おや〳〵と思つた。すまといふのは彼女の名である。それとも同名異人であらうか。しかし他にはすまといふ名前の女で私を知つてゐる女はない筈だ。彼女に相違ない。さう思ふと私は覺えず五體に輕い痙攣を感じた。そして何だか焦々した渴きを覺えながら

『ある〳〵。お政さんこれだらう。男も女も三十六歳と書いてあるが、そのくらゐの年格好であつたかい。』

『え〳〵、旦那の方は四十くらゐの方でした。奥さんの方はそこに書いてあるとほりに三十五六くらゐに見えました。』

『さうか。先月の十四日に來て泊つてゐるよ。十四日といへば丁ど私が此處を立つて湯元の方にいつた、その日だ。その日の何時ごろ來て泊つたらう。』

『それはよく覺えませんが、たしか二た晩お泊りになりました。』

『さうか。私もう一日湯元に行くのを延せばよかつた。』

『さうでしたねえ。淺海さん御存じの方ですか。』　宇都宮から夏場だけ雇はれて來てゐるお政は溫順しい口の利き方をして、さういつた。

『うむ知つてゐるんだ。……そして何處の部屋に泊つたの。』

『そのお客さまもやつぱり此のお部屋でした。……丁どその時このお部屋が明いてゐましたから此處へおとほし申しました。』

『そら明いてゐたらう。私が書過ぎに立つていつた後だもの。』

私の係りの女中はお政ではなかつた。

『あゝ、さうでしたか。私よく覺えませんでした。そのお客さまも、私がお給侍に出ましたら、姐さん此宿に淺海さんといふ方が來てゐるでせうと、お訊きになりましたから、えゝ七月からずつと來てゐらつしやいますけれど、只今お山開きで登拜の客が雜沓するからと仰有いまして湯元の方においでになつてゐます。と申しましたら、その方何處の部室にゐて。と、おきゝになりましたから、やつぱり此のお部屋にゐらつしやるんです。と、申しました。』

『あゝ、さうか』

といつたが、私は心の中で、何か變な因緣に付き纏はれてゐるやうで不快な興味を刺激された。

『さうか。その人達も此の部屋に來て泊るとは不思議だねえ。旦那の方は私のことは何も訊きやしないだらう。』

『えゝ、旦那さまはあなたのことは何もおきゝになりませんでした。御酒をよく召上る方で獨りで面白いことばかり仰有つて。』

『そしておかみさんの方が私のことを訊いたの？』

『えゝ。』

『此の部屋で酒を飲んだんだな。』　私は一寸の間凝乎と默つた。『奥さん、樂しさうにお酒の相手をしてゐたらう。』　私は輕い戯談らしういつた。

『いゝえ、別にそんなこともありませんでした。』

『奥さん酒が好きな筈だが飲まなかつたかい？』

『いゝえ。そんなに召上りませんでした。』

『ぢや、旦那だけ面白いことをいつてお酒を飲んで。奥さんはその間お政さんを相手に私のことなんか訊ねたの？』

『えゝ、さうでした。奥さんだけがお訊ねになりました。』

『そしてどんな風をしてゐたかい？』

『えゝ、丸髷にお結ひになつて、意氣な身裝でした。』

お政が宿帳を以つて下りて去つてから私は獨りで思つた。材木商に嫁いてゐるやうだと、彼女もまあ仕合せは好いのだらう。さう思ふと、私は心が輕くなつたやうで、そして彼女と別れた時分の、私の怨みの瘡も三四年の時日がいつとは知れず癒してくれたやうに思へた。それにしても吉田とは、いつ切れたのであらう。吉田と切れてから今度の男に嫁くまでに、他の男の處にいつてはゐなかつたのだらうか。私は、もう彼女に對して未練も執着も感ぜぬが、彼女が私と別れてから辿つた運命については考へずにはゐられない。

二月に途中で偶然出會つた時には、碌々口もきかぬやうにして去つてしまつたが、私が此處に來てゐることを知つたのは、どうして知つたのだらう。新聞の消息か何かで見たのだな。さうすると彼女はやつぱり私の動靜を機會のあるごとに氣をつけてゐるのだ。私は、そんな心持ちが、別れてから何年の後までも尙ほ續いて殘つてゐるのに不氣味を感じた。

それから私はO氏の部室にいつて、私をたづねた夫婦づれの誰れであつたかゞ分つたことを話した。

『へえ、不思議なものですねえ。』

O氏と妻君とはさういつて同じやうに私の顏を見守つた。

『いつかもあなたはその方のことで日光に來て宿帳を調べたことがあつたのでせう。』

妻君は不思議さうな顏をしてさういつた。

『えゝ、先にもそんなことがあつた。私はもう何にも思つてはゐないけれど、まつたく奇妙です。』

『それで先に來て一緒に泊つた人と此度の人と違ふのですか。』

『そりや違ふのです。先の男はまだ若い。そして商賣が違ふ。それはやつぱり國の方にゐるでせう。しかし更に不思議なのは、名が同じ名だ。』

『不思議ですねえ。その先の人に別れて、また違つた人へ嫁いたんでせうか。』

『さうでせう、さうらしい。』

O氏の部屋で暫くそんな話をしてゐたが、私はもう彼女について話をする衝動も昂奮も感じなかつた。けれども彼女が先の男と一緒にその男の鄕里にまで行つてゐた時分のことは、今でこそ私に何等の刺激をも與へないが、その當時のことを思へば何ともいへない不快な興味が私の精神を惱亂せしめ身體を頽廢せしめた。私は今その憤恨や苦痛から解脫したことに非常な幸福を感ずる。

今度も宿帳を見て彼女の動靜や住處も分つてゐるが、私は最早それを何うして見やうとも思はない。けれども四年前彼女が私の家に同居してゐた學生と日光に來て泊つたことを發見した時には、私は探偵的の興味にもそゝられてゐた。その時から數へてその前々年の九月に彼女が私の眼界から逸してその時に至るまで、中滿一年をおいて足掛け三年の間、東京にゐるといふことは分つてゐながらも彼女とその學生と關係があるといふことは疑惑の雲に鎖されてゐた。初めの間は疑つても見たが、その疑ひはたゞ一時の疑ひとして私の心の中に不問に付せられてゐた。然るに彼等が日光に來て同宿したことを發見するとゝもに、嘗て疑つてゐたことが全然事實となつて私の眼の前に開展して來た。凡ての疑ひが凡て事實であつたことが分つた。私はその時苦痛な興味に刺激された。そしてその宿帳に表はれた事實を發見するとともに、私はかういふことを推定した。

去年の夏から秋にかけて私は鹽原に二ヶ月あまり滯在してゐた。その時その學生は岡山の鄕里から手紙を寄越して東京在學中世話になつたことを謝し、今度一家の事情で學校を退いて鄕里に歸つたことを報じた。その手紙は東京の私の寄寓してゐる家にあてゝ寄越したもので、その家から鹽原に回送して來たのであつた。その時

私は、その學生が鄉里に歸つたことを知つたのであつた。

避暑客は疾に散じ、十月の紅葉の客も絕え、深い鹽原の溪は木の色が一日々々と枯れて、山を搖り動かすやうな寒い風が吹いて來た。私はその山の中から十一月の初にやつと東京に出て戻つた。東京には彼女がゐると思つてゐた。それで歸つて來て、何よりも先にかねての知邊を訪ねて樣子を聞くと彼女は遠方にいつたといふことである。そこの內の婆さんはかういつた。

『おすまさん、先月の初めか先々月の末かにまた一寸私の處に來ました。何でも今度は遠方に行くとかいつてゐました。來年の今時分までお目にかゝりません。といつてゐました。』

遠方といつて何處だらうと思つたが、その時はその學生の歸鄉といふことゝ關聯して考へることに氣が付かなかつた。遠方にいつてしまつて、彼女のゐない東京が、私には恰も親しみのない他鄉の如く感じられた。私は無興味な日を徒消してゐた。

それが一度び宿帳に記された事實を發見するに及んで彼女が去年の九月ごろ遠方に行くといつたといふことゝ、學生が鄉里に歸つたといふことゝを聯想せしめた。彼等は鄉里へ發向する一と月ばかり前に日光に行つたのである。

私はそれと察すると、すぐ彼等の行つてゐる岡山にゆくことを考へた。一昨年の九月にぷいと私の家を出ていつたきり、東京の中に住んでゐるとは思ひながら何處にゐるか分らなかつたのが、今度はさらに遠國にいつてゐる。東京では何うしてゐるか分らなかつたがあの若い男と一緒にゐると分つて見れば、もう手がゝりがついた。私は東京の二十分の一にも足りない土地に行つて彼女の居處を發見してやらう。さう思つて日光から歸つて來て、かねて私達のことについて口を利いた彼女の姉の處にいつて日光でこれ〳〵のことを調べて來たといふ話をすると、姉夫婦は、なるほどその學生は、彼女が老母と一緒にゐる時に同居に置いて世話はしてゐたが、

去年の九月に國に歸つてしまつた。妹は今でも東京にゐる。遠方にいつてゐない。と、いひ張つた。人のいふことを信じ易い私は、さういへばさうかも知れないと思つた。けれども今は假ひ男は國にかへり、女は東京にゐても、私の内にゐる時に良からぬ行ひをして私を欺いて口術を設けて家を去り、別に二人で一家を持つて同居してゐたことが分つて見れば、過ぎてしまつたことであつても一應彼等に會つて話をせねば心が治らぬ。愚かなことには違ひないが自分の激昂した感情が穩かにならぬ。

『とにかく二人を私の前につれて來てもらはねばならぬ。それがあなた方の責任ぢやないか。一昨年私が、あれ等の間に可怪な素振りがあつた時そのことをいひ出したら、もしそんなことがあつたら、私があなたに代つて成敗すると、あなたはいつたぢやないか。』

さういつて、私は姉の夫を詰責した。

喧嘩腰になつて不貞腐れをいつてゐた彼は、私がどうあつてもさうせねば承知せぬ。といふので困つた顔をしてゐたが、ぢや今後三日間猶豫してくれ、そしたら二人を連れて來るからといふ。

私は、その三日の間を熱を病むよりもまだ苦しい昂奮の狀態で待つてゐた。いや私の昂奮の狀態はその三日間に止らない。一昨年の春私達の間が段々不和になつて、それから別れるともなく別れた時から繼續してゐるのであつた。私は今日になつて、かゝる種類の昂奮を最も恐れてゐる。私は男女間の問題から起る斯る神經の昂奮をば今後死ぬまで經驗せざらんことを欲する。

殆んど不眠の狀態でその三日間を過し、四日目になつて私はまた姉の家にいつた。

『今、内が歸つて來ました。』姉は、ものゝしい顔にわざと微笑を表はすやうにしていつた。

姉の聲を聞いて奥から顔を出した主人は險相な顔を一層險相にしてそは〳〵しながら、

『おいでなさい、上つて下さい。』

といつたが、私に詰めて來られるのが、厭な物に心を襲はれてゐるやうに見えた。

私はそれを見て、せめても遣る瀬のない鬱憤を晴すことが出來るやうに思つた。

二階に上つてゆくとそこには吉田がクリーム色の洋服姿で座つてゐた。

『やあ、暫くでしたなあ。』

落着いた口調で彼は挨拶をした。

彼女の兄もそこに來てゐた。

姉の夫も上つて來て膝を並べながら

『淺海さん、君、一と口くらゐ挨拶をしても可いだらう。わざ〳〵岡山まで行つて來たのだから。』

主人は神經の亢奮した、落着かない調子でいつた。彼は三日間猶豫をしてくれといつて置いて、自分で岡山までいつて吉田を伴ふて歸つて來たのであつた。いくらか取逆せてゐるやうになつてゐる彼は、それをいふのを忘れて、私がそれについて挨拶をせぬのを不服さうにつぶやいた。

『あゝ、さうですか。あなたがわざ〳〵岡山まで吉田君を迎へにいつたのですか。』

私は、初めて聽いてさういつたが、彼が自身岡山まで吉田を迎へにゆかうとも、また書面で呼び寄せやうとも、それは彼等の責任の範圍内のことであるから私の方からその勞を謝する必要はないと思つた。そしてむしろ、私が日光で宿帳を調べて事實を發見した結果、物の道理の解らない、いけ好かない奴だが根が正直な氣の小い姉の夫が、急がしい職人稼業の手間を三間も潰して自身でわざ〳〵岡山までも吉田を迎へにいつた馬鹿正直を、心で憐れみもしたり、可笑しくも思つた。

『さうですか、岡山までいつて來たのですか。』私は重ねていつた。そして顏で少しく笑ひながら吉田の方を見た。

『初め來られた時に吃驚しました。私家にゐると、店の者が此の方の名刺を持つて、東京から淺海といふ人の親類の人が來てゐます。と、いつて私の處に來たので、どなたかと思ひました。』

吉田は、さういつて主人が訪ねていつた時の模樣などを靜に話した。

『あんな遠方に今度、淺海さんお前のお蔭で初めていつて見たが、その代り變つた土地を見て來た。』

主人は、私のために彼等の祕密にしてゐた事實を曝き出された上にそんな暇潰しをさせられたのが、さも口惜しくつて〳〵堪らないかのやうに私をお前呼ばりをして刺々しい物のいひ振りをしながら、吉田に向つては打つて變つた優しい調子で

『吉田さん、あれは何處でしたかな、綺麗なお城のあつたところは。汽車の中から眞白に見える。』

『姫路でせう。』

『あゝ、さう〳〵姫路か。それから須磨舞子。好に處が澤山ある。……時に淺海さん、さあ、かうして吉田さんにわざ〳〵來てもらつたのだから、君の意見をいつてもらひたい。』

鋸や鉋を持つけた彼は荒びた指端をブル〳〵顫はせながら卷煙草を吹かしてゐた。

『さあ早く君の思つてゐることをいつてもらひたい。私達はお前さん方のやうに遊んでゐられない身體だ。階下には受負ひ仕事が、もう日が切れてゐるのを延ばしてもらつてゐる。』急がしさうにした。

『どうもあなたには濟みませんでした。お急がしいところを。』

お人好しの女の兄はそんなことよりいへなかつた。

『さあ、淺海さん、何でも君の思つてゐることをいつたら可いぢやないか。』

主人は焦々していつた。

『そんなに焦々しなくつたつて、いふさ。いふけれど、吉田君一人ぢや仕方がない。女はどうしたのです。女も此處に出してもらひたい。』

相手の三人は暫らく默つてゐた。

『女はどうしたのです？。』

『女には關係がない。』主人は自暴糞らしい口調でいつた。

『そんな馬鹿なことがあるものか。』私は、嘲笑つたきり默つてゐた。

『奥さんに來ておもらひになつたら、どうです。』

吉田は兄達に對つてすゝめた。

けれども彼等はそれには不承知であつた。なるほど吉田がまだ東京にゐた間は同居にゐてもらつて所帶の足りにもしてゐたが、彼が故郷に歸つてから後間もなく神田邊に嫁いでいつてゐるのだから、今いつてゐる先から、そんな過ぎ去つたことで暇をもらつて寄越してもらふことはむづかしい。といひ張つた。

私は、しばらく默り込んでゐた。それが眞實であらうか。私の家にゐる間に此の吉田と私の眼を忍んで、體よく別々に私の家を出ていつて、それから去年の八月日光に行つて一緒に泊つたころは一緒に家を持つてゐて、九月に吉田が故郷に歸つたきり、彼等は別れてしまつたのであらうか。私は再び疑ひ惑ふた。

『神田邊は何處に嫁いてゐるんです？』私は、温順しく默つてゐる實の兄の方に訊ねた。

『何處へ嫁いて居らうとも、それは關係のないことだ。』

姉の夫は横から引取つて喧嘩口調でいつた。彼の險惡な顔付と、物のいひ振りが倍々私の神經を刺激した。

『それは關係ないさ。しかし吉田君一人を對手に話は出來ぬ。女を連れて來るまで待つてゐるから、ぜひ連れて來てもらはう。』

私は、道理の分らぬ奴等だとは思ひながらも、對手の出やうが癪に障つてゐるのでいつまでもそこに居据つてゐる氣勢を見せて、また默つた。

『來ておもらひになつたら、どうです。』吉田は時々彼等に、女に顏を出さすやうにすることをすゝめた。

『さあ……どうだらう？　好い鹽梅に家にゐるか知らん。』

彼等は顏を見合はした。

私は、正直にいへばその時少しも吉田に會ひたいとは思はなかつた。たゞ彼女が見たかつたのである。彼女と吉田とを私の前に置いて私の鬱憤を晴らしたかつたのである。

兄達が相談してゐる風につけ入つて私は

『ぜひつれて來て下さい。』と迫つた。

『さあ、先方で承知して寄越してくれるか知らん。』

『此間一寸來た時にも、裁縫が大變で急がしさうにいつてゐたから、どうか。』

そこへ階下から上つて來た姉はそんなことをいつてゐた。

『ぢや、やつぱり彼女は眞實に東京にゐるのだな。』私は、心の中でさう信じて來た。

『とにかく先方へさういつて連れて來て下さい。』私は姉の方に向いて鄭寧にいつた。『どんな處に嫁いてゐやうとも、その方には私は文句はないのだから。』

『えゝ。』姉は煮え切らぬ返辭をしてゐた。

逆上していくらか氣の狂つたやうになつてゐる主人は突如に兩手の指で子供がするやうに赤んべえをしながら

『どうぞ連れて來て下さい。』

私のいつたとほりのことをいつて、厭らしい聲を出した。他の者は、はゝと笑つた。

『何をいつてゐるんだい、五十男の癖に。』

私は、馬鹿々々しくなつて來た。

『お前こそ何をいつてゐるんだい。疾の昔に濟んでしまつた、だらしのないことをいつて來るない。』

今度は噛み付くやうな聲を出した。

『濟んでしまつたことぢやない。よくないことをして、今まで隱してゐたのぢやないか。その埒を明けてもらふのだ。』

『羽織ごろつき！　二年も三年もかゝつて、そのことばかり探してゐたんだから。新聞記者や辯護士に友達があるんだから。』

私に向つていつてゐるかと思ふと、あとは懼えたやうに獨語をいつてゐる。さうかと思ふと、聲を出して泣きながら

『吉田さんさういつて置きます。今度のことについて、私共も夫婦別れをしなければならないことになるかも知れません。あなた方同じ國同志で味方になつて、私達のために惡いことをいはないやうに頼みます。』　さういつて主人はおい〳〵泣き顏ひをした。

私はその醜さと可笑さに思はず眼を閉ぢた。

吉田も呆氣にとられたやうな顏をして

『そんなことがあるものですか、私が淺海さんと同じ國だからといつて、それでなた方の爲にならぬやうなことをいふなんて。そんなことがあるものですか。』

そんな風で座がだらしのないことになつてしまつたので、その日は話をするのをやめて私は吉田とは國の中學校時代から友達であつた甥をして處を變へて打明けた話をさした。けれども吉田は何處までも彼女とは關係のなかつたことをいひとほした。私も直接に吉田にありのまゝをいつてくれるやうに、何度も話をして見たが同じことを繰返へすに過ぎなかつた。

翌日は神田から彼女をつれて來ることになつてゐたので、私は彼女とよく知つてゐる私の友達に頼んで甥と二人で、やつぱり姉の家で吉田と二人ゐる處で話すことにした。

私の方の話といふのはかうである。彼等に良くない行跡があつたに相違ない。それが假ひ過ぎ去つたことであつたとしても、私の家にゐる間にさういふことをしておきながら、私が手證を抑へぬのを幸に生活難を口術に不貞腐れの喧嘩を吹きかけて、別ればなしを持出し體よく私の家を出てゆきその後長い間彼女は吉田と同居をしてゐた。しかも同じ目と鼻の牛込區内にゐながらそれに私の氣が付かなかつたのは、此方が何處までも愚鈍ではあるが、四十二年の九月にふつと家を出ていつたきり、翌四十三年を一年置いて、今四十四年の五月になつて、漸くさういふ行跡のあつた手がゝりを得た。此方の愚かさとはいひながら、欺されてゐたといふのがどうあつても堪らえられぬ。近い處にゐて足掛け三年分らずにゐたと思へば尚ほのこと残念だ。しかし此處まで彼等の行跡を探つた以上は、まさかそんなことがなかつたとはいへまい。

此方の憤怒の情からいつたら向の身を八つ裂きにしてやつてもまだ腹が癒えぬのであるが、まさかそんなことをして法律上の罪人になるやうなことも自分としては出來かねる。たゞ此の上は、さういふことがあつたと、一と口素直に謝罪をしさへすれば私の腹は癒える。さういふ私の心持ちを飲込んで友達は中に立つて話したのであるが、容易に話の埒は明きさうになかつた。私は他にゐて話の結果を待つてゐたが、そこから何とかいつて來る筈になつてゐるのに、朝が晝過になつても使ひは來なかつた。私は待ちあぐねて姉の家を覗いて見た。

すると丁度彼女が階下で動いてゐるのが店頭からちらりと見えた。互に一昨年の九月から見なかつたのだ。向も此方を見たと思はれて、はつと神經質らしい笑顔をしたが、そのまゝ姿は見えなくなつてしまつた。

私は笑ひもせず凝乎と見詰めるやうにそれを見てゐたが、今彼女の見せた痙攣したやうな笑顔には私に對する懷かしみも流石にまだ殘つてゐるのであらうと思ふと少しも早く會つて見たかつた。

『とにかくこれから君のところへ吉田君と妻君とを連れてゆくことになつたから、君からよく話して見たまへ。』

丁度そこへ出て來た友達はさういつた。

『それからよく君にいつて置くが、妻君を君の處につれて行くのもいゝけれど、妻君に負傷でもさすやうなことがあつてはならぬといつて、それを此處の家で一同心配してゐるんだから、それは僕が預つて行く以上は、君にそんなことはさせぬといつてあるのだから、君もそのつもりでゐてくれたまへ。……ぢや君は先へ歸つてゐる方が可いだらう。』

友達がさういふので、私は朝から待ち合はしてゐる處へ歸つた。

その後からすぐ吉田がやつて來た。彼女も友達と甥とにつれられて來た。

私は別室で吉田と二人差向ひで靜に話を持出して見たが、殆ど私が一人口をきくばかりで、彼は

『そんなことはありませんです。』と同じことを繰返へすに過ぎなかつた。

今度は彼女と差向ひになつて話した。一昨年の九月に私の家を出ていつたきり見なかつたのである。その間知邊の婆さんの處で噂ばかり聞いて、いつも行きちがひになつてゐた。

『昨日　一昨日おすまさんが來ました。』といふ處へよく私は行き合はした。

今見ると、婆さんが噂さしてゐたとほりに前齒の缺けてゐたのを二枚義齒をしてゐる。それが妙に以前の相好を變へてゐる。吉田にこしらへてもらつたのであらう、田舍染みた柄のお召の袷衣に、帶は昨年まだ私の家にゐる時分に私の好みでこしらへてやつた水色繻子にやつぱり同じ水色の羽二重に白く筐の葉の絞りを染め出

したのを晝夜にしたものであつた。私は何だか「おさん茂兵衛」のおさんが處刑の際に着てゐた着物の色を聯想した。けれども怨みと執着とに滿ちた心で三年がけ行くゐを探して、やつと今面と向つて會つて見ると、さうなくてさへよく顏變りする彼女の顏は三年だけ老いて見えた。

私の怨みと執着との底には情欲があつた。然るに今久しぶりで會つて見ると、その情欲は自然に霧散してゐるのが、自分ながら感じられた。けれども尙ほ私に殘つてゐる執着の念は、いろんなことを問ひ糺さしめずには置かなかつた。

『お前は神田の方に嫁いてゐるといふのは何處に嫁いてゐるんだ。』

日光で宿帳を發見したときには、彼等が二人で岡山に遠隱れしてゐることを見え透くやうに判斷したが、此の間から兄姉の話で私は、ぢや神田邊に嫁いてゐるのだなと思ひ込んだのである。

すると彼女は少しく考へるやうにしてゐたが

『嫁いてゐるといふのは、齋藤の世話になつてゐることでせう。』といつた。

齋藤といふのは、姉の家と同じ西洋家具商で、三十人も手代や職人を使つて手廣く商賣をしてゐるといふことを私は以前彼女からよく噂には聞いてゐた。初めには思ひ出せなかつたが、やつと思ひ出せて來た。

『あゝ、あの齋藤の世話になつてゐるのか。』

『えゝ。』

私はそれを聞いて、かう思つた。なるほどさういへば此の間兄達が、彼女が神田邊に嫁いてゐるといふのを口ごもりながらいつたやうであつたが、あれは妾になつてゐるので、それでいひにくさうにしてゐたのだな。さう思ひ込むと私は、もうすつかり彼女は齋藤の世話になつてゐるといふことに少しの疑ひを挾まなかつた。

『いつからさうなつたのだ？』

彼女のいふのでは去年の九月に吉田が東京を引拂つて郷里に歸つたあと、それまでゐた若松町の家を疊んで彼女は老母と二人で津久土前の姉の家のすぐ裏の二間ばかりの小さい處に越して來た。そのころ一度齋藤が姉の家に來た時いつものとほり酒が出たので、自分がその手傳をして二階で齋藤と二人きり差向ひになつてゐると、つひそんなやうな話になつてしまつたといふのである。

『あなたまた、こんなことを齋藤の内へ行つていはないやうにして下さい。あなたのやうな人だからまた齋藤の内輪をもむやうなことをするかも知れない。』

彼女は懇請するやうにさういつた。

私は心の中で、これは好いことを聞いた。都合によつては一つ齋藤の家の内儀さんに會つて燃きつけてやらうと考へた。

『それでお前は齋藤から月々どうかしてもらつてゐるのか。』

『えゝ』

『いくらぐらゐもらつてゐるんだ。』

『私の方へ月々三十圓。それから老母さんの小使ひにといつて十圓づゝ出してくれます。』

彼女は考へ〳〵いつた。

『私もどうせこんな運の惡い人間ですから、まあ一二年さうして辛抱してゐて、多少でもお金が殘つたら、また齋藤の方で品物を分けてくれるなりして、姉の家からも寄越してくれるし、あんな物の店を出さしてもらふ筈になつてゐます。そして子供を一人もらつて私はもう何處へも嫁かないつもりです。』

いつもの流暢な口調でしかもまことしやかに話した。

『それでお前、齋藤とそんなことになつて、よく内儀さんが知らずにゐるねえ。いつかも齋藤が戸塚の方へ妾を隱してゐたのが分つたといつて、喧しかつたぢやないか。』

『ですから、今度も私とそんなことになつたのを姉さんの處でも初めは私にひどく喧しくいひましたさ。此の前妾を置いてゐた時には此方が仲に入つて話をつけたりしたのに、現在家内の妹とそんなことがあるのを默つて見てゐられないつて、さういつたけれども私にしても齋藤にしてももう若い者ぢやないしするから無分別なこともすまいし、さうなつたものなら今更ら仕方がない。たゞ内儀さんに隱して置きさへすれば可いからつて、姉達もそのまゝに知らぬ風をしてゐることになつてゐるんです。ですから、あなたもお願ひですから默つておいて下さいよ。』

彼女はさも〳〵まことしやかにいつた。

私も、それでは吉田とは去年の九月に別れたきりその後齋藤の世話になつてゐるのが眞實だなと思ひつゝ

『だけど吉田と關係のなかつた筈はないがなあ。』と、私はまた話を前に引戻して、繰返へして訊ねた。まだ吉田などが私の家に一緒にゐる時分に私の目に留つた二人の間の可怪な樣子を一々細かに思ひ出して訊ねた。

『今は齋藤の世話になつてゐるとしても以前私の家にゐる間に吉田とそんな關係があつたのだから、それを訊くのだ。あつたら、あつた。といひさへすればそれで可いのだ。』

私は何處までも穩かに訊ねた。

『そんなことはありませんといつてゐるぢやありませんか。何度いつたつて同じことです。第一そんなことがあつたとしたら、吉田さんが國に歸りやしません。』

彼女はきつぱりといつた。

さういはれて見れば私もさうかと思つた。それで稍々しばらく默つてゐた。けれども吉田に關する疑念はまたしてもすぐ盛り返へして來た。

『十四も歳の若い男とよくそんな態が出來たものだ。』

私は嘲るやうに放言した。すると彼女はしばらく默つてゐたが、何か複雜な感情

に堪りかねたと思はれて、

『吉田さんと關係があつたら、あつたで可いから、そんならあなたの思ふ存分にして下さい。』と、突然大きな聲でいひ放つと、段々ヒステリーな口調になつて『さあ、思ふ存分にして下さい。さあ私を突くなり殺すなりして下さい。……』

終に喚くやうな泣き聲を立てつゝ私の肩先に乘りかゝつて嚙みつかうとした。その物音を聞きつけて襖の彼方に控へてゐた友達と蝋とが驅込んで來て彼女を取押へた。

私は今その時のことを思ひ出して見ても慄然とするほど淺間しい不快な心地に堪えられない。

『さあ、もう歸りませう。』友達は彼女を宥めた。『君、もう話すだけのことは話したのだらう。一寸といつて僕が此の女を預ることにして來てもらつたのだから。』

『えゝ、もう歸ります。』女はすぐ平靜になつた。

『私が送つてゆきませう。』友達がさういふのを、

『なに一人で歸ります。ぢや吉田さん私一人でお先きにかへります。』さういつて彼女は歸つて行つた。

それで私の感情は少しも滿足出來なかつた。一應仲に入つて口をきいてくれた友達も手を引いてしまつた。一昨年私の家にゐる時分に私が認めた彼等の可怪い素振りを今思ひ出して、あゝいふこともあつた、かういふこともあつた。それだからお前達は私の眼を忍んでゐたのだといつても、

『そんなことはありませんでした。』

といひ切つてしまへば、それ以上にどうすることも出來なかつた。けれどもそれでは私の感情がどうあつても滿足しなかつた。私は最早それ以上他人に向つて私の痛ましい心情を打明かすのは無駄なことだと思つた。さうして唯獨りの心に閉ぢ籠

つて、人間といふものゝ決して信愛すべからざるものだといふことを思ひつゞけてゐた。人間は到底獨りきりのものであるといふことを痛切に思ひ知つた。

その頃までの私は、自分ながら心持ちの好いほど溫かな人間であると思つてゐた。それが溫かであることはつまらぬことであるとさへ思ふやうになつた。何にしても私は彼等を疑はなかつたことを悔いた。さうして彼等の行つたことをいろ〳〵に妄想に描いて、吾れとわが心を腐らしてゐた。それのみならず姉の夫などを對手にしてさういふことを繰返へして話をすることに名狀しがたい嫌惡を感じた。

けれども私の感情はどうあつても滿足出來なかつた。抑へてもおさへても抑へ切れぬ憤怒の情と執着の念がまたしても頭を擡げて私の精神を腐蝕せしめた。私は自分で自分の心持ちをどうすることも出來なかつた。さうして同じことを晝夜の別なく心の中に繰返へして描いては怨んだり悔んだりしてゐた。私は自身の想ひに疲れて生き効ひのない日を消してゐた。

すると三四日經つてから四十あまりの知らぬ男が訪ねて來た。彼は彼女の一族の者に頼まれて來た。今度の話について自分が代理人として和解をしたい。そのつもりで今後は一切自分に話をしてくれといつて、勿體ぶつた委任狀のやうなものを取出して見せた。

『あゝさうですか。』といつたが、私は自分の精神上の問題に、そんな見も知らぬ男が立入つて來ることを最も好まなかつた。それよりもこの三四日來つゞけてゐたやうに晝間も寢床に横つて、到底他人に啓示することの出來ぬ心の奥のおくの痛ましい感情に思ひ耽つてゐる方が好ましかつた。

『それは折角のお骨折りで痛み入りますが、私はもうその事についてはどうもしないつもりでゐるのです。』

『しかし私もよく譯をきいて全くあなたがお氣の毒だと思つてゐるのです。とにかく二三年といふもの、あなたは殆ど何もしないで、そのために貴重な時日を無駄に

費してゐたのだから、彼等にさういふ行ひがあつたことが明になつた以上は相當の話を付けたら可いぢやありませんか。』怪しい漢語交りで話した。

『相當な話とは。』

『つまり先方では、あなたがお氣の毒だから、もとより御不自由はないとは思ふが、お見舞として失禮ながら何程か差上げたいといつてゐるのです。お收めになつてはいかゞです。』

『私に金をくれやうといふのですか。』

『その、金といつては失禮ですが、金といはずにお見舞として……あなたも隨分この事については心も痛め、それがために身體も害しておいでになるさうだから、多分のことは出來なくつても一と月か二た月何處か溫泉場へでもいつて養生の出來るくらゐのことを見舞として差上げたいといつてゐるのです。さうしてこれは私がいふんだがもうあなたもこのことはさつぱりとこれ限り諦めてしまつて、養生でもして身體を直して、あんな不貞腐れの女でなく好い奥さんでもおもらひになることを考へた方が好いぢやないか。』

彼は鄭寧な口上をきいてゐながらそれを裏切るいけぞんざいな言葉でいつた。

『難有うございますが、いや、私はそれは諦めないつもりです。』

『それはいけない。諦めないといつたところが、どうすることも出來ない。あなたは女を元に戻すといつても、どうあつても戻らないといへば仕方がないぢやないか。』

『私も最初はも一度元へ戻したいと思つたが、今では吉田とは違ふ、他の男の世話になつてもゐるさうですし、もうさういふ考へは私にはありません。たゞ私はひどい目に欺されたことを一生怨んで居らうと思つてゐるばかりです。どんなことがあつたつてこの怨みを忘れやしない。』私は言葉を強めてさういつた。

『はゝゝ怨むなんて、そんなことを思つてゐるのは畢竟あなたの損だ。つまらな

い。』

こんな押問答をしたが、話は果てしがなかつた。

『とにかくこの話のつくまで、おすまは私があづかつてゐるのです。あなた何處がよくつて、あんな女が忘れられないのだ。』彼はさうもいつて私に思ひ切らして、先方の申出を納得させやうとした。

『向が出さうといふのだから、いくらでも金を取つておいた方があなたの得だ。君が一生怨んでゐて忘れないといつたところが、この話はもう二年も三年も前の徽の生えた事だもの。今日になつてそんな話を持ち出したつて、向が悪い人間だつたら、そんな下らぬことを取上げやしない。馬鹿だといつて笑つてゐらあ。君の災難と思つて諦めるより他はない。』

『それは馬鹿といはふと、何といはふと勝手だが、あつたことは古いことでも、それをいよ〳〵さうと知つたのは新らしいことだ。……それよりも女はあなたが預つてゐるのですか。』

私は、その時道理も何もなかつた。やつぱり彼女に會つて三年越しの怨みを思ふ存分にいひたいが腹一ぱいであつた。

『とにかく私は金は入らないんですから、あなたが預つてゐるなら、彼女に會つて私の思つてゐることを話しませう。』

『逢つて見やうと思ふならあつて見ても可いが、とても戻る氣はないんだから駄目だよ。』

けれども私はその翌日その男の澁谷の家まで出掛けていつて、そこでまた彼女に逢つた。私はこの間もいつたとほりのことをまた靜かな口調で嘲るやうに繰返へした。

『ですから、あなたがさう思つてゐるなら、私を斬るなり殺すなりしたら可いぢやありませんか。』

『……』

『あなたはよく手紙でそんなことを書いて寄越したぢやありませんか。臆病者が。』

女はさういひながらせゝら笑つた。

『ぢや思ふやうにしてやる。』私は起ち上つた。

『こら、何する。』傍についてゐた彼の男は靜に手を上げて私を支へるやうにした。

『お前はもう彼方へいけ……。』さういつて彼女を去らしめた。

『君駄目だよ。あれだからとても駄目だよ。君が切れ物を揮り廻はしたつて、此方は恐れはしない。とてもそんなことは君に出來やしない。刀を揮り廻はすんなら此方も隨分やつた方だ。こゝにちやんとかうしてある。』

彼はさういつて押入から刀を取出して鞘を拂つて翳して見せたりした。

『茨城縣で自由黨の壯士をしてゐた時分にやられたんだ。これ。』

と、いつて彼はくるりと着物を捲つて太股を貫通した見るから氣味の惡い大きな創痕を見せたりした。

『とても戻る氣はないんだもの。』彼は語勢を强めていつた。

けれども私は、自分でも彼女の心が全然私から離れてしまつてゐることを知れば知るほど、どうあつてももう一度彼女の心を私に近づけて見ねば感情が滿足しなかつた。さうでなければ私の推定してゐる事實を明白に告白するか、どちらかしなければ三年の間痛めつけられてゐる私の感情が堪えられなかつたのである。

『だから此處でいくらでも向が出さうといふ金を取つておいた方がいゝんだよ。』

傍で何といつて說いても慰めても私か凝乎と陰氣に思ひ沈んでゐるのを見て彼の男は頻りに金のことを繰返へした。

その日はそのまゝにして私は下宿に歸つた。

『まあ、よく考へて見るさ。女は話のつくまで私が預つてゐるから。』彼はさういつてゐた。

私は、相變らず荒寥たる下宿の六疊に寢轉んで晝夜の別なく自分の堪えられない感情に吾れとわれを苦めてゐた。

翌々日になつて彼男はも一人知らぬ男とつれ立つてまた私の下宿に訪ねて來た。

『どうです。決心が付いたですか。』

彼は強ひるやうにいつて、私が金を受入れることを執拗に勸めた。

『君、いくら思つても駄目だよ。おすまは君が思つてゐるやうに齋藤の妾になつてゐるといふのは嘘なんだよ。やつぱり君が最初思つてゐたとほり吉田とこれなんだよ。』

彼は母指と人さし指とをくつ着ける眞似をしていつた。『君がいくら思つても、二人はとても離れやしないよ。』

『いや、そんなことはない。それは君がよく知らないんだ。』私は、今は彼女が吉田と一緒でゐることを強く否定した。

『あゝれ、それだから君は駄目だといふんだよ。』彼は笑ひながら連れの男と顏を見合はした。

『やつぱり吉田と一緒ですよ。』も一人の男も笑ひながらいつた。

私は彼等の笑ふ顏を見守りながら稍〻心に疑ひを萠した。けれども彼等よりも私自身の方が、事實の眞相をよく知つてゐるのだといふ自信があつた。

『いや、そんなことはない。吉田とは關係があつたにはあつたと思ふが、去年の九月に別れて今は神田の方にゐるんだ。』

私は、この間彼女から、今の境遇を聞いた翌日『あなた、また齋藤の家を捫まないやうにして下さい。』

と、彼女が顏を顰めながら眞實をこめたやうにしていつたのを、そのとほり神田の齋藤の家まで出掛けていつて、そこの内儀さんに言ひ告げたのであつた。

『齋藤さんには私は少しも怨みのあるわけはありませんが、彼女が自分でさういつ

たのですから、それに相違ありません。』

私はさういつて、この間本人から聞いた彼等の間の後々の口約束やら、彼女と吉田との間にあつたことなどを細かに内儀さんに話した。

『さうですか。おすまさんには姉さんの家でちよい〳〵會つてよく知つてをります。あなたが淺海さんですか。あなたのお名もよく聞いて知つて居りました。……あの方、そんなことをなさるんですか。』

内儀さんは呆れたやうにいつた。

『けれど良人がそんなことをしてゐますかなあ。私はちつとも存じませんよ。』

小首を傾けながら彼女は容易に信じられなさゝうにした。

『ほんとに違ひありませんよ。こんなことを申しては、私は齋藤さんとあなたに濟みませんけれど、さういふ理由で齋藤さんには私は少しも怨みはありませんのですから。しかし眞實ですよ。』

『さうですか、そんな約束してゐることまで、あの方が自分でお話しになつたのですか。』

さういふ内儀さんの顔は、私の話しの急處々々で、さつと顔から血の色が青く變じた。それを見るたびに私の感情はいくらか滿足した。

『それは君が、おすまに甘く騙されてゐるんだよ。何で神田なんかにゐるものか……それだから、全くこの人が氣の毒なんだよ。』

彼はいた〳〵し氣に眉根に皺をよせながら、つれの男を顧みながらいつた。

『うむ、あなたが間違つてゐるんですよ。やつぱりおすまは吉田と一緒だ。……あんまり君が正直だから。……おすまといふ女は餘程いけない奴と思はれるな。』

連れの男は肯きつゝさういつた。

『いけない奴にも、非道い莫蓮者さ。君はいけないよ、君はおすまの頭の突先から足の爪先まで惚れ込んでゐるから騙されるんだよ。』彼は焦れつたさうに言つた。

『さうかなあ……さうぢやないと思ふがなあ。』私は、どうしても二人のいふことを眞實と思はなかつた

『はゝゝゝゝ』と、二人は笑つた。

『まあ君がさう思ふならそれでいゝから。おすまに會ひたければ家にあづかつてあるから、とにかく明日もう一遍家に來て下さい。』

二人はさういつて歸つていつた。

私は、それがために假ひいかほど恨んだり苦んだりするにしても、たゞ自分の胸の底で一人思ふまゝに苦んだり恨んだりしてゐやうと思つてゐるものを、自分とは何等の關係のない彼等のために私の心の奥のおくの虚僞もいつはりもない大切な感情が街頭の風塵に曝されるやうで、その事について彼と話しを交へるのが嫌でいやで耐らなかつたけれど、やつぱり彼女に會つて見たくつて、それに引かされて翌日また澁谷まで出かけて行つた。

『今、久しぶりに頭髪を結ふとか言つてゐたから直ぐ歸つて來るよ。』

さういつて何時までも私を待たしておいて、やつぱり金を受入れることを强ひるやうに勸めた。

極度に神經の疲勞してゐる私は、五月の末の惱ましい日を晩まで待つたけれど女は終に顏を見せなかつた。

『どうしたんだらう。いつて見て來い。……なに家が狹いから、一寸此の先の方に間を借りて置いてあるんだ。』

そこの女房はいゝ加減經つてから階段から顏を覗けながら

『今日頭髪が出來ると、久しぶりに牛込に行くといつて出たさうですよ。きつと姉さんの家にでも行つたのだせう。』

『さうか、ぢや今に歸つて來るだらう。君は今晩自家に泊るさ。』

彼はさういつて、またしても頻りに金を受取ることをすゝめた。後には脅かすや

うな氣勢を見せて來た。

『おすまに話があるなら、また後で話すとして、とにかく金を取つたらどうだ。さうして甘い物でも食べた方がいゝよ。』

『さうしようか。』　私は主人と一緒に夕飯を食べながら口に出した。

『さうなさいよ。』　女房も口を添えた。『おすまさん、昨日一緒に洗湯にいつたとき剃刀を持つてゐましたよ。』

『へえ、そんなものを持つてゐて。あなたよく分つたなあ。』

『そりやあ貴方分りますさ。人を見つけてゐますもの』

澁谷のその邊には曖昧な料理屋が軒並にあつた。首を眞白に塗つた女がそこら中にゐた。そこの家にも二人ばかりそんな者がゐた。

『あなた持つてゐるんですねえ。といつたら、えゝ私覺悟してゐるんです。これさへあれば淺海がどんなことをして來たつて大丈夫です。と、そんなことをいつてゐましたよ。』

私はそれを恐れもしなかつたが、いろんな手でそこの家で私を囚へて置かうとするのが見えて來たので、それを逃れるためにいつそ百圓の金を受取らうかと思つた。

『さうしたら君、今後一切此の事については何にもいはぬといふ證文を書いてもらはねばならぬ。』

『それは書くのは厭だ。』

『そんなら君、金は出さないよ。』

『私は別に金は欲しかあないんだ。たゞあなたが受取れとすゝめるから受取らうかと思つたんだ。そんなら百圓くらゐの金は取らないで、やつぱり此の事をいつまでも恨みに思つて一生おすまに祟つてやる方が私にはいゝんだもの。』

『何だ。いはしておけば勝手なことをいつてゐらあ。さあ金を取つて今後一切文句をいはぬといふ證文を書け。』　彼は突如怒鳴りながら持つてゐた長煙管を振り上げ

て餉臺をがちやりと叩きつけた。私は吃驚したが、

『何だ百圓なぞの目腐れ金が。……一生祟つてやるんだ。』靜にいつた。

『何も斯も分つてゐるんだから困る。』

彼はまた氣を換へて言葉を和らげながらいつて、先刻入つて來てそこにゐた昨日一緒につれて來た男の方を見た。

彼等は最初から私を自分等より遙に學問のある人間として遠慮して取扱つてゐる風があつた。

『ふゝん千圓も出せば、證文を書いてもいゝが。』

彼等を飲んでゐるのが私には好い氣持ちでもあつたが、事實私はこの三年の長い間の感情の憤懣を思へば、千圓はさておき一萬圓にも換へることが出來なかつたのである。つまりどうあつても金に換へることが出來ぬのである。

千圓といふ聲を聞いて、彼は更に靜になつて暫らく默つてゐた。

その夜は私は仕方なくそこに泊められた。

翌日も午を過ぎてもおすまの歸つて來る氣配はなかつた。

あるじは再び昨日のやうに金のことで私に壓迫を加へやうとしなかつた。彼は庭を掃いたりそこらを形付けたりしながら、偶に思ひ出したやうに

『もう歸つて來さうなものだ。』と獨語のやうにいつてゐたが、何となく心はそこになさゝうで、顏に何事か深く思案してゐるらしい色が見えた。私はそのわけを知らなかつた。

『いつそ、いつちまはうか。』

そこに來て煙管を取上げながら舌打ちをしていつた。

『そんなことをしても可いんですか。』女房は强く窘めるやうにいつた。

『うむ。』と、やゝ久しく考へ込んでゐたが、『構はない。いつちまへ。君、眞實をいふがねえ。おすまを預つてゐたといふのは嘘だよ。』彼は語勢をつよめていつ

た。

私は、それを聞いてはつとなつた。

『嘘なの。もう神田へ歸つたの。』

『神田ぢやあないよ。もう疾に吉田と一緒に岡山に歸つたよ。君が馬鹿正直だから甘くあれ等に騙されてゐるんだ。』彼は感慨に滿ちたやうな聲でいつた。

私はそれをきいて、全身に毒がまはつたやうな胸苦しさを感じた。

『ぢや神田の齋藤の世話になつてゐるといつたは嘘ですか。』

『君は騙されてばかりゐるんだ。此の間も新吉が迎へに行つて吉田と一緒に三人で東京に出て來たんだ。もう今時分は岡山に歸つてゐらあ。君が何と思つても、大熱々だもの。とても離れやしないよ。』彼は燃き付けるやうにいつた。

『さうか。』私は獨語のやうにいひながら、いつまで彼等に欺かれてゐるのであらうか。八つ裂きにしても尙ほ飽き足らぬ奴等だと思つた。

『此家にあづかつてゐたといふのは、そんなら嘘だつたのか。』私はあまりに自分の愚かさを思つて、その愚かさの恥を押し隱すやうに、わざと笑ひを作つていつた。

『嘘だよ。……先達つて此處で君が會つたあの翌日吉田と一緒に急行で岡山に歸つてしまつたんだ。』

『あの翌日もう歸つてゐたのか。』

私は飽くまでも愚かな自分の身體を搖きむしつて叩きつけたいやうに思つた。

『ぢや一昨々日だな。』

『さあ一昨々日になるか。……とにかく歸つてからもう三四日になるよ。』

『さうか……おのれ畜生め、仇を打つてやるぞ。これから明日の最大急行で直ぐ岡山に行く。』

私は腹の底から搾り出すやうな痛ましい聲を出して憤慨した。

『そら御覽なさいな。』

そこにゐた女房は、私がそれをきいてさながら怨み骨髄に徹するやうに俄に煩悶し出したのを、默つてあてがつた毒藥の利くのを見てゞもゐるかのやうに、物々しい顏で亭主にいつた。

『一體あの新吉が惡いんだよ。彼奴が惡黨だ。彼奴が岡山に行つて三人で相談して來たんだ。……君が看す〳〵彼奴等に騙されてゐることを此方は知つてゐながら、それを巧く隱してゐる切なさといふものはなかつたよ。』

『私の方まで一緒になつてあなたを騙すつもりはないんですけれど、話の順序でつひさういふことになつたんです。』　女房はさういつて取り做した。

『いえ、眞實のことを言つてもらつて私はどんなに嬉しいか知れない。あなた方にさういつてもらはねばまた何時までも騙されてゐるんだ。』

『日光で宿帳を調べたやうに、岡山にゐるとは知らず今度は神田中を探してゐたんだ。いくら探したつて東京には居りやしない。』　亭主はさういつた。

『でもおすまさんといふ女は、つく〳〵私、恐ろしい女だと思ひましたねえ。……またあなたがあの女のいふとほりにさう思つてしまつたんですつてねえ。此の間此處で自分でさういつてゐましたよ。なに大丈夫だ、私が齋藤の世話になつて神田の方にゐるといつたら、淺海がそのとほりに思ひ込んでゐるから岡山までやつて來る氣使ひはないつて。』

女房はそんなことをも話した。

『そんなことをいつてゐましたか。おのれ畜生め、私を巧く騙して置いたから岡山に來る氣使ひはないつて。……見ておれ、私は明日岡山に行く。』

そこの亭主が何故終になつて、私に祕密を告げたかといふに、彼は昨夜私が『千圓もくれゝば證文を書く。』といつた時から心が變つて來たのであつた。

最初向の連中は腹心を明かして、私との仲に立つて和解することを彼に依頼した。

吉田の手から金を百圓出して、八拾圓は姉の夫が預つてゐて、彼はあとの貳拾圓を周旋料として貰つた。そして私に今後一切文句をいはぬといふ證文を書かしたならば八拾圓の金を姉の夫の手から受取つて私に渡さうといふことになつてゐたのであつた。

それはずつと後になつて私に分つた。とにかく彼等はその男を味方に使つて私を騙しておいて話をつけやうとしたのであつた。それ故彼等の祕密は凡て彼には明しておいた。然るに彼は中途で私の方に寢返へりを打つた。

『こいつは一つ、淺海の方にぐるになつて、吉田を請强つた方が甘い仕事がある。』と思つた。それで彼は一切の祕密を私に明してしまつた。

『好いかね。私から聽いたと言つてはいけないよ。岡山では一戸を構へてゐると市稅がかゝるから市役所に行けば直ぐ分るんださうだ。日光で調べられたやうに岡山に來て市役所を調べられるとすぐ分る。といつてゐたから、君が行つたら眞先に市役所に行くんだ。吉田といふのは大變な金持ださうだよ』。

私達はそれから岡山に行つて吉田を請强る相談をした。私が先發して彼地の都合で彼は後からつゞいて來ることになつた。

しかし私は吉田を請强るなどの考へは少しもなかつた。彼が千圓といふ夢を夢み、さういふ惡計を企んで私に寢返へりを打つて吉田等の祕密を明かしたのだから、私もその同類になつた風を裝はねば彼の口から凡ての祕密を探ることが出來なかつた。

『大丈夫巧くやるから。とにかく彼地についたら早速手紙を出します。』

私はその夜一旦自分の宿に戻つて俄に旅支度をとゝのへ、また出直してそこの家に來て泊り、翌朝俥に乘りながら景氣よくそんな言葉を殘して新橋に向つた。

岡山についたのはその翌日の午前二時ごろであつた。停車場に近い旅館に泊つて、寢床をとらすと直ぐ横になつて、努めて疲れた心を落着けて熟睡を得やうとした。

一と寢入りして目を覺すと、とくに明い朝になつてゐて頭が晴々したやうに元氣づいてゐる。

私は子供の時に讀んだ仇討ちに、今日こそは多年苦心の効ありて宿願成就し父の仇を報ずることが出來るといふ、その朝の心持ちのやうな感じが頻に湧いて起るので「おさゐ權三」の夫市之進のことなどを思ひ出して女敵うちに出てゆくやうな心をそゝられながら旅館の俥を飛ばして市役所にと急がした。

果して、市役所の課税掛りの處について帳簿を調べてもらふと、すぐ分つた。

『深江すまといふ御婦人ですな。あります。……去年の九月ごろから一戸を構へておいでゝす。もう三度めです、今度の家で。私も調査で行て一度會ふたことがあります。えゝと三十前後のお人でせう。』といつて、老人の市吏は帳簿から目を放して眼鏡ごしに私の方を見た。

『えゝ、さうです、さうです。そのくらゐの年配です。』私は町名番地を聞き取つて、雀躍する心地で幾度か頭を下げて禮を述べながら其處から出た。そしてまた待たしてゐた俥に飛び乘つて件の町名番地へ走らした。

その番地は見付かつた。私ば自分の足音を盗むやうにして門の内に入つていつた。が、門の内には二階建ての長屋作りの家が二棟も立つてゐて、私はそれを一つづゝ見てあるいたが、深江すまと誌した名札は見付らない。はて、僞名をしてゐるのかな。それとも何處かで聞いて見やうかと思案をしたが、それがためにもし洩れ聞えて風を食らつて取遁しては一大事と思ひながら、とある一軒の家に入つて、その借家の持主を訊ねた。家主はそこから遠くない大川端に沿うた材木問屋であつた。私はまた俥に飛び乘つてその材木屋に急いだ。

材木屋の店頭には尊の婆さんがゐた。何町何番地のあなたのところの借家に深江すまといふ婦人がゐるのを聞くのですがといふことが、何度いつてもそのお婆さんに聞き取れなかつた。私は氣ばかり急いて顏を顰めて焦つた。すると奥から十六七

の綺麗な娘が出て來て。

『お婆さん、深江すまさんといふのは、あの隱居所にゐる人のことでせう。』娘は婆さんの耳に口をすり寄せていつた。

私はそれをきいて『はゝ、ぢや一寸小意氣を家だな。』とすぐ思つた。

お婆さんは、娘のいつたことにうなづいた。娘は私の方に向つて、

『あそこの門をお入りになつて、すぐ左側にあります。』

『そんな家がありましたかなあ。』と、いひつゝ私は娘に委しく敎へられて、その材木屋を出ると、また俥でそこへ戻つて來た。ちやうど寢鳥を抑へるやうな心持ちで私は再ひ以前の門を入つて行つた。なるほど氣をつけて見るとすぐ左側に開戸がある。それを明けると細い露路のやうな中庭になつてゐて、つき當つて右に折れてゐる。そこまで入つて行くとまた一枚の開戸があつて、そこに深江壽滿としるした新しい木札を打つつけてある。私はそれを見ると、獨りで心に肯づきながら、また外に出てその家だけを取廻はした板塀について他に出口はないかと見てまはつた。そして再び入つていつてその開戸を押明けると、細い中庭のつき當りの板の間のやうな處に唐棧の袷衣を着た彼女は手拭を姐さん冠りにして横楊枝をつかひながら、團扇をぱた〳〵いはせて七輪に火を熾してゐた。

ごとりと開戸を押明けてそこへ不意と私が姿を現はしたので、彼女は一目こちらを見ると同時にさつと顏から血の色を失つて、

『あつ！』と、いひさま呆然となつてゐた。

私は、つか〳〵と二三歩前に進んだが、そのまゝそこに突立つて、やゝしばらく凝乎と彼女を見た。

『おい、神田の齋藤の妾宅が二百里も離れた處にあるのはさぞ不便だらう。』

私は睨みながら笑つていつた。

『えゝ、』と、女は仕方なさゝうに笑ひながら、『さあまあお上んなさい。』と、

いつて座敷の方に入つた。

『あなたよく分つてねえ、坂田がさういつたんでせう。彼奴は悪黨なんです。あいつがいふだらうと思つた。さあ此方にゐらつしやい。』　さういひつゝ座をすゝめた。

『坂田が悪黨なんぢやない。その悪黨を使つた方がまだ悪黨だ。悪いことをすりやどうせいつかは分らずにやゐない。』

そこへ吉田がもう朝からやつて來た。吉田の家はすぐ隣町にあつた。

しかし彼等はそこまで突き留められてもなほ白ばくれて實をいはなかつた。私は往生際の悪い奴等だと思つたが、それ以上事實を糺す必要を認めなかつた。

それから三四日押問答をしたあと、さも私に追ひまくられでもしたやうに、愚痴を溢し〳〵ばた〳〵にまたそこを疊んで箒やお釜のやうなものまでも荷物に仕舞ひこんで東京に舞ひ戻つた。

それが四十四年の五月であつたから、去年の二月に夜途中で行き會ふまで中まる二年を置いて足掛け四年見なかつた。その間に再び岡山に戻つてゐたことは私も聞いてゐた。田舎からまたいつ歸つて、そしていつ淺草の方に身を寄せたか知らぬ。

私は今歳の春の初から五ヶ月ばかり京阪にいつてゐた。そして東京に歸つて來て二日めか三日めに、今日途中で二度も彼女を見た。一度は若い男と話しながら歩いてゐた。しかしそれは何でもない、たゞ知つた男であつたらしい。

『おい、この頃はどうしてゐる？』と、後ろから聲をかけると、

『えゝ、今一寸榎町までいつて來た。』と見向きもしないでいひながら、その連れの男と何か話しながら颯々と向へ行つた。私は輕跳なその物のいひつぶりに反感を起した。

『どうしてあんな女に前後十年も心を苦めたらう。どうして自分の大事な生命をそのために涸らしたらう。』とさへ思つた。

そしてその日の午後また外を歩いてゐたらまた行き會つた。今度は私にも連れがあつた。彼女は默つて私をじろ〳〵見ていつた。私も今度は默つてゐた。

その後ある夜電車に乘るとすぐ傍に彼女の姉が腰を掛けてゐた。

『えゝ淺草も内儀さんがないと思つたら、あつたとかいつて直き戻つて來ましたよ。あれも仕方がありませんよ。』さういつてゐた。

そのうち乘換へ場が來たので私は降りた。（をはり）

惜春の賦

一

柔かい蒲團の中で春本君と牧野君とは殆ど同時に眼を覺ました。

『もう何時ごろでせう。』

牧野君が蒲團の中で動いてゐるらしいのを見て春本君はまだ半睡の聲を出した。

『さあ、もう大分遲さうだな。』

牧野君は外の物音を聞きながらさういつた。

『汽車は九時でしたな。』

『さうだ。』

すると雨戸の外でぎい〳〵と櫓の音がしてゐる。

『どうです。あの音は。』

春本君は馬鹿に嬉しさうにいつた。

『うむ。いゝなあ。どうしても廣重情調だ。』牧野君はさういひながら蒲團の中から手を差伸して煙草を摘んだ。

『もう起きませうか。』春本君はすつかり眼の覺めたやうにいつた。

『起きませう。』

春本君は勢ひよく寢床を離れると、褞袍のまゝ女中の入つて來るのを待ちかねて、自分で縁側に出て雨戸を繰つた。

『牧野さん、どうです。早く起きて御覽なさい。』

牧野も急いで褞袍のまゝ縁側に出た。

欄杆の下には汪洋たる楫斐川が春を浮べて靜に流れてゐる。

『いゝねえ。』

『いゝですねえ。』

河口の方は朝日に輝く水面を柔かい濛靄が白く立罩めてゐる。

『どうしても春ですなあ、』牧野は感心したやうにいつた。

『春ですなあ。』春本君も同じやうに應じた。

そこへ仲居が入つて來て、

『お早うございます。』

と、愛相よく挨拶しながら顏を並べて外を眺めて、

『あれが昔のお城の跡だす。』と、河上の方の石垣のある處を指示した。

そこには大きな石で築いた石垣の跡が殘つてゐて、磯馴れ松などが靑く立ち並んでゐるのが見える。

『なるほどあそこが桑名の城址か。よく廣重の五十三次の繪などにある處だな。』

二人はさういひながら飽かず河の方を眺めてゐた。

やがて顏を洗つて戻つて來るとすつかり掃除が出來てゐて、二人は昨宵書くはずで書かなかつた繪葉書を東京の友達などに書いた。

昨宵は五六人の藝者や舞妓が來て、「桑名の殿さま」を踊つた。それ等が歸つて二人が寢たのは二時を過ぎてゐた。そこの座敷に飽きて、自然の順序は到頭取卷き藝者や仲居に勸められつゝ隣家の揚屋まで送られたのであつたが、

『どうでございます。さういふなら、早うさういふときませんと、えゝ妓がないやうになりますよつて。』

といつて促すのを、牧野君も春本君も柄にもなく厭に互に體裁を繕ふて、揚屋には寢なかつた。

『さあ、飯が來る前に繪葉書を書いてしまひませう。』

そこへ仲居は春本君があつらへた蛤の湯豆腐を運んで來た。

牧野君は、ぐつ〳〵煮え立つ鍋の中を見ながら、

『なるほど此奴はおつだな。』

『まあ一杯やりませう。』

春本君は繪葉書を書いてしまふと牧野君を促した。

『おゝ可い。この汁の味は格別だな。』牧野は仲居の取つて出した木皿の汁を啜りながら舌鼓をうつた。

『姐さん、どうぞもう一本。……まだもう一本ぐらゐはいゝでせう。何時か知ら。』

どうしても一本だけでは濟まされぬ春本君ほ、酒好きらしう落着いてさういひながら銀貨入れの中に一緒に入れた鎖を付けない小い時計を取出して見た。

『ほう、もう八時二十分だ。』

『九時十分か十二分だつたから急がうよ。』

『急ぎませう。』

『併し桑名は惜しいねえ。』

『京都に落着いてから、伊勢參宮をしながら、ぜひもう一度來ませう。』

牧野は急いで飯にしたが、春本は二本の徳利を空にすると、飯は食べないで、二人は一度に立つて褞袍を着物に更めた。

『お俥がまゐりました。もうこれ持つてまゐりましてもよろしうございますか。』

他の仲居が出て來て鞄や毛布を運びはじめた。

『もう二十分しきやないぞ。』

牧野は、書付を見ながら勘定方をしてゐる春本の前に突立つた。

舟津屋の入口には三臺の俥が、その一臺には二人の鞄を載せて待つてゐる。多勢の仲居に送られながら、

『ほつ急がしいことだ。』と、いひながら牧野は先づ俥に乘つた。

春本もつゞいて乘つた。かゝりの仲居は後れ馳せに長く開いた書付けとなにがし

かの残りを盆に載せて持つて駈け出た。

『それは取つておいて下さい。』

と、春本は物馴れた調子でいひながら俥に腰をかけた。

二

二人は、東京を立つてから今日で三日めの旅をするのである。一昨日は甲斐信濃の山々に残る雪を汽車の窓から眺めながら松本の淺間温泉に泊り、昨日は木曾から名古屋を乗り越して桑名まで辿りついた。それで今日もう一日小半日を汽車に乗れば彼等の目ざす京阪へ着くことになつたのである。

昨夕は日が暮れてから桑名についたのでよく分らなかつたが、停車場にゆく俥の上から眺めると鈴鹿山脈にはまだ三月末の雪が斑に残つてゐて、そつちの方から吹き下して來る寒い風が襟頸に滲みるやうに觸つた。

それでも汽車の中はスチームが通つてゐるので熱過ぎるほどな温度に温められて、牧野は昨宵の寢不足の體を好い心地になつて後に凭れながら微睡としてゐた。

昨日一昨日の道中とちがひ此處邊は二等室もぎつしり乗客が滿員なので二人は車室を我が物顔に振舞ふことも出來ぬのと、今日は早く湊町まで着くので靜に窓外の景色を眺めるよりも心は夙に京大阪の方にばかり馳せてゐるのである。

それでも牧野は鈴鹿山脈の眺望に耽ることを忘れなかつた。

『春本君、僕は此の邊の山が大好きなんだよ。』

と、牧野は汽車が關から加太のあたりを通る時窓から顔を出して向の巍峨たる山山を指示した。奇聳な形をしたそれ等の山にはまだ雪がほんのり殘つてゐた。

『此處まで來てもまだ雪が殘つてゐますなあ。』春本もそちらの方を眺めた。

昨夜も一昨夜も遅くまで藝者を招んで酒を飲んだので流石の春本君も今日はいくらか疲れ心地で牧野と同じやうに窓枠に頭を凭れて微睡した。

そんなにしてゐる間に汽軍は思つたよりも早く走つて伊賀伊勢の山間に開かれた驛々を通過して、やがて最後の墜道を向へ通り抜けるとそこは最早山城國になつてゐて、大河原の山驛に着いた。木津川の溪流は伊賀の山の中を流れて、そこで鐵道線路に沿ふて西へ流れてゆくのである。

牧野は、そこから笠置山の下を通り木津川に沿ふて行く車窓の眺望を何處よりも好んでゐるのである。兩岸に巨獸のやうな奇怪な形をした岩と岩とが迫つた間を碧潭が渦を卷きながら流れてゐた。聳り立つた兩岸の山々には深い杉木立が暗く繁茂つてゐた。笠置驛のある邊まで來ると、溪流は次第に河の形を成して來て、兩岸の藪蔭には人家が崖に據つて架つてゐる。向岸に靜かな村が暖かな春の日を浴びながら山と山との迫つた溪底に眠つてゐるのが見える。山城から伊賀の方に通ふ街道であらう、川の向の山の裾の麥畑の間を白く蜒りながら續いてゐる。

牛に荷車を挽かせたのが通つてゆく。お遍路のやうな者が疲れた足を慵さうに運ばせながら歩いてゆくのも見える。牧野は、じつとその方を眺めてゐたが、自然にふと鄕里のことを想ひ浮べた。彼がまだ幼い時分祖母がよく「田倉畷の遙々と」と口癖にいつてゐたことを思ひ出したのだ。三里ばかり隔つた處へ姉が嫁いでゐて、祖母はその嫁入先きへ折々孫娘を見にいつてゐた。田倉畷はその途中にあつた。

「隅田川」といふ謠曲の初めに「日も遙々の旅路かな」といふ文句がある。牧野はそのことをも同時に想ひ浮べて伊賀街道の道をゆく旅人の姿を餘念もなく遠目に眺めてゐた。

汽車が加茂木津と段々西へ進むにつれて沿道には青々と麥の伸びた畑が開けて來た。

『この次驛が奈良ですな。』

牧野は春本の方に向き直つた。

『えゝもう奈良です。』

『いよ〳〵君の憧憬措かざる京阪の客となつたわけですな。』

『さうです。』

そんなことをいひながら二人はこれから先きの日取りの都合などを相談した。牧野は郷里が中國の方に在るので、今日大阪の天王寺驛で春本に別れ、そこで乘換へて梅田の方に廻つて、そこから山陽線に乘つて晩までには郷里へ着く豫定なのである。

奈良に着くと、東京の牛込驛を立つて以來、辨當を買ふことに必ず正宗の二合瓶を買ふことになつてゐた春本君は、そこでは上等辨當を二折と鰻まむしを二つ買つて、酒は買はなかつた。東京を立つ時から途中の旅費は豫算を定めて、凡て春本君が牧野君の分まで預つてゐるのである。

『珍らしいな。酒はどうしたの。』

『今日はもう直ぐ大阪に着きますから、今晩の樂しみに今はやりますまい。それに昨日一昨日惡酒を飲んだので頭が痛いです。』

辨當の殼を窓の外に投出す時分になると北の方に法隆寺の塔が松の間に遠く眺められた。

『牧野さん、御覽なさい。法隆寺の塔が見えますよ。』

春本君は、昨日松本を立つてから以來始終新聞の總選擧の結果を注意して讀み耽つてゐる牧野君を促した。春本君は一向その方には興味を持たぬのである。

法隆寺の塔が漸次遠くなつて來ると、今度はその反對の窓に春靄の中に遠く巨人の姿の如き金剛山が見えて來た。

『あれが高野山でせう。』

牧野は春本に聲をかけた。

『高野山にしては近すぎるやうぢやありませんか。』

春本はそちらを見向きながらいつた。

二人は東京を出る時から高野山に登ることをもプログラムの一つにしてゐるのである。

汽車は大和平野の南端を走り、大和川の狹隘に沿ふて河内の平野に出でやうとしてゐるのである。

すると、車窓の眺めは蒼い春霞の中に遙かの東南の山また山の彼方の天際にあたつて一座の連山の頂に尙ほ白雪を冠つてゐるのを認めた。

『あれが大臺ヶ原でせう。』春本がいつた。

『さうでせう。』牧野は肯いた。

高野山と思はれるのは遂に認められなかつた。

そのうち汽車は大和川の狹隘を通り越して南河内の平野に出て來た。大阪の方の空は春靄の中に煤烟が黑く一天に漲つてゐるのが見える。

『いよ〳〵大阪だな。』牧野は新聞を棄てゝ伸び上りながらその方を眺め渡した。

『ぢや一週間ほど別れませう。』

春本君はさういつて、これから湊町についてその晩すぐ大阪の友達を電話で誘うて北地へ行くか南陽へゆくか、遊ぶ順序をさも樂しさうに語つた。

やがて天王寺の驛に來ると、牧野は鞄と信玄袋とを赤帽に渡して春本にしばらくの別れを告げて汽車を降りた。そこから架橋を越えて向のプラットフォームに渡つて城東線の舊式な車室に入つた。狹い車内に入ると彼は俄に寂しさを感じた。春本と二人で三日の間空想的な愉快な旅をつゞけて來たことが新しく想ひ返された。本當なら此の間からやつて來たやうな閑氣な旅人の行樂に耽りたいのであるが、牧野が今度春本と一緒に京阪の旅を思ひ立つたのは、二人とも獨身者の氣樂な境涯である上に東京で遊ぶにも飽きたところから當分京阪に行つて、腰を据ゑて畿内諸地方の名所舊跡などを探ね巡らう。それには春本は東京に家があるのだけれど牧野は鄕里の老母が去年の暮からとかく病がちでゐるのを見舞ふのが重なる目的であつた。

そして同じく歸省するなら三月の二十九日には此の際物入りな事は出來ぬがかねてそのつもりであつた甥の祝言を取結ぶことにしてゐるから、その間に合ふやうに來てくれといふことであつたので、折角行くならばなるべくその間に合ふやうに行かうと思つてゐるのである。

『僕も君と一緒にせめて今晩だけでも大阪で遊びたいんだが……』

牧野は殘り惜しさうに幾度もそれを繰返したのであつた。彼は汽車で大阪市の東郊を巡りながら去年も今から一と月ばかり後れてやつぱり關西線に乘つて來て天王寺驛から梅田驛の方へ廻つていつたことなどをわけもなく追想したりしてゐた。それは四月の末で汽車の窓から惱ましい春の日が射込んで熱いくらゐであつた。その時に比べると一と月早いだけ春はまだ淺い。野にも山にも何處かまだ冬が殘つてゐるのが牧野には頼母しいやうに思はれた。

大阪驛でしばらく待ち合はしていよ〳〵山陽線に乘込むと、牧野は空想に生活してゐるやうな日頃の自分から次第に厭ふべき現實の自分に醒めてゆくやうな遣る瀬ない寂しい心持に襲はれて來た。

『二三日居たらすぐ京都に出て來よう。』

と思案しながら、忌まはしい寂しさを掻消すためにまだ空腹は感じないが神戸を發車すると食堂に入つていつた。そしてビールを傾けながら靜に暮れてゆく播州の平野を見るともなく眺めてゐた。青い麥の野面には柔かい春の風が音もなく吹き靡いて畝から畝へ波を立てゝゐる。牧野は何故とも知られぬ寂しい心地に浸りながらも一年ぶりで見る鄕里の老母を初めたれかれの悅ぶさまなどを思ひ浮べてビールに火照る顏を春の野邊を渡つて來る匂かな窓の風に吹かられてゐた。

三

播磨と備前との境に在る大きな三石の隧道を通過する時分には永い春の日も漸く

薄暮に迫つて、長い急匂配の道を喘ぎ〳〵駛せてゆく列車の窓から遙かの築堤の下の方に佗しさうに並んでゐる草葺の農家に燈火が見えそめた。

停車場から一里ばかりの夜道を俥に搖られて鄕里の家に辿りつくと、毎時ならばまだ端の間に人聲がして起きてゐる時分なのに、それとも俥が此處らあたりまでもう護謨輪になつてゐるので、それ故俥が門先に停つたのが聞えぬのだらうかと怪しみながら俥から降り立つた脚の踏み度の覺束ないのを堪え〳〵入口を明けて入つてゆくと、家の中は寂然としてゐて端の間の炬燵に、何代か昔の本屋の主人が一人であたつてゐる。

『おゝおかへんなんい。』

彼は、牧野の入つて來たのを見て聲をかけた。

『どうかしたのか、大變寂然としてゐるぢやありませんか。』

『えゝ、老婆さんが具合が惡うて……。』

『へえ、それはそれは。』

牧野は初めてそれと知つて吃驚した。今年の正月の元日に、老母が去年の暮からとかく神經痛で困つてゐるといふ報知に接したその時からよくないことを豫覺してゐたのであるが、今に今とは思ひもそめなかつた。

と、牧野は座敷に突立つたまゝ矢庭にこんなことを思つてゐると、奥からふつと兄が出て來た。

『おゝ、戻つたか。老母さんが中風に罹つてなあ。』

『何時から？』

『つひ此間、二十五日の朝早曉に便處に行つて、かへりに倒れてそのまゝ寢てをる……』

『ぢや丁度私が東京を立つといつて支度をしたその日からだな。』

『お前が東京を立つといふ葉書をおこして居つたから、もうその時分は東京には居

らんぢやらうし、何處に葉書を出してえゝか困つて居つた。』

『でも途中から葉書を出した筈だが。一昨日だつたかな。』

『うむ、それは今朝着いた。』

一昨日汽車が丁度中央東線の日野春から富士見あたりの高原を走つてゐる時分であつた。春本は東京の父母の許へ、牧野は中國の方の鄕里へあてゝ汽車の中で葉書を書いたのであつた。薄墨を流したやうな雪模樣の大空の表に聳えた八ヶ嶽や駒ヶ嶽などの眺望の異つてゐることなどをも書きしるした。

『それで病氣はどんな具合で。』

『うむ、今はまあ折り合うてゐる。まあ此方來て見い。』

兄は、家に病人が出來ると毎時そこに寢る習慣になつてゐる、もう何年となく老母の居室になつてゐる、ずつと奥の佛間に並んだ六疊に案内していつた。

『おばあさん、耕三が戻つたぞ。』

さういつて呼びかけると、東枕に仰臥してゐた老母は、

『ふむ、さうか。』

と、いつて少しく顏を傾けて牧野の方を見た。中風は左の半身が不隨で掌の屈折も自由が叶はなくなつた。それにもう七十四の老體で衰弱がひどかつた。腸胃が惡いので一層病勢を募らした。粥やおも湯のやうなものでさへ胸に溜つて、それが業をした。

牧野の父は二十年も前に亡くなつて、母との間に女を頭に五人の子供があつた。牧野はその末子であつた。その一人の姉には六七人の子があつて、もう三人も孫があつた。早く嫁いて若くて子供が出來たので總領の孫娘は祖母の手許に引取つて育てた。それが今もう三十五にもなつてゐた。その孫娘や、一人は二十九で二十年前に、一人は三十八で八年前に外國に行つてゐて頓死した兄の連れあひなどが、まるでお釋迦さまの涅槃の繪のやうに枕頭を取卷いて手足を撫でたり擦つたりしてゐる

た。

その中でも一番氣のがら〳〵した二十九で二十年前に亡くなつた二番目の兄の妻は、

『耕三は風來人だから何處へ手紙を出してえゝか分らんいふて、兄さんがそれを何度もいふて居られたぞな。』

老母に先立つて二十九で死に、三十八で死んだ兄達が老いた母親の壽命を縮めたのはいふまでもないが、でも不足をいへば限りがないが其等は皆な落着く處に落着いて、何方にしても一生の運命は定つてしまつた。たゞ一人いつまで經つても不定の形でゐるのは耕三だけであつた、今日明日といふ場合になつて老母にはそれが何よりの氣がゝりなのであつた。

東京を何時立たれて？……そして今日は何處から？』

『今朝桑名から汽車に乘りました。』

『早いもんぢやなあ。桑名といへば伊勢でせう。昔は伊勢參宮に二十日道中であつたものぢやが。』

といふやうな話が病人の耳に障らぬやうに濕めやかに交えられた。

牧野はそこへ、信濃から伊勢の方を以つて廻つた、嫂の姪で今度兄の一人息子と嫁合はす娘にやるつもりで東京から買つて來た反物などを持つて來て開いた。總領の兄には子がなくつて、それは二十九でなくなつた兄弟の一人子であつた。

『老婆さん、これを御覽なさい。』

と、いつて甥の實母は薄暗いランプの灯影に反物を以つていつて老母の見よい方に持ちかへて見せた。

『ふむ、えゝのぢやのう。えらい厚いのう。一匹かえ。』

『えゝ一匹です。』

『さうか。』

そんなことが分る處を見ると確かなやうでもあるが、とかく元氣がなかつた。時時唸るやうな太息を吐いた。またしては針で突つくやうな痛みが左の腕を襲うて來た。

四

披露といふほどのことでなくとも、親類や懇親な人々を招いて婚禮のしるしだけをしようといふ矢先にそんなことがあつたので、かねてその日に取定めてゐた二十九日にはたゞ盃事の眞似をしたばかりで、あとはほんの内輪の者ばかりで酒にした。兄を初め一同が、

『まあ〳〵老母さんが、それつきりにならぬだけでも幸福ぢやつた。』

といつてゐたが、何處となく家の中に心配が漂うてゐた。

『どうだらう？　まあどうせいけないものにしても今度は大丈夫だらうか。』

牧野は臺處で御飯を食べながら、兄夫婦に話した。

『いや、とても六ケしい。これぎりのものぢやらう。』

兄夫婦は聲を揃へてさういつた。

『此の頃は、それでもお前が金のことをいふて來んので、それだけは少しは安心してゐるらしいわい。』

兄は笑ひながさういつた。

それでも五六日立つ間に全く感覺のなかつた左の半身が少しづゝ手の伸し屈みも出來るやうになつて、脚も自分で少しは動かせるくらゐにはなつた。食べる物も少しづゝではあるが口の先に味が出て來た。

『癒りますぞ。櫻花の咲く時分には大分ようなります。元氣を出してお上んなさい。』

來つけてゐる村の醫者はさういつて保證した。村の鎭守の馬場には廣い芝生があ

つて、澤山山櫻などが植ゑてあつた。花の咲く頃になると遠くは岡山の市あたりからもぞろ〳〵見に來る者があつた。

牧野は思ひがけもない老母の病氣に一時心配したが、それでも日を追うて漸次良さゝうになつてゆくので、ついでに今少し逗留して確かな樣子を見とゞけた上で京都の方に出てゆくことにした。

その邊では春の内冷えといつて、家の中にゐると壯健な者でも炬燵が欲しいくらゐであるが外は麗かな春の日が背丈の伸びた麥畑に漲つて、揚げ雲雀の歌が、都會にゐて長寢の癖のある牧野が朝まだ寢てゐる時分から聞えた。

『叔父さん、芹を摘みに行きませう。』

朝から鐵砲を以つて鎭守の森の方を駈け廻つてゐた甥はさういつて牧野を誘うた。

廿三になるその甥は永久に兵役を免かれるために鄕里の中學校を卒業すると大阪の師範學校に一年ゐて、今では大阪で小學校の敎師をしてゐるのである。今度結婚のために二三日暇をもらつて歸つて來ようとしてゐるところへ老婆が病氣になつたので、かた〳〵急いで歸つたのであつた。

『うむ、ゆかう。』

座敷で机に凭つて、東京の方の雜誌に書いて送る物に筆を執つてゐた牧野は室の内から返事した。

『何か書いてゐられるんですか。』

『いや、構はない。行かう。』

牧野はさういつて立ち出た。

『何方いかう。』

『さあ何方でも。』

『上の方もいゝが、一つ東の方に行つて見やうぢやないか。』

『よろしからう。』

牧野の村は小高い山に周圍を取卷かれた田圃の中に在つた。その山と山との峽谷を東京までもつゞいてゐる鐵道が通つて、村はづれの鐵橋を越して次の村へと走つてゐた。花崗岩質の岩で出來たそれ等の山には青い松が繁茂してゐた。躑躅の咲く頃になると、それが松の綠に交つて田圃の上から遠眼にはまるで錦を織つたやうに美しかつた。

東南の一體を取圍んだ山を村の者は向山といつてゐた。向山の裾には三四里奥の山の中から流れて來る川があつた。それには處々に淵を湛えてゐた。

『向山の下の方にいつて見やうぢやないか。』牧野は三十年も前子供の時分そこらへよく遊びに行つた時分のことを想ひ浮べるやうにしていつた。

暖い春の日が河原や野原に充ちてゐる。彼等は眩しい日光を掌で蔽ひながら山裾に沿ふた麥畑の畔を歩いていつた。

『叔父さん菜種の花が咲いてゐます。』

甥は吃驚したやうにいつて、田圃の畔に一本、こぼれた種から咲き出てゐる菜の花を採つた。

『老婆さんのお床に立てゝあげやう。』

微温んだ小溝の緣に取つてもとつても採りきれぬほどに芹が新しい芽を出してゐた。

『叔父さん、もう好い加減にして歸りませう。』

『うむ、隨分採れたな。』

二人はまたぶらり〳〵田圃の畔を傳ふて村の方へ歸つて來た。

五

甥は何時までも學校を休んではゐられないといつて大阪に出ていつた。

牧野は老母の病氣の容態を見とゞけるためにまだ逗留してゐた。彼は逗まつてゐ

る處を急いで動かねばならぬ必要のない身であつた。大阪から京都の方にいつて、祇園で遊び暮してゐる春本からは度々そちらの方の模樣を書いて一力で三晩ゐつゞけしたといふやうなことをいつて、早く上洛するやうに促して來た。牧野はそれを見て心が騷がぬでもなかつたが、尙ほしばらくは此の靜かな田舍の春の中に寢轉んでゐたかつた。

その日は今年になつて一番暖い日であつた、奥の籠つた間に長い春の一日を寢飽きてゐる病人はすや〳〵と微睡んでゐる。

『どうです。』

といつて、牧野はまたしては座敷の机の傍から病室の方に入つていつた。

『今よう寢入つてゐるの。』

八年前に三十八で外國で亡くなつた兄の妻と、姉の總領の娘とが病人の脚を輕く撫でながらいつた。

『今日は日外は熱いくらゐでせう。』

『熱いくらゐです。老母さんも今日は炬燵を取つたな。』

『えゝ、あんまり熱いからといふて。』

『さうですか。どりやまた少し散歩でもして來やうかな。』

牧野はいつも部屋に入つて來てもすぐ出て行つた。

外は長閑な日が照つてゐる。牧野は暖かな光線に浴しながら裏庭から長屋の門を出て茶園畑に出ていつた。そこには青いいきれの立つ雜草が足を踏み込むところもないまでに繁茂つてゐる。梅の古木には花は疾に落ち盡して、そのあとに小い實がついてゐる。杏ど丁ど花盛りで白い小い花が春の光に浴しながら呼吸の詰まるやうな強い花の匂を立てゝ咲き誇つてゐる。蜜蜂が慵さうな唸聲を揚げて枝から枝に飛んでいつては花心に姿を埋めてゐる。茶園の隅の方には孟宗竹の小藪がある。それは牧野が覺えぬ時分に、亡くなつた父が二三本竹を植ゑたのが原であつた

が、後には家の背後に藪があるのは家相によくないとかいつて大分藪になりかけたのを掘り返へさしてしまつた。それが何年經つても根を殘してゐて、何時かまた笹を生やしてゐたのが、一年毎に段々太い筍を出すやうになつた。牧野はいつか五六年も郷里に行かなかつた後で歸つて見ると、そこには太い孟宗竹が繁つてゐた。自分の生れた家が遠く離れてゐる間に段々變つてゆくのが思ひ返へされたのであつた。どうせ離れてゆくのが生れた家と自分との關係である。その後大抵一年に一度は老母を歸省することにしてゐるが、それもやがてはつゞかなくなる日が來るであらう。それは今眼の前に迫つてゐる。

『もう筍が覗く時分だ。』

と、いろんなことを思ひながら藪の中を踏み探して見た。筍は遂に目付らなかつたが、茶園には三本大きな柿の樹が立つてゐる。堅い枝にも最早さき〳〵に嫩かな芽を萠してゐる。牧野はその木の枝を見上げて子供の時分熟柿を採りに攀登つたことなどを思つて見たが、もうどうしてもその時分の心には返れなかつた。

牧野は茶園を出ると、村の中を通つて田圃道に出ていつた。村の西北から西南にかけては約七十町歩ばかりの田畑が展開してゐる。柔かい麥の野は青毛氈を擴げたやうに向の方の松の生えた山の根までつゞいてゐる。彼は田圃の畦をつたひながら他の村へつゞく里道へ出た。その道についてゆくとこの村からまだ山の奥にも村があつた。そして人力車で時々その道を走つてゐるのが見られた。牧野はそれを上へ上へと歩いていつた。十町ばかり上つてゆくとそこには山櫻のある鎭守の馬場がある。毎年四月の二十日ごろからが滿開にきまつてゐるので、いつもその時分になると、そこで日露戰爭に戰死した兵士のために近村の招魂祭が行はれた。早や二十年もこの村にはゐつかない牧野は知らぬ土地にいつたものゝやうな心持ちになつて珍らしさうに其處等を見て歩いた。溪流のやうな小川に臨んだ川の岸には大きな水楊に盛に黃色い芽が吹いてゐた。

『もう櫻花の咲くのも直きだ、そのころは京都にゐるか、吉野の奥にでも籠つてゐるかな。』

そんなことを牧野は默想しながら土橋を向に渡つて、鎭守の森の山道を分けて登つていつた。やがて小高い平に出ると、そこには茅葺の亭が立つてゐて、それに腰をおろすと眼の下の櫻花の馬場から遠くの麥畑の野を越して汽車が煙を吐いて走つてゆくのが見える。牧野は何事にも無關係な伸々とした心地になつて熱いくらゐ暖かな日の照つてゐる中にもあるともなく松を鳴らして動いて來る風に面を吹かれてゐた。

するとすぐ目の先きの雜木の中に眞紅な山椿の咲いてゐるのを認めた。

『うむ、好いものがある。』さう思つて、彼は衣服を雜木の刺に引搔れながら林の中に分け入つて椿を四五本折り採つた。

そして椿の枝をこそにおいてまたやゝ暫く休息してゐたが、惱ましい暖かさに彼は輕い頭痛を覺えて來たので花の枝を携へて山を下りていつた。

田圃の畦には名の知れぬ黃や白の花をつけた雜草が茂つて、その間をひそやかな音をたてつゝ流れてゆく小溝の水に微溫むやうな日影で漂ふてゐた。彼は軟い青草を踏んで歩いた。

家に歸つて來ると、京都にゐる春本君から返信料先拂ひの電報が來てゐた。牧野は封を切つて中を披いて見ると、その電報は昨夜打つたものであつた。停車場のある町から此の村までは特別に電報を配達しないで、一日一回配達する普通の郵便と一緒に持つて來るのである。

先達てから春本は毎日のやうに牧野に入洛を催促して來た。

『もう圓山公園の夜櫻には毎夜人か出盛つて、二三日すると散りそめます。一日も早く御入洛を待つてゐます。』

と、いふやうなことを書いて、舞妓や藝妓と寄せ書きの繪葉書を頻りによこしてゐ

た。

『イツクルカオトヒコ。』

といふ電報の文句を見ながら牧野は突立つたまゝ考へてゐた。一體田舍の郵便局は何のために返信用紙まで添へて御鄭寧に黴の生えた昨日の電報を今日午後になつて配達して來たのだらう。この邊は電報の配達區域になつてゐないので、其の所在地からまた此處までの配達料の先拂ひをしないと卽時に配達しないことになつてゐるのである。東京の春本君がそれを知らう筈はないのである。牧野さへそれを知らなかつたのだ。それにしても發信人が返信料を拂つて置いたからとは云ひながら、昨夜受信して今日午後に配達する電報に返信用紙を添へて以つて來たのがあんまり馬鹿々々しくて何とかいつて罵つてやりたかつた。けれども罵しるわけには行かなかつた。

『東京と違ひ京都からならば五時間か六時間で來られる。また見舞ひに歸るとしても七日にはとにかく京都まで出て行きまする。友達も待ちかねてゐることだから。』と、この間からいつてゐた。

その七日は明日だ。

『一日早くして、いつそ今日四時の汽車で立たう。』

牧野はさう思つて、電報をそこに置いて靜と老母の病室に入つていつた。病人は籠つた室の中に井水に冷した手拭で額を被ふたまゝすや〳〵と假睡んでゐる樣子である。二人の看病人は怠屈さうにそれでも休まず脚を撫でゝゐた。牧野はそれを見ると心が滅入つて、これからすぐにも立つて出やうとする決心が鈍つて弱く後髮を引かれるやうな心地になつたが、暖かい春の日と友達からの電報とは彼の心を騷がして止まなかつた。

『老母さんもとにくか折り合うてゐるやうですから、折角友達が電報まで打つて待ちかねてゐるのですから、また直きに見にかへる分とも一度京都まで出てゆきませ

う。』

牧野は座敷の方へ出て來て、そこにゐた嫂にいつた。

『今日？』

『えゝ今日。』

『そりや急なことですなあ。汽車が間に合ふでせうか。』

『えゝ間に合ふでせう。四時二十何分とかいふのに、まだ二時を過ぎたばかりですから。』

『さうですなあ。まだ四時のが一つありますから間には合ふなあ。』と、ちよつと嫂は時計を見上げたが、

『今からお出でんさつたら、あちらへお着きなさるのは夜大分遲うなりませう。』

『えゝ隨分遲くなりますが十一時ごろには着きませう。』

『ぢや一寸兄さんを呼んで來ませう。何處か知ら。』と、いひつゝ嫂はそこらに出ていつた。

牧野は手早く鞄を整理して、書きかけた原稿などを仕舞ひ込み、着物を着更えてゐる處へ兄は外から戻つて來た。

『今日行く？』

『今日行かうと思つて。』

牧野は京都の春本から來た電報などを見せた。

『これに困るんぢや。田舍は不便で。』兄はさういつてゐたが、

『老母さんはどうしてゐるか知らん。』

といつて、靜と病室に入つていつた。

『うむ、起きとるのか。』兄は、さういつて老母の顏の上に覗込みながら、額に被せた濡れ手拭を裏返して、

『老母さん、耕三は京都に居る方がいろ〳〵仕事や何かの都合がえゝから、今日京

都まで出て行かうといふとるが、行ても構はんかの。東京とちがうて京都は四時間か五時間あつたら直ぐ歸つて來られるから、また近い内に戻るさうなから。』

病人に氣を落させまいとするやうに、さういつた。

『はあ、……ゆかうと思ふならゆきなさい。どうで家の者ぢやない。外に出て行く人ぢやから。』

老母は靜と眼を閉ぢたまゝ怠儀さうに力のない聲でいつた。

『そんなら行ても構はんかの。』兄は耳の處に口を添へるやうにしてまた根押しをした。

『はあゝ、行きなさい。』きつぱり氣の無さゝうな聲でいつた。

それから兄は、京都の友達から打つた電報の延着したことや、今日になつて返信料を添へて來たつて何の役に立つかといふやうなことを可笑さうにいつて老母に話して聞かせると、病人も微笑を洩らして、

不便なことぢやのう。』といつた。

六

俥に乘る時には、いつも三十町離れてゐる停車場まで迎ひにゆくのだが、兄が外から歸る時向の里道を山奥の村までいつた戻り俥が通つてゐたのを呼び掛けて連れて來た。

牧野は角形の大きな鞄と信玄袋とを蹴込に乘せて窮屈さうに兩足をその上から跨ぎながら俥に腰を下した。

『花の咲く時分さうして京都から大和の方を遊び歩かれるのがけなりい。』

廿九年で二十年前に亡くなつた兄の妻は、さういつた。

『それでは御大事に。』

『左樣なら。』

口々に送られて、牧野はやがて村はづれの板橋を渡り次の村へとつゞく麥畑の中の街道を停車場の方へ急がした。

平常繁華な大都會の中に生活してゐるので、傍に眼や心を奪はれてつひ氣付かずにゐる自分の存在の孤獨といふやうなことが、遠く東京を離れた故郷の里道をただ一人緩い俥に搖られてゆく牧野の胸に痛いほど鮮かに思ひ浮べられた。麥畑の畦や野川の塘には黄色い蒲公英の花が一面に咲き亂れてゐた。向の方の麥畑の小高くなつていつた山の裾に此方を向いて一ぱいに春の日を浴びながら立つてゐる小村には牧野の小學校時分の友達の家もあつた。醬油を釀造してゐるので眞黑になつた瓦屋根が際立つて目についた。こんな片山里に平和な生涯を無難に送つてゐるのが寂しくはないだらうか、それで寂しさを感じなければそれに越す幸福はあるまい。牧野は何處にいつたら安らかな心の落ち着き場があるか、それを求め煩ふかのやうに、何といつても明かに口にいひ表はすことの出來ない、それで居て殆んど聲を揚げて泣きもしたいやうな憂愁に胸を鎖されながら俥の上から、狹く眼界を劃られた周圍の山や田圃や人家などを四顧してゐた。二三日俄に春暖を催してゐた所爲か牧野の村の方の山にはいつしか薄墨を流したやうな雲をつけて、明日は雨にもなりさうな空模樣である。牧野はその憂鬱な雲を見ると病人のことがまた氣にかゝりだして、いつまでもその方を眺めてゐた。

それでも汽車に乘つてしまふとそこに乘つてゐる互に見知らぬ人々の、極めて一時的な同化作用によつて出來てゐる車室の心持ちに馴染んで、今まで一人で田圃道を俥に搖られて來たとはすつかり違つた長閑な旅人らしい心持ちに變つていつた。そして車窓から靜に暮れてゆく春の野を見ながら、自宅から持つて來た小い瓢簞を取出して姫路で買つた辨當の菜を肴に少しづゝ冷酒を獨酌してゐた。

遠く海の方に展開してゐる平な麥の野には一面暮靄が立罩て、向の方につゞいてゐる人家から立つ夕炊の煙が迷つたやうにその中へ融けてゐる。

牧野はやゝ火照つて來た頰を軟かい風に吹かれてゐた。

京都に着いたのは十一時を過ぎてゐた。停車場から俥を走らせて去年の春の末にも暫く泊つたことのある鴨川べりの祇園は繩手のとある宿に向つた。かねて手紙でいつてやつておいたので、俥を下りて狹い入口を入つて聲をかけると、若い美しい祇園育ちの藝妓あがりの妻君は、すぐ出て來て、

『えらう待つてゐました。』

と、笑ひかゝりながら二階に案内して

『春本さんといふお方から、あんたはんがまだ來やはりやしまへんかいふて、もう度々お使ひがまゐりました。……もうどないしといやすのやろ思うて、うちでもえらう待つてました。』

言葉の仕舞の方を、この主婦のいつもする甘えて拗ねるやうな口調でいつた。牧野には、その主婦が此の家の子息の主婦さんに棲み込むまで、その手で祇園で多くのお客に接してゐた時分のことが眼に見えるやうに思はれた。

『あゝ、さうですか。』

牧野は一寸そこに座つて茶を啜りながら、さういつてゐたが、電話で聞かすと春本君は昨夕大阪から來た友達と一緒に出ていつたきりまだ歸つて來ぬといふ。それでも牧野はやつと久し振りに京都に來たので、何だかそのまゝ寢てしまふのは惜しいやうな氣がするので、遲いのも厭はず外に出て見たかつた。

春本君は木屋町三條上つた處に陣取つてゐるのである。

『とにかく春本のところまで一寸行つて來ます。』

『ほんならまあ一遍いといでやす。うちなんぼ遲なつてもかましまへんよつて、ゆつくりといでやす。』

若い美しい主婦はさういつて入口まで送り出した。

それでも繩手の夜はもう更けて人の往來も稀れである。牧野はわけもなく艶かし

いやうな心地になりながら歩いていつた。

三條の橋を向へわたつてゆくと水の音と一緒に河原から吹いて來る柔かい春の夜風が撫でるやうに顔に觸れた。古風な欄干のある橋の上を化性のものゝやうな若い丸髷の女が夜更をいとはず、すれちがひに通つていつた。

春本君はゐなかつた。丸髷に結つた若い仲居が出て來て、

『春本さん、今日あんたはんからおこしやした電報をお見やして七時時分やつたか八時ごろまでやつたか長いこと待つといやしたんどつせ。それでもおこしになりまへんもんやさかい、今日はもう來やはりやしまへんのやろちはゝつて、大阪から來やはつた朝臣さんいはゝりましたか、そのお方と一緒に何處か出て行かはりました。ほんで、あんたはんが來やはりましたら、どうぞそないいふて、待つて居りましたと、よろしいいふといてくれるやうにいふて行かはりました。ほんで明日の朝は歸へるさかいいふてはりました。明日はおかへりになりますやろ。』

仲居は柔かにいつて、微笑んだ。

『あゝさうですか。ぢやまた來ます。どうぞ私が來たといつておいて下さい。』

牧野はさういひおいて出てかへつた。

宿に戻つて來ると、若いおかみは腰輕にすぐ立つて來て、

『ほ、もうおかへり、えらい早うおしたなあ。春木さん留守どしたか。どこぞ遊びにいかはつたんどつしやろ。……ほんであんたはん御飯どうどす。』

と、いひながら二階について來た。

牧野は床をこしらへてもらつて、寢床に入りながらわびしく眠についた。

翌朝眼を覺すと、昨夜あれから降り出したものと思はれて、外はしと〳〵春雨になつてゐるらしい。牧野はその雨の音を聞きながら、また蒲團を引被いで好い心地になつてまた暫く寢なほした。

するとおかみさんの聲がして牧野を呼び覺ました。

『牧野さん、春本さんが來やはりました。』

『あゝさうですか。ぢや起きませう。』

と、いつてゐるところへもう春本は大阪の朝臣さんと二人でぞろ〳〵上つて來た。

『やあ。』

『やあ暫らく。』

昨日は牧野が汽車の中から打つた電報を見て、春本君と朝臣君とは牧野が來るのを待ち兼ねてゐた。そして牧野が來たら三人で島原へ行かうといつてゐたのに、牧野が七條に着く時間を考へちがへして豫定よりも早く着くやうに書いたのでそれで無駄に待つてゐたのであつた。

『そして今朝島原からですか。』

『えゝ角屋からすぐ此處に來たのです。』

『そりや惜しかつたなあ。春雨に島原はさぞよかつたでせう。』

『昨宵餘程あなたを待つてゐたのです。朝臣君が是非牧野君と一緒に行かうつて。』

『ぢや、今日は春雨を聽きながらゆつくり遊びませう。』

けれども朝臣君は今日は新聞が急がしい、正午までには歸らねばならぬといつて、酒盃を二三杯乾してからかへつていつた。

『これから木屋町にゆかうぢやありませんか、木屋町はようがすよ。』

春本は牧野を誘ふて二人は一緒にその方に出ていつた。

春本の宿の離室から障子を明けると、そこはすぐ鴨川に臨んでゐて、河岸に並んだ柳がぼんやりと煙つた春雨の中に顏料を溶したやうな綠に潤るんでゐる。黑く濡れた街の屋根の彼方には東山の方に知恩院の大きな屋根や八坂の塔が淡く春雨に鎖されてゐる。

『舞妓を招んでもいゝのだが、そいつは夜にして、これから飯を食つてゆつくり遊

んでゐる間に夜になるから、そしたら都踊を見にゆきませう。』

『いゝなあ、京都の春はいゝなあ。』

牧野君はさつきから何遍も同じことを繰返して、いつまでも春雨に濡れてゆく鴨川の流れを眺めつゞけてゐるのである。

そこへ食べる物が運ばれた。鰉の燒いたのや烏賊の細づくりや高野豆腐や黃色い湯葉の甘く煮たのや鮒の子膾だのを賞味しながら飲けぬ口の牧野も春本と一緒に舌ざはりの好いのでつひ過ぎるまで酒盃の數を重ねてゐた。

そこへ電話をかけて呼んだお茶屋の主婦もやつて來た。おかみは此の間から春本が剛染になつてゐるお茶屋のあるじなのである。

『お風呂が出來ましたよつて、ちよつとお入りやしたらどうどす。』

仲居は風呂を案内して來た。

『それは結構。』風呂好きの牧野は、春本とおかみとを殘して一人で長い廊下を湯殿の方に歩いていつた。

春本は酒がまはれば廻るほどいゝ氣嫌になつて日の暮れるまで酒盃を手に放さなかつた。

『あ、ほんに天氣になりまつせ。』

おかみはちよつと障子を明けて見ながらいつた。いつの間にか春雨は止んで、濕つぽい雨雲の切れ目から夕暮の空の處どころに青い色が冷さうに覗いてゐる。牧野は酒のあとの湯上りの肌を浴衣のうへに褞袍にくるまりながら明け放した障子の間から川の方を眺めた。なるほど春雨はやんで街には洗つたやうな美しい燈火が瞬きはじめた。遠くの東山の方に點る燈火まで數へられるやうに澄んで見える。

春本はおかみを對手に今宵の出番の藝妓や舞妓の噂などを肴にいつまでも盃酒を手にしてゐた。

まだ降り足らぬと思はれて雨氣を含んだ濕つぽい夜風の中を、やがて三人は散歩

かたぐ〜三條の橋を渡つて繩手のとほりを花見小路の方に歩いて行つた。

踊が果てゝから三人はまた木屋町にかへつた。そして點茶に出番の藝妓を出の衣裝のまゝ座敷に招んで、それに可愛盛りの舞妓を二三人加へて春の夜を更かした。

七

翌朝遲く目覺めてから朝飯を食べながら二人は昨夜おどりで買つて來た繪はがきを東京の方へ書いたりした。牧野はそんなにしてゐてもどうしても春木のやうに心が暢閑としてゐられなかつた。

『とにかく僕は一寸宿へかへつてまた晩に來ませう。』

さういつて彼は出て戻つた。何時郷里の方から電報がかゝつて來るかも知れなかつた。牧野はその電報を待つてゐるやうな心地に襲はれてゐた。

それから二三日過ぎて濕つぽい雨天がちな天が晴るとまた暖かすぎるやうな日が來た。その日は牧野は書いた物のことで手紙で二三度知り合ひになつてゐる人間が訪ねて來て、それに誘ひ出されて三條の先の方の料理屋にいつた。そこで夕飯を濟ましてから牧野は京都の雜誌屋の並んでゐる街などを連れて歩かれながら、ぶらぶらまた四條の通りへ出て橋を渡つて祇園の方に戻つて來た。久し振りの天氣で通街は圓山公園や都踊へゆく客で通りきれぬほどの人出である。

牧野は繩手の曲り角の處で別れを告げて宿にかへつて來た。すると恐れるやうな心持で待つてゐたとほり郷里からハ、ワルイスグカヘレといふ電報が來てゐた。

『どうせもう良けないのです。この電報ぢやもう死んでゐるかも知れない。』

それから間に合ふ汽車は十一時の他になかつた。それに乘ると明日の早曉に向の停車場に着くことになる。電話をかけると春本はすぐやつて來た。

『折角一緒にかうして來てゐるのを生憎ですなあ。』

『どうも致し方ありません。どうせ死ぬでせうから、そしたらぜひ一緒に高野へ登

りませう。母の菩提を弔ふために必ず登りますよ。もう春はかれこれしてゐる間に去つてしまふから。』

牧野は鞄をとゝのへて着物を着更へながら春本とそんなことを話してゐた。

『あなたに行かれたら、私もまた急に寂しくなります。』流石に暢閑な春本も沈んでゐる。

『君には氣の毒ですよ。私のために興を殺がして。』

『いえ、そんなことはありませんが、どうぞまた早く出ておいでなさい、待つてゐます。』

『えゝ、もうどうせ死んでゐるか、死ぬるかでせうから死んでゐたら却つて早く出て來られますよ。でも二七日ぐらゐは死んだ者の爲に家にゐてやらなければなりますまい。私もそれがもう一人殘つてゐた親ですから。』

やがて俥が來たので牧野は立つていつた。

汽車の中は大阪から花見に來た連中で賑かであつた。牧野はその客の間を分けて一人寂しく腰を掛けてゐた。大阪で其等が降りてしまふと、今度は西の方へゆく他の客が入つて來た。そしてすぐ空氣枕などを取出して寢仕度をしはじめてゐた。牧野は、定命過ぎた老人のことゝはいひながら、母の危篤といへば流石に神經が興奮してゐる所爲かどうかして眠らうとしてもどうしても眠ることが出來なかつた。

透して見るといつかまた雨模樣になつた空からは硝子窓に斜に雨滴がかゝつて來た。寢ぼけたやうな燈火ばかり寂しく點つてゐる停車場をいくつも素通して行つた。やがて微白くなつてゆく野の中には桃畑が夢のやうに白く見えてゐた。（をはり）

流

れ

『旦那さん、大阪から田川さんといふ方から電話がかゝつてゐます。』

本店の子守りが枕頭に來て息をはずませながらいつたので眞島は目を覺ました。

大阪かう電話。田川といふ名前の電話。といふ報知を聽いて毎朝不快な氣持ちで眼を覺ます習癖になつてゐる眞島は今朝は譬へやうのない嬉しい心持ちで目を覺したのである。

『あゝ、さう!!』

といひながら急いで跳起きて、帶を締めるのももどかしさうに本店へ驅け出した。

眞島の泊つてゐるのは別莊になつてゐて、本店は二丁ばかりも離れた家込みの方にあつた。其處の宿では電話は本店の方に一つ設置してあるばかりであるから遠距離から電話が掛つて來る時には本店から別莊まで知らして來て、それからまた驅け出して行くのだから、まご〳〵する間に一通話の時間は空しく經過して了ふのであつた。

彼れは急々として電話室に籠つた。

『あゝ、もし〳〵私、眞島。』

『もし〳〵あなた眞島さんですか、私、大阪ですが、只今千代奴さんが出られますから。』いつもの虎どんの聲である。

『もし〳〵、もし〳〵、あなた眞島さん、私、田川。』お夏の少し嗄れた緩い口調である。千代奴の本名はお夏といつてゐた。眞島は殊更にその本名を呼んでゐた。

眞島は、この地に來てからその聲をせめて電話で聽くのを樂しみにしてゐるのであつた。

『……先日はお手紙をありがとう。お金も確かに受取りました。私、今日行きませうか。あなたの御都合は何う？』

『來たら好いさ。私の方では何時だつて差支へないのだが、お前の方であんまり遲くなつては寒くなつてつまらないから、同じ來るなら早い方が好いと思つたからあいつてやつたのだ。』

『でも今日行つたら、二十八日の朝は早く歸らなきやならなくつてよ。お約束があるから。』

『そんなら二十七日の晩に歸つたつていゝぢやないか。今晩と明日と二た晩泊つて。』

『それでもあなた好くつて？』

『仕樣がないぢやないか。』

『ぢや、今日行きます。……のりまきを買つて行きませうか。』

『何を？』眞島にはよく聽き取れなかつた。

『のりまきを買つて行きませうか、といふんですよ。』少し大きな聲を出した。

『あゝ、買つておいで。』

『あなた、隨分つんぼねえ。……ぢや行きますから、待つてゝ頂戴！』

それで電話は切れた。

眞島は、この秋季から東京のさる新聞に小說を書かねばならぬことになつてゐた。長い間文學などに携はつてゐても之れまで捗々しい創作をしてゐないので、今度その話しが定ると彼れはその好機を逸しないで熱心に筆を執つて見たかつた。

その事を氣にしながらも、九月の初旬にこの有馬に來ると直ぐお夏に手紙を出して、少しも早く遊びに來るやうに勸めてやつた。

『夏季は身體が弱るから何處かへ連れて行つて頂戴！　私半分持つから……』

と、七月頃からさういつてゐたのであるが、全抱えの自由の利かぬ身體である上に、

眞島の方でも何時も餘裕のない生活をしてゐた。眞島はあくせく思ひながら暑い二た月の間はとう〳〵何處へも行かずに箕面の谿の中でつまらなく夏を過して了つた。九月になると東京の方の仕事の期日が段々切迫して來たので逃げるやうにして有馬に來た。夏の客の退散した後の有馬は閑靜で、始終あわたゞしい氣分でゐる眞島も流石に其處では氣が落着けさうでもあるし、九月になつたら多少東京の方から入る當ての金もあるので、お夏にさう言つてやつたのであつた。

眞島が東京の生活に飽いて、京阪に放浪の旅に出掛けてからもう一年の餘になる。相當な年配になつてゐても妻子があるのでもなく、また日々出勤せねばならぬ定職を持つてゐるのでもない彼れは何處にゐても差支へないのであるが、京阪にも大分見飽いてゐた。その見飽いた京阪にまだ滯在してゐるのは、去年の秋の末頃からつひ馴染みになつたお夏を忘れかねてゐるからであつた。

そのお夏とも八月の末に逢つたつきり丁度一と月逢はないのである。

で、電話が掛つてから、眞島は靜としてゐられないほど嬉しくつてそは〳〵してゐた。

何時の汽車で來るだらう？　これまで手紙でも、來る時には遲くつて十二時四十分の大阪發でなければ、その次の三時五分になると此方の停車場に來て四時五十四分だから、其處から三里の緩い勾配の道路を車にゆられて上つて來るのでは有馬に着く時分にはもう暗くなつてしまふ。自働車で來れば車で三時間近くもかゝる處を唯三十分で來られる。けれども自働車は初めて乘る女にはもし眩暈でもするやうなことがあつてはいけない。でも乘つても大丈夫のやうであつたら自働車の方が早くつていゝ。

かういふことを細かに嚙んでくゝめるやうに書いてやつてゐるのであつた。先刻も電話でまたその事を繰返して置いた。あの時が九時であつたら、多分十二時四十分の間に合だらう。今が一時だからもう汽車に乘つてゐる時分だ。二時五十三分に

三田の停車場に着いて、それから自働車でかつきり三十分かゝるとして、三時半には此方に着く。さうすると、もう一時間と三十分經てば顏が見られる。さう思ふと眞島は耐へ性もなく手繰り寄せたいやうに待ち遠しくなつた。それまでの時間を斯うしてその事ばかりに思ひ覺めてゐるのでは苦しくつて耐らない。どうかして知らぬ間に時間の經つ方法はないかと思つた。さう思うて机の周圍を見廻したが皆な既う讀み古した物ばかりで、待ち焦れてゐる耐へられない心を他へ散らすやうな新らしい讀み物はなかつた。すると、眞島はふと此の間隣の部室に一二晩泊つて行つた容が置いて行つた、この月の「太陽」を老婢が形付けをする時、讀書の好きな孫に貰つて行つて見せるのだと言つて持つて行つたことを思ひ出した。眞島は年中怠屈な日を月の初旬ばかりは、新刊の雜誌を讀んでまぎらす習慣になつてゐるのだが、都會を離れた田舍に來てゐてまだその月の新らしい雜誌など少しも眼に觸れないでゐた。それで、わざ〳〵その「太陽」を借りて來させた。新らしい讀み物は眞島の心を吸ひ着るやうに奪ひ寄せた。暫らくさうして他の事を忘れてゐる間に時間は經つた。時計を見ると既に三時を過ぎてゐる。自働車に乘つてゐればもう間もなく着く頃である。

眞島は三時間の長い間を知らぬ間に過すことの出來たのに快い滿足を感じて、樂しみに胸をそゝられながら自働車の停留する溫泉町の入口の方に出て行つた。

山地の秋はもう更けて眼に入る物の色にも、肌に觸る空氣の感じにも眞島が此處に來た當座の、漸う夏季を過ぎたばかりの初秋に見るやうな淸新な氣分にはなり得られなかつた。彼れはも少し早くその美しい初秋の山にお夏と時を過すことの出來なかつたのを殘念に思つた。で何となく物足りない淡い寂しい心持ちを感じながら、長く延びた街道に添うて自働車の來る方に歩いて行つた。

平坦な一筋道を自働車は砂塵を卷きあげて遠くから疾走して來た。「あゝ來た來た」と思ひながら近寄つて來る車上の乘客を、眞島は眼を皿のやうにして見張つ

たが、待つ人の姿はなかつた。かねて二臺で往復してゐると聞いてゐたので、彼れは失望を感じながら、停留場の方に後を追うて戻つて、運轉手に

『後からもう一臺來るの？』と聞いて見た。

『も一つの方は壞れた處があるので休んでゐます。』

眞島は耐らなくなつた。ぢや車で來るのかも知れぬ。併し車で來るとすればまだ二時間を空しく待たねばならぬ。彼れはまたその間の時間を經過さすのをもどかしがつた。さうして理由もなく其處らを彷徨して無駄に時を立てやうと焦つた。

さうしてまた斯う思つた。十二時四十分の汽車に乘つて停車場から車で來るとすれば、三時五分のに乘つて自働車で來るのと此方に着く時間はさう違はない。今の、この焦れつたさを一度辛抱すれば、二時五十三分に車の二時間半を加へた五時二十三分と、四時五十四分に三十分を加へた五時二十四分と殆ど同じになる。すればその時刻が來れば、十二時四十分に大阪を乘つて、此方を車で來るのと、三時五分に大阪を乘つて此方を自働車で來るのと二重の期待がある。斯んなことまで想像したりして時間の立つのを忘れやうとした。でもさうかうする内にやがてその時間に近くなつた。眞島は、三田驛に通ふ街道を一里ばかり下の村まで歩いて行つた。さうしてお夏の姿を車の上に想像に描きながら、小山の鼻の曲り角になつてゐる處で認めやうとした。

けれども寂れた街道には車一臺も來なかつた。彼れはたゞうら悲しい心持ちになつて空しく引返へして來た。もう日が暮れはて〻山の上の溫泉町の家々には燈火が瞬き始めた。

今日晩には一處に夕飯が食べられると思つてゐたのに、遲い汽車で來てあと車で來るとして見てももう今まで來ないのでは今日はいよ〳〵來ないのだ。さう定つてしまふと眞島は耐へられない失望の感じに喪然として、旅館に戻ると廊下にゐた女中に

『夕飯の支度が出來てゐるなら、持つて來ておくれ』と、命じた。

さうして何か溜つてゐる胸に飯を自暴に詰め込んだ。氣がむら〳〵して來た。何か當りつける處があるなら當りつけるのだが、その當りつける處のないのが彼れには言ひやうのない空虛の感じを與へた。

さうしてやつと箸を置いた處へ次の間にこそ〳〵と人の氣配がして、やがて靜かに襖を明けて、今日は本店の方の番になつてゐる女中のお竹が忝しく小包みを高く持つて先きに立ちながら、

『此方でございます。』と、誰れかを案内するやうな口をきいた。さうして眞島の方に向つて『お出でになりました。』と、お愛相笑ひをしながら言つた。

お竹の背後に姿を忍ばすもゝのやうに人影が動いて、

『ほゝ』と笑つた。

お竹も愼しげに笑つた。眞島はそれと氣が付くとわざと澄した顏をしてゐた。焦れ焦れする心持ちを澄した顏に押包むのが彼れにはその時精一杯であつた。それでも嬉しくつて耐らないので、

『來たの？　今御飯を食べてゝ　よつた處だ。あんまり遲いからもう來ないかと思つてゐた。』

その間に、女は座敷に入つて火鉢の向側に坐つた。

『どうして其樣なに遲くなつたの。だから彼樣なによく言つて置いたぢやないか。自働車に何故乘つて來なかつたの。俥で來たからそんなに遲くなつたのだ……』眞島は疊み掛けて叱り始めた。

お夏は女衆の手前を極りわるさうに、

『まあ、さんなに來い早々怒るものぢやないわ。』笑ふ口元を氣にして小さくつぼめながら眞島を制した。

お竹は笑ひながら手荷物を其處に置き、火鉢の火を直して退りながら、襖の處に

行つて畏まつた

『お夕飯は、どういたしませう？』

『……さあ、私は濟んだが、何が好いかな……鷄がよからう、鷄にして下さい。』

眞島は、それを命じて置いて、また女の來やうの遲いのを責めた。

『まあ、來い早々其樣なことをいふのはお止しなさい。……おゝ寒かつた。あゝ好い物がある。それを下さい。お腹がすいた。』

男の背後にはバナ、が散らかつてゐた。男は默つてそれを取上げて皮を剝いて女の口元に差出してやつた。

『寒いわけさ。お腹もすくさ。だから早く來るやうに電話でもさう言つたぢやないか。』

女は男の手に持つたバナ、を一と口食つて、

『あれから電話を掛けてからお湯に行つて頭髮を洗つて、結つたりしてゐる内に十二時四十分の間に合なくなつたの。』

『ぢや此方の停車場から自働車で來ればよかつた。私は如何なに心配したかしれやしない。俥ぢや此樣なに遲くなるからお前が心細いだらうと思つて……寒かつたらう。』

『えゝ、寒かつたは。おゝ寒い。』

『寒いさ！……これからお湯に行かう。いゝお湯だよ。』

眞島は、有馬に來た初めから少しも早く女を呼んで、好い温泉に入れて喜ぶ女を見たかつたのである。彼れは肉欲の爲め、戀愛の爲め女を愛するといふよりも、唯女が可憐で堪らないのである。彼れは、此の可憐なる者を強ひて求め得て、その力によつて自分の生活に飽いた心を引立てやうとさへ思つてゐるのである。

さう言つて温泉に行くことを急いだ。

『まあお待ちなさい。もう幾許遲くなつたつて構はない。煙草を一つ吸つてから。』

眞島は待遠しさうに女の容貌風采を見守りながら、

『お前どうして彼方の袷の方の羽織を着て來なかつたの。その單衣羽織はもう汚れてゐるぢやないかもう有馬ぢや袷衣を着てゐるよ。』

『さうあなたのやうに言つたつて、大阪ぢやまだ來月にならにや袷を着やしない。それに自家ぢや離れた處の土藏に仕舞つてあるから、一寸出して貰ふ譯に行きやしない。』

眞島は、女が着て來た衣服のことまで氣にしてゐた。それは彼れが女を愛するの餘りで恰ど母親か娘の着物のことに世話を燒くのと同じ心であつた。

『兎に角湯に行つて溫まらう。』　またしても湯を急いで立つた。

有馬では、他の多くの溫泉場と違つて、どんな大きな旅館でも內湯といふものがなかつた。共有の入れ込みの溫泉があるばかりであるが、その代りに別に高等溫泉といふものが設けてあつて、それは一人に就いて貳拾錢拂へば浴室を一つ獨占することが出來る。二人ならば參拾錢。三人ならば四拾錢といふやうな規定になつてゐる。

眞島は、この買切りの溫泉に入りたいばかりに女を呼んだと言つてもいゝくらゐに二人で溫泉に入ることを樂しみにしてゐるのである。

二人は、石段ばかりで出來てゐる細い路地のやうな道を足で探りながら降りて行つた。眞島は先きに立つて、

『氣を付けないと危ないよ。……手をお出し。』

手を取つて降りて行つた。

『遂々奧さんを連れて來たよ。』

眞島は湯番をしてゐる顏馴染のおかみさんに笑談を言つた。眞島が屢々一人で高等溫泉に來るので平常、

『あなた、奧さんと二人でないとつまりませんわ。』と、おかみさんは言つてゐた。

眞島も彼方の入込みの温泉と違つて、何時も浴槽の縁を波々と流れ落ちてゐる湯の中に一人きりの體を氣樂に浸しながら、一人で入つてゐるのを勿體ないやうにまた物足らなくも思ふのであつた、

おかみさんはそれを見て、上り湯に新らしく炭をついでくれたり、其處らを雑巾で拭いたりして、

『ごゆつくり。』といつて扉を閉めて出て行つた。

眞島は、急いで着物を脱いで湯殿に下りるが早いか浴槽の中にづぶ〳〵と身を沈めた。

『おゝ好い湯だ!!　早くお入り!』

女も湯殿に下りて來た。

『眞個だ。あゝ好いわねえ!!』お夏は顔中に笑ひを表はした。

『好いだらう。だからあんなに遠からお出で〳〵と言つてゐたんぢやないか。お前と斯うして一緒に入りたかつたんだよ。……途中で寒かつたらう、もつと〳〵すつと頸まで沈めてよく暖まらないといけない。』

眞島は、兩手で女の肩先を抑へて湯の中に深く沈めた。

『誰れも來やしなくつて?』

『誰れも來やしないよ。買ひ切りになつてゐるんだもの。錠を下さうと思へば下されるやうになつてゐるんだ。……』

『よく暖まつて行きませうね。』

『あゝ、長く入つて行かう。もう落着いたものだ。眞個に今日は待ち疲れたよ。』

眞島は、長い間の待ち遠しさやら寂しさやらを、この一時に取返したやうに體中が生活の歡びに充滿たやうに感じた。

『今夜こそお互に按摩のもみつこをしませうねえ。』

『あゝ。それよりお前を流してやらう。』

『あゝ、流して頂戴。わたしもあなたを流して上げるわ。……今晩此處で長く遊んで行きませう。』

『温泉だから何度も上つては入ると好いんだよ。』

湯に暖められた女の白い肌が薄く紅を潮して來た。多い頭髪が黑く濡れて襟脚から肩の上に恰ど烏蛇を見たやうに幾筋となく這ひ亂れた。

『さあ、それに腰をおかけ。流すから、』

眞島は女の背後に廻つて、石鹼を手に塗り取つて、それをぬるゝと女の肌に一面に塗つた。さうして手拭を絞つて擦つた。頭髪を搔き上げて首筋から乳の邊まで念を入れて磨いた。手拭を疊んで肩に戴せて、三助がするやうに叩いて、その後へあたゝかい湯をどつさり流し掛けた。

『おゝ、好い心持ちだ。どうも難有う。さあ、こんだァあなたのを流して上げませう。』

『あゝ、まあ一遍入つて温まつてから。』

男は湯に漬りながら仰向きに脚を伸して浴槽の縁に頭を戴せた。さうして心地よさゝうに女のすることを見てゐる。

女は、小さく疊んだ手拭に白い泡が垂れるほど石鹼を塗つて、一心不亂に顏から襟頸のあたりを磨いてゐる。

『お前は湯が長いんだつたねえ。』

『えゝ、毎時も二時間かゝるの。お湯屋で屢く千代奴さんお辨當持つて來ませうかといふわ。』

『今晩こそいくら長く入つてゐても構はない。』

女は自分で暫らく氣の濟むやうに磨き終ると

『さあ、一つ入つて……』といひながら湯に漬つた。

磨き立てた顏が湯氣の中に電燈の光を浴びて艶々と薄紅に輝いてゐる。眞島には

この女の露邪氣な心のないのが何よりも氣に入つてゐるのである。女は惡毒氣なさうな口を緩く開いて、深く湯の中に沈みながら、手拭で湯をしやくつては顏に流しかけてゐる。さも〳〵活き効のある、名狀し難い刹那の快感に五體を委ねてゐるものゝやうである。

『寒かつたのが暖まつたらう。』

『暖まつてよ。ほんとに好いわねえ！』

男も流して貰つて、二人はゆつくり温泉から出て戻つた。九月の末の温泉町の夜は寂し過るほど靜かである。其處らに立ち並んだ湯宿の大きな別莊にもうあまり浴客はないと思はれて、靜寂とした二階三階の部屋々々には電燈の光が空しく冴えて見えるばかりである。男女はその寂しい夜を却つて自分達獨りの世界のやうに思ひ做しながら險しい石段の道を、また手を引いて探り〳〵歩いた。

歸つて來ると、もう鳥を煮る支度がちやんと出來てゐて、炭火が靑い火焰をあげてぽつぽつと熾つてゐる。松茸の新鮮な香氣がそこゝとなく部屋の中に漾うてゐる。

眞島は、女から濡れ手拭を受取つて、自分のと一緒に例の處に始末して置いて、火鉢の傍に寬座ぎながら

『どうだ？　酒をいはうか。』二人とも酒はあまり飲けないのである。

『えゝ、いつても可いわねえ。だけど一寸手を拍くのを持つて頂戴。私、一寸顏を粧るから。』

女は、先刻湯に立つて行く時は、男から鏡臺も此處にあるよ。と敎へられた、その鏡臺を遣ひ棚から取り下して何よりも先きに顏の粉飾にかゝつた。羽二重の小さい化粧袋を取り出して、鏡の表を睨むやうな眼付をしながら手早く眉黛を刷いて、淡く白粉を彩つた。

『さあ、もうこれで好いの。』

道具を形付けて火鉢の向側に寄つて

『わたい煮るわ。』といつて鳥を煮かゝつたが、『あゝ、忘れてゐた。海苔巻きを持つて來たのを。』と言つて小包みの中からそれを取出した。

『あなた、お上んなさい。今日虎どんに買つて來て貰つたの。』

二人とも海苔巻きが好きであつた。

『あなた、木の葉丼が好きだから、木の葉を持つて來やうと思つたけれど、木の葉は持つて來られなかつた。はゝゝゝ。』

温順しい女だけれど、時々罪のない笑談をよく言つた。

『木の葉は持つて來れやしない。』

落着いた長い夕飯が濟むと、

『あなた、手紙を書いて頂戴。津の國屋のおかあちやんと虎どんとに手紙を遣つて置かないといけない。』

二人は、お茶屋の主婦に、よく千代奴を一人で寄越してくれたの、無事に着いて今夜は他から貰ひの掛つて來るうるさいこともなく、今二人一緒に湯に入つて來た處だの、今夜こそは二人きり夫婦らしく寢るだの。といふやうな笑談まじりに三晩泊つて行く、二十八日は朝早く歸る。花の事は千代奴が歸つてから委細話しをするといふやうな用事を相談しい〳〵書いた。

其處へ、

『もうお床をのべませうか。』若い女衆が襖を明けてしとやかに伺つた。

『あゝ、のべて貰ひませう。』

翌朝は二人とも七時頃に目を覺ましたけれど、小用に行つて來てまた寢た。

『斯樣な時に安心してよく寢な！　私はお前を休ます爲に呼んだのだよ。』

『嬉しいわ！　あなたの深切は忘れないわ。』

本當に起きたのは十時を少し過ぎてゐた。朝飯を濟ましてからもそのまゝ其處に

根が生えたやうに向ひ合つて飽きもせず話し耽けつてゐた。先達つて中續けて瑠璃色に晴れ渡つてゐた空が今日は意地わるく濕つぽく曇つた。

『散歩に出たいのだか、曇つてゝ厭だなあ。』

眞島は忘屈して立つて障子を明けた。泉水を取卷いた十坪ばかりの庭樹の彼方には枝振りの面白い松の老木の密生した奇妙形の山が何時見ても眼を覺ますやうに眞青な色に聳つてゐる。

『散歩に出なくつても好いわ。此處にかうしてゐてもいゝ。』

それでも、

『出て見ませうか。』と、女が調子づいたので立ち上つた。

『私、このまゝで行くわ。』女は派手な貸沿衣の上に被つてゐた宿の褞袍を脱いで、その上に絽縮緬の黑羽織を着やうとした。

『そんな風をして歩くのはよしてくれ。矢張り着物を着て行け。』

『帶をするのが大變なんだもの。あなた締めるのを手傳つてくれて。』

『手傳つてやるさ。』

『さう。ぢやさうする。』

折角出掛けたと思ふと、すぐ村時雨がして來た。

『こりやいけない、もう引返へさう。さうして自家で栗を煮て食べやうよ。』

『あゝ、さうしませう。それがいゝわ。』

八百屋から栗を取つて來さして、自分達で煮た。女は話しながら、それを剝いては男の口に持つて行つてやつた。男は女の望み通りに「博多小女郎浪枕」を讀んで、六ケ敷い處を說いて聽かした。

『三月に延次郎の毛剃を見たわ。よかつたわ。……宗七が死んで小女郎はどうするの？　もう一生何處へも嫁に行かないの？』

『さあ、どうするか。小女郎はさうするんだらう。お前、この後私と一緒になつて、

もし私が早く死んだらどうする？』

『私、もう一生に定つた夫は一人で澤山だわ。』

『私が生きてゐる間だけさうなのだらう。』

『それより、あなた、あの單衣をどうして？』

『あのまゝさ。』

『今此處に持つて來てゐるの？』

眞島が、この夏東京に歸つた時、自分のと女のを二反買つて來た縮の浴衣を、大阪に着いた晩にあなたのも私持つて行つて置いて暇の時分に縫つて置いて上げませうと言つたのを、いゝからと言つて自分のだけは、反のまゝ彼れの體と一緒に方々持つて廻つてゐたのである。

『出してお見せなさい。』

眞島は押し入れの荷物の中からそれを取出した。

『いゝ柄だわねえ、私此處にゐる間に縫つて置きませうか。こゝの綴ぢ糸だけ切つてもよくつて。』

女は、反を長く解いて自分の腕に掛けて首を傾けて見廻したりしてゐた。

『此處ぢや縫ふ間もないよ。どうせ裁縫の達者な人だから。……お前と東京へ歸るまでそのまゝにして置かう。いくら遲くなつても來年の夏の間には六百圓を拵へるよ。』

『本當にさうして頂戴。私も精を出して働くわ。その時分には私の方のが四百圓ぐらゐになるから。』

千代奴の身の代金は千圓であつた。

十疊だの十二疊だの、その他小間を入れて七間も八間もある鷹揚な建築の別館には、二階の六疊に一人滯在の客があるきりで、他に客はなかつた。眞島の部屋は階

トのずつと奥まつた八疊であつた。雨はざん〳〵音を立てゝ降り續いてゐる。坐つたまゝ障子を一枚押すと高く軒端まで達いた向の山の綠を背景にして雨の絲が白くかゝつてゐるのが美しく眼に入る。銀灰色の空から何處からともなく落ちて來る雨がその山の頂點まで達くと、始めて白い細い絲を長く引いてゐるのが見分けられる。

『あれ、あの雨を御覽。綺麗だなあ。山の靑い處へ降つてゐるから白く見える。』

眞島は一心に雨の色に見惚れた。

『いゝわねえ。かうしてゐて雨の音を聽いてゐると、安心な心持ちになつて來てよ。』

晩食は牛肉を誂へて置いて、相合傘を翳して温泉に行つた。眞島は昨夜の寢不足やら運動不足の上に過度の飲食で終日氣怠い食もたれの心持ちがしてゐるのが、温泉に漬つて來ると、倦み疲れてゐた頭腦が全然入れ換へたやうに輕くなつて、元氣づいた。

味の良い神戸の牛肉の夕飯も濟んだ。

『お腹がくちくなつた。何か聲を出して唄つて見やう。』

眞島は、さう言つて坐り直つて、聞き覺えの唄の節やら淨瑠璃の眞似をした。旅館に三味線があるのだけれど、わざと三味線などを彈かなかつた。

『私、一つ踊つて見やうか。』

女はさういつて立ち上つて「夕ぐれ」と「やりさび」とを內證のやうにして踊つた。

『私「時雨西行」が好きだ。お前の昨夕の身の上話しを聽いて一層それが懷しくなつた。ねえ「あらうらやまし、わが身のうへ。ちゝはゝさへもしらなみの。よするきしべのかはふねを。とめてあふせの浪枕。世にもはかなき流れの身……」

眞島は、文句は覺えてゐるばかり、習つた節ではないのでそれが長唄の眞似にならうとも淨瑠璃の調子が混じらうとも構はなかつた。唯、自分でその文章の前後に就いて感ずる心持ちを氣に入るやうな聲音に出して物悲しさうな調子で唄つた。

『ねえ、お前にもお母さんやお父さんがあつても、無いも同然なんだらう。私はそのお前の「父母さへも白波の、世にもはかなき流れの身」が可愛相だ。東京から遠く大阪へ流れて來て矢張り遊女になつてゐるのだ。』さういつては、同じ處を幾度も繰返へした。

『私はまた西行法師が好きだ。「ゆくゑさだめぬ雲水の〳〵。月もろともに西へゆく。さいぎやう法師は家を出て、一所不住の法の身に、吉野の花や、さらしなの月もこゝろのまに〳〵三十一字の歌修行……』

眞島は、たうとう立つて行つて、荷物の中から旅にも忘れず携へて來てゐる長唄の稽古本を取り出した。さうして處々を意の赴くまゝに聲を上げて唄つた。

女は、その物悲しげな聲色に眼を潤まして聞いてゐた。

（をはり）

仇

な

さ

け

『……尤もそれには近頃また少し理由があるのです。矢張り女のことです。』

さう言つて勝山は次のやうなことを話しました。

思ふことは十分の一も出てはゐませんが、貴君も讀んでくれたさうです。あの『疑惑』といふ小説にある通りのこともあり、私は東京には飽きが來るし、何をせねばならぬといふ希望もなくなつて、私の主觀の眼には恰ど東京が沙漠か何ぞのやうに見えて來たものですから、暫らく變つた土地に旅行でもして見やうかといふ氣になつて、それで一昨年の秋の初めから京阪へ遊びに出掛けました。言はゞまあ氣に入りさうな女を探しに行つたやうなものです。……妻があるとか、戀人があるとか、兎に角女を所有してゐる人達には女を所有したいといふ希望以外にまだ他の希望が種々あるものですが、さて前に女があつて、それを無くしたとか、まだそれを所有しないとかいふ人々に取つては、どうかして女を所有しやうといふのが男子の唯一の希望ぢやないかと思ふのです。斯ういふと。所謂豪傑肌の人達は哄然として一笑に付するかも知れませんが、それは併し皮の硬い觀察に過ぎないのです。

それで、遊女の誠と鬼瓦の笑つたのとはないものと、昔から相場が定まつてゐるけれど、私は、大阪で剛染んだ女によもやそんな傷りはないものと思ひ込んでゐました。

去年の十月の廿二日の日でした。私は九月の初めから滯留してゐた有馬の溫泉を引揚げて大阪に出てまゐりました。溫泉の町から三里ばかりは六甲山背面の山道を車に乘つて、阪鶴鐵道の生瀬といふ驛に降りて來ます。それから汽車で一時間足らずで直に大阪驛に着くのです。私はその車の上、汽車の中で、もう二十日餘りも逢はぬその遊女の顔を如何に思ひ焦れたでせう。

九月の末に四日ばかりその遊女は有馬に遊びに來てゐました。三晩泊つて、翌朝は早く一番の汽車で大阪へ歸るといふ夜、

『あなたと斯樣なことはもう一生ないわねえ。』と、申しました。私は變なことをいふと思ひながら、

『今に一緒になつたら、始終斯ういふことはあるぢやないか。』

と、私が訝しさうにいひましたら、遊女は唯默つて微笑してゐました。或はその時分から他に心が動いてゐたのかも知れません。

有馬から鐵道に出るには途中の景色はないが、生瀨よりは三田驛の方が順路になつてゐます。一番に乘るには五時には起きて出ねばならぬので、遊女はもう宵の中に着物や千代田袋のやうなものを自分の枕頭に取揃へて、

『翌日の朝まごつかないやうに斯うして置くんだ。』

と、いつて疊んだ帶の上に緋縮緬のしごきを載せました。

私は、女と相談して店とお茶屋の女將とに松茸だの栗などを買つて來て女の枕頭に置いてやりました。

疲れてぐつすり一と寢入りすると、私は目敏くも昨夜宵の中から頼んで置いた車夫が、別莊の生垣の外から、端の間に寢てゐる女中に聲を掛けて起してゐるを夢のやうに聞きました。

あッと思ひながら

『おい！　〳〵。』と、前後も知らずに熟睡してゐる遊女を搖り起しました。何といふ短い一と寢入りでしたらう。……さうすると遊女は、目を覺し〳〵俯伏に起き直つて、

『私は親に會へなくつても、これがなければ』と、

言つて、枕頭の女煙管を手を差伸して取り寄せ、二三服瞬く間に吸ひつゞけてゐました。

女中は、睡い顔をして靜かに襖を明けて、吾々を起しに來ました。

まだ九月の末でもう山の上の曉の風は冷く肌に浸みます。

遊女は起上ると、寢卷のまゝ、昨夜からそのまゝ行かなかつた便處に行きました。

『おゝ、寒い〳〵。』慄へながら戻つて來た。

『寒いだらう。だから言はないこつちやない、老婆さんが言ふやうにあの褞袍を被つて停車場まで行くんだよ。此處で斯樣なだもの、三里の山道を車の上で朝風に吹き曝されて溜るものか、肌に着ける襦袢もも一つ重ねてお出で。私のがあるから。』

私は押入れの荷物の中から此間西洋洗濯から届けたばかりの、眞白い肌襦袢を取出しました。

『これ硬い。着ない。』

女は、一寸手に取つたその襦袢を傍に投げた。

『馬鹿だねえ。少しくらゐ硬いたつて、着てゐれば直ぐ柔らかになる。』

『大丈夫よ。あの褞袍を借りて行くから。……あなた汚れた物があれば何でもお出しなさい。私持つて歸つて洗濯にやつて置くから。』

そんなことを言ひ交しながら遊女は支度を急いだ。手も怠く一心に板のやうな太い帶を締めてゐる。私は夜具をはねた敷蒲團の上に坐つて、千代田袋を取つて開きながら、

『何にも忘れた物はないね？……これはあるの？』

其處にあつた自分の鼻紙を取つた。

『あゝ、鼻紙も少許入れて置いて頂戴。』

『でもお前よく來てくれたねえ。』

『……知らんわ！』遊女は、甘えるやうに言ひながら、漸と帶を締め了つた腰の周圍を、身體を捻ぢ曲げるやうにして見てゐた。

『さあ！　もうこれで可い。』と、窮屈さうに膝を突いて、大島紬の女持ちの煙草入れを帶の間に挾んでその上を一つぽんと叩きながら、

『あなた、その栗を忘れないやうに。』

老婆と若い女中の見送るのを玄關で斷つて、遊女は自身貸し褞袍を抱へ、老實さうな車屋の提燈に曉の暗に覺束ない足許を照させつゝ、危つかしい石段を踏んで、私達は、車の通ふ溫泉町の入口まで降りて行つた。

『車屋頼むよ。』

車夫はそれに返答をしながら轅棒を擡げた。車輪はもう二つ三つ回轉つた。私は尙も後に蹤いて歩いた。

女は商買人と見えぬやうにと注意して、束髪に結ひ變へて來たその多い頭髪を、黎明の冷たい風に吹かれながら車の上から、

『あなたももう歸つてお休みなさい。寒いから。』

まだほの暗い闇の中に眞白い頰を斜に向けていつた。

『あゝ、私も來月は早く大阪に歸るから、さうしたら、都合で一緒に東京に行かう。』それを口早に繰返した。

車はもう橋の上に轟いた。

『左樣なら！』女が最後に車の上で體を捻ぢ曲げるやうにして呼び掛けたのが薄暗の中に認められた。車は緩い勾配を一直線に下つて行つた。影は曖く間に暗に消えて了つた。

私は、忽ち病に襲はれたやうに寂寞を感じた。悲みに充ちて別莊の自分の部屋に戻つて來た。

八疊の室の眞中には藻拔けの殼の寢床が二つ並んでゐるばかりだ。私は泣きたいやうな氣になりながら、詰まらなく、冷へ切つた寢床にまたもぐり込んだ。さうして頭からすつぽり蒲團を被りながら、海老のやうに身體を縮めて『あゝ、此處にせ

めて七八百圓の金がないかなあ。それだけあれば後どうかして千圓にする。あの遊女が傍にゐなければもう生きる歡びは無い！』

そんなことを取留めもなく空想してゐると、

『たうとう歸んなはつたなあ。』

と、いひながら老婆は入つて來て、一つの寢床を情け容赦もなくぱた〳〵形付け初めた。

『旦那はん、これからどつと寂しおまつせ。……まあ三日やなあ、三日くらゐは何となく寂しいもんや。』

『そんなことを辨へてゐるくらゐならば、そんなに立ち早々夜具をぱた〳〵形付けなくとも此方が起きるまで、せめてその儘にして置いてくれても可さゝうなものだ。氣の利かない田舍婆奴！』と、私は今にも逆上げて來て泣きたいばかりに賴りないのと、焦れ〴〵するのを凝乎と堪へながら、默つて老婆のするのを一瞥してゐた。

八疊の間が、俄かにすうつと間の拔けたやうに廣くなつた。

『可愛や江口は……もう一里も行てゐるだらう。』と。思ひながらまた自暴に蒲團を被つた。私はその時謠曲の「斑女」の中の、……「明けなんとして別れを催し、せめて閨もる月だにも、しばし枕に殘らずして又獨寢になりぬぞや」と、いふ處を思ひ出して、夜具の中で身を千切られるやうであつた。……それが痴呆ですか、それを痴呆といふ人は、天性愚鈍な人です。

それからまた一と寢入りして、九時になつて起きたけれど、唯つまあらない氣が先きに立つて、魂が何處かへ脫けて行つたやうで體に精がありません。昨日一昨日に引比べて、その日の寂しさといふものは無い。私は、不味い御飯をお茶の力で咽喉に流し込むと、また寢床を拵へて、その中へもぐり込みました。さうして夜は、飲めもせぬのに酒を命じて、がぶ〳〵自暴酒を呷ふりました。さうすると、いやが上に感情が興奮して熱い涙がほろ〳〵と兩方の頰に流れた。遂に神經が疲勞して、

私はその爲に遣る瀬のない夜を昏睡して明したのです。

一日二日さういふ狀態でゐましたが、三日めにはそんな事をしてゐては倍々身體が惡くなるばかりだと思ひましたから、一つ勇氣を起して運動の爲めに六甲山の頂上に登つて見ました。

「斑女」の中に斯ういふことがあります。「……夕暮の雲の旗手に物を思ひ、うはの空にあくがれ出でて身をいたづらになす事を、神や佛も憐れみて……」

うはの空にあくがれいでゝ身をいたづらになす。と、いふのは私の場合がそれです。私はこの花子のやうに、戀ひ憧れてそれが爲に狂氣になるのも決して厭ひはしません。戀愛の至情の爲に狂氣になる「斑女」の中の花子や、それが爲に鱗の生えた蛇になる道成寺の清姫や、それが爲に生命にも功名にも換へ難い愛妻デスデモナを壓殺するオセロや、それが爲に公金の封を切つて繩目の恥を曝す忠兵衛などは人類の中の天才です。藝術の化身です。

私は、さういふ藝術の化身でなく、凡人でした。さうして東京から、非常に責任を負つた長篇の小説を書かねばならぬ仕事を持つて來てゐましたから、さう遊女の事ばかり思ひ續けてゐて、身を徒づらに持ち做してはその責任が果せないと思ひましたから、それで一つ六甲山に登つて、朗かな秋晴の遠望を恣にし、衣を千仞の丘に吹拂はして、心機を一轉せしめやうと思つたのです。

西北には遠く播但の山々が、脈々として起伏してゐるのが好く澄んだ十月初旬の空氣の中に薄紫色をして一望の間に見渡される。その山と山との間に開けた平地には、今しも匂ふばかりな稻が鮮明に黃熟してゐるのが遠く眺められた。

頂上の茶店で一と休みして、また少許登ると、穩かなちぬの海は直ぐ眼の下に展がつてゐる。暖かな秋の日の水蒸氣に海の面が煙つて、恰も大きな古銅の鏡のやうに銀灰色に鈍く光つてゐる。私は頂上の突鼻の處に佇んで、懷しい大阪の方を眺めました。御影、住吉、さては葦屋の浦から西の宮と、海濱の町々が靜に斷續し

てゐるのが見えるけれど、大阪と思ふあたりは唯濁つた煤煙に隱れて、微かに高い煙突が數へられるばかりです。

『難波新地は彼方の方だらう。今時分江口はどうしてゐるだらう。』

と、遊女の事を思ひつゞけてました。其處から住吉道といつて、まだ鐵道の出來ない時分神戸大阪の浴客が山籠で往還した山道があつて、私の立つてゐる直ぐ脚の下には、山腹を蜿ねつて一本の山道が白く隱見してゐるのです。私は此處まで來たついでにそこを降りて行つて、阪神電車に飛び乘つて大阪に往つて來やう、江口に逢つて來やうか。と、思ひましたけれど、責任のある仕事を控へてゐてはそんな無謀なことは出來ません。いや、その仕事さへ捗取れば後で何樣なに心伸び〳〵と江口と遊ぶことが出來るかも知れぬ。その大きな仕事をさへ片付ければ江口を身受けすることも出來るのだ。お前は、その爲に今仕事を樂しんでゐるのぢやないか。と、私は自分で自分の身を孤り、自分から心を勵ましました。清い風は蕭々と山の上の尾花を吹き靡びいて、私は高く天に登つてゐるやうな心地になりました。さうして私は矢張り女を思つてゐました。

少し他の事になりますが、女と藝術といふことに就いて斯ういふことがあります。——それは、私のまだ幼い時のことでした。田舍には屢くさういふ人間がありますが、故鄕の私の家へ、まだ父の生きてゐる頃面白い世間師が度々來てゐました。それは四國邊の者で、碁も初段くらゐは出來る、茶の湯生花もやる、淨瑠璃は特に上手で、父もそれが好きでしたから、來ると幾日でも逗留して甘い物を食べて酒を飲んで、一日田舍の旦那衆の遊び對手をしてゐました。子供の時分のことだから確かに記憶せぬが、一年に一度か二度は必ず來て永く方々の家を泊り歩いて行つたやうです。すると、或る年のこと、その男が若い女を女房にして連れて來ました。私はその時子供心に大變に奇麗な姐さんだと思つて、その女が自家の座敷に坐つてゐるのを見ると、何だか吾が家までが今から說明すれば粹になつたやうに感じたので

す。それは女淨瑠璃であつたか、それとも高松か丸龜あたりの藝者であつたか知れません。兎に角その男の淨瑠璃の三味線を彈きました。

處が、私は子供の耳に、その時かういふことを聞きました。

『此の間、何處其處へ行て碁を遣つたが、彼男えらう弱わうなつてゐる。何度やつても負けた。あの女が氣に掛つて仕方がないのだ。あれが傍にぴたりと着いてゐないと負ける。……痴呆者が!!』

斯う、父と同じぐらゐの年配の人が申した。

好きな女が傍に着いてゐれば、碁が強くなる。ゐなければ負けてばかしゐる。

その後、その男は美しい女を連れて來た時を最後に、ぴたりと來なくなつて了ひました。父も死に父の友達も死にましたから、丁度同じ年格好であつたその人間も最早この世にはゐますまい。けれども、その後私が段々成人して軈てその男の、その時分の年配に近くなつた今日、種々な人間の世の甘い辛いの味を嘗めた結果。——

——好きな女が傍に着いてゐれば碁が強くなる。——この事ばかりは三十年の後の今日になつて、倍々私に深い興趣を催さしめるのです。

また私は、故の名人圓朝の話を、たつた一度聽いたことがあります。それは、若い、江戸の踊りの師匠と若い浮世繪師とが互に兩方の藝に惚れ合つて思ひを焦してゐたのが、遂にその思ひが叶つて夫婦になり、一層藝が進んだといふのでした。

戀愛は美しい感激です。——私は、斯ういふことを思ひ耽りながら、遠く、力及ばない大阪の空にあくがれてゐました。さうしてせん方なくまた山を降りました。

それから二十日餘り過ぎて漸く大阪に歸ることが出來たのです。緩い阪鶴鐵道の汽車を停車場ごとで、私は舌打ちをする思ひで池田、伊丹と、やがて大阪驛に着くと、江口への土産にと山の町から買つて來た栗の籠を下げて改札口に出ると、電車に乘るのも待ち遠く、直ぐ有り合ふ車に飛び乘つて戀ひしい懷しい難波新地の一廓へと走らせました。

十月末の大阪の夜の街は、もう袷衣着の肌にはうそ寒い秋風が浸みて、茶屋の灯懐しい情緒を唆るのでした。東京で私の知つた待合の女中が『遊ぶのは十月が一寧好いわねえ。』と、いひました――もどかしい人車はやがて燈の色明麗な南陽の街に入つて、中筋の、例のお茶屋の入口にがたりと威勢かく轅棒を下しました。

「暮れ」までになつてゐる座敷を小早く貰つて江口は早速來ました。

『隨分長かつたわねえ。どうしてゐて？』

顔中笑ひに崩しながら、私の二つの袂を執りました。

そんな時に階下の長火鉢の向から主婦に、何かいつて戯弄れながら、心も空に急いで段階を驅け上つて來る江口の笑ふ顔が今も眼に見えるやうです。夢によく、氣ばかり急いで足の思ふやうに早く運ばないといつた時のやうな形です。多い兩頰の鬢がふわ〳〵と躍つて、拔衣紋に着た羽織が後に滑り落ちさうでした。

『今晩これから夜中遊びませう！』

『あゝ。』

それから私達は長い秋の夜を、更けるのも忘れて無窮の樂欲に醉ひ疲れました。

翌日は正午まで遊んでゐました。二人とも鮨が大好で、特に江口は、

『私、種々な魚のよりか、たゞの海苔卷が好き。』と、いつて、屢く難波の壽し虎から取り寄せました新澤庵の出る頃香々の入つた海苔卷の味は、東京でも味はゝれない風味です。私達は、それを夜更けてから、新しく茶を煎れさして二人前も食べましたつけ。謠曲の江口の遊君も斯くやと思ふばかりに私の江口も賤しくない物の食べ方を致しました。私は其點も好きでした。

『あなた方は二人とも東京の方だすよつて。』

と、いつて、後には氣を利かして、仲居がおしたぢを手鹽皿に入れて添へて來ました。

お午には天どんを食べて見ました。江口は『私、おいしい天どんを食べて見たい

わ。』といつてゐました。お茶屋の主人が東京の人間の嗜好を心得てゐて、何處かのが好いといつて、電話で註文してくれました。

『あんまり汁をぐちや〳〵多くしないで。』

と、言つてゐるのが聞えました。程なくそれが來て、二人で食べました。

『やつぱり餘まりおいしくないわねえ。……貴方これを上げませう。』江口はあなごを一片箸に挾んで私の〻上に載せました。それは甘くなかつたからぢやない。毎時でも江口は早く腹に充滿て、私にくれました。私はそれが甘かつたのです。

店から正午迎へが來たので、正午後までもう三本付けて、何時までも置いときたい江口を返しました私は少し睡て行くからとて、

『左樣なら！』と、いつて、江口は、襖の外からもう一度此方を見て思ひを殘す言葉をいひ置いて去りました。

それが最後でした、江口に逢つたのは。

東京には一寸行つて來る。と、その時話して別れたのです。過日も申した通り、江口を身受けする金策をするにはどうしても東京でなくては都合が惡い。加之大阪では居馴れぬ者には宿屋住ひが誠に勝手が惡いので、私は或は、そのまゝもう故郷の東京に尻を据ゑて、東京から時々難波新地へ通はうかとも思ひました。東京から難波新地へ百五十里の道程を急行列車で通ふ、それも遊女に惚れた者の天晴心意氣ぢやありませんか。

でも今度大阪に戻つたら何處か島の内か、難波界隈に清淨とした家の間を借りて、仕出屋から辨當を取らう。

『さうなさい。私遊びに行くわ。……虎どんに貸す家を探さして置く。』

そんなやうな事を言つてゐたので、東京から手紙を出した序に一度その事をも訊ねてやると、それに對へてよこした返辭に、

ぜんぶんごめんくだされ度候。おいく〳〵さむさにむかひ候。あなた樣には、なん

のおかはりもこれなく候や。ちよつとおたづね申上候。わたくしも、べうきにてやすんでをりましたなれどもこのせつは、おい〳〵よくあひなり、つとめをり候ゆゑ、御安心下され度候。さてとや家の事おんたづねにあひなり、虎どんにたのみて、二かいの、よろしいところをさがさしておきまするゆゑ、左様ごしようち下され度候。あなた様には、いつ頃大阪へお歸りにあひなり候や。一日もはやくおかへり下さるやうお待ち申居り候。

十一月十六日

旦那さま

江口より

かういふ手紙です。で、歸阪が都合あつて少し遲くなる。といふ手紙を添へて、私は二十二日の日に東京から、江口を呼びつけてゐたお茶屋の主婦にあて〻、二人に、食べる物を鐵道院の便で送つてやりました。すると、折返へしに、廿五日の朝主婦から返辭があつて、江口は、私の送つた品物と手紙とが向へ着いた二十三日の日に、赤飯を配つて引き祝ひをして、私で、始終入つてゐたそのお茶屋へは顔をも見せず、前の晩にもう梅田の停車場から何處かへ行つてしまつた。と、知らせて來ましたそれは過日も話した通りです。

私の失望と憤怒と怨恨とは今更ら申すも愚かです。加之それに類した私の多恨の經驗はこれまでも既に度々話したことがありますから、今復たそれを繰返へしますまい。唯、有馬の温泉に逗留してゐる時遊女の立つた後の私の寂しがつた心持ちを味つて下されば、永久に私を棄て〻何處ともなく姿を隱したと初めて知つたその時の私の心持ちをもまた味つて下さるでせう。

大阪のお茶屋の主婦から、その絶望的な悲報の屆いた廿五日の朝、私は、懇意な樂天家の友人と快濶な氣分で何か雜談を交へてゐました。その手紙を見ると、私は急にそは〳〵して心落着かず、その友人の去るのを待つて、私は俄に支度を調へて足利へと立ちました。足利には江口の實姉がゐて、私は、もうそれと江口のこと

で數回書信の往復をしてゐたのです。その夜足利の姉夫婦は私を歡待してくれました。そして始めて會つた姉に委しく妹の内情を聞くと、私に、何日大阪へ歸るかと訊ねてよこした手紙と同じ十六日の日附で、姉の處へは、今度都合あつて、廿二三日頃大阪を立ち退いて遠方に行く、行く前一度東京に行つて姉さまに逢ひたいが、思ふに任せぬ。勝山さまには、もし足利に訪ねて見えたら、只、永い間厚いお世話になりました。何時までも忘れませぬ。と、お禮を申して下さい、遠方に行くといふことは默つておいて下さい。と、書いてゐました。

『どこへ行つたんだらう。……この春新橋まで迎へに來てくれといふ電報を打つて置いて來たときに迎へに行つて會つた時、何しに東京へ來たと訊いたら、お客が外國に連れて行くといふから、その相談やら、訣別に逢ひに來た。と言つたから、私、飛んでもない、そんな外國へなど行つてはいけない。もし外國なんかへ行くやうなことがあると、それこそもう姉妹の離別だ。と、いつて、私、やかましくいつて止めたのです。自分でも始終氣がうろ〳〵してゐて、心が一つも定らないんです。外國へ行くなんかいつてゐるかと思ふと、今度は、私、何處か山の中のお寺に行つて尼さんにならうかしら、私のやうな者は嫁には行けないし――さういつてゐるかと思ふと、東京に戻つて所帶を持たうか。といつて見たり、自分でも何うして可いか分らないんです。』

姉のさういつて、眞心から妹の身の上を氣遣つてゐる色が、私にも明歷と見えました。

『今ぢや三人の姉妹で足利の姉さんが一番氣樂なの。子供がないけれど。』

江口は、さういつてゐた。正月を近く控へてゐて、粉類から味噌や醬油や、鹽鮭だの、種々な荒物類が、小家ながら店から奥庭までぎつしり入つてゐて、土地柄とて絹絲なども取引してゐる。小金に不自由のなさゝうな明るい電燈の下で、姉は長火鉢の向側に坐つて、亦主の吸つて立つた長煙管を取上げながら、四邊に氣を置

き〳〵話した。

『私も裸體で此處の家へ嫁たのですし。私や彼女の親父といつたら、親類といふ親類中を泣かして、もう今ぢや誰れ一人對手にする者は無いといふやうな人間なものでから、あの子もやつぱり親父の爲に一生廢人にせられて了ひました。……母親はまだあの子の腹にゐた時分に、矢張り父親がいけない爲めに離緣になつて、生み落すと引取つて同じ村中へでしたが、里子に遣つてゐました。時々連れて來て見せてはゐましたが、……五つ六つの時分にやつぱり近い處に養女に貰はれて、其處ぢや仕合せだつたのですが、實家へ歸つて來てから、どれ何處にゐる。といつても、隱れて會はなかつたりして……やつぱり一旦里子にやつたりすると、何うも其處に妙な隔てが出來ていけないものです。』

『えゝ、そんなことも種々彼女から聞きました。……私、さういふんです。お前は、話すことに嘘がないから、まさか車夫や屑屋の娘でもなさゝうだし、親類が皆な相應に遣つてゐるんなら、お前のやうな泥水に身を沈めてゐる者が一人でもあれば親類中の顏汚しだから、一同して錢を出し合はしてもお前を清淨な身體にしさうなものだ……』

『えゝ、それです。……けれどもう何處の親類でも散々父親の爲に泣された結果彼樣なことまでするやうになつたものですから。』

姉と私との間に江口の身の上話しは取り留めもなく夜更けるまで續きました。そこへ義兄が外から歸つて來て話しは途切れた。

『もう十二時過ぎた。……また明日の話しにして、もう寢るとしませう。』亭主は店の小僧どもに戸締りを注意した。

亭主と、少し離れて、並べて敷かれた寢床の中に私は朝から遣る瀨なく思ひ疲れた身體を休めた。綿の柔かい夜具は、恰も江口の姉の歡待振りのやうに親しく温かであつた。私の脫ぎ棄てた羽織と着物とを疊んで、それから蒲團の肩先や、裾のまは

をりとん〳〵抑へ付けて、自分も亭主の彼方に設けた寢床に行つた。

頼りない江口の行く先きを、姉と私とは翌日も彼處此處と種々に想像し合ひました。田舍者の、所帶にかまけて汚くこそして居れ、妹とは漸く三つ違ひの廿六の姉は、小い口元から、小高い鼻の形、その多い黑い頭髮の生え際まで、餘りに酷く江口の面影に似通うてゐるので、大阪の土地で一と年餘り馴染んだ遊女の仇し情けを緣に訪ねて來たこの姉、江口と遠く離れてしまへば、自分とは何時の世にか逢ふことのあるべき。と、思へば、私は其處を容易く立ち去りかねて、思ひ病らひつゝ折角來た序次に、直ぐ近くにあつた古い足利學校と文庫とをそこ〳〵に一覽して、黃色く散つて行く庭の銀杏を拂ふ風に袂を吹かれながら寂しく葉の落ち盡した其處らの樹々や、江口の生れ故鄕までは、此處からはまだ三里も山奥だといふ、その方角に越えて行く痩せた雜木山などを何時までも眺め入つた。果しもないことに時を移しつゝ進まぬ氣分をせめて車に搖られて昨夜たゞ暗中に降りた停車場に來ると、間もなく十二時の東京行きが着きました。

折返へして復た、その後江口の行くゑに就いて聞いた委しい事あらば知らせ。といつてやつた手紙に對して大阪の主婦から、かう書いてよこしました。

たび〳〵御手紙ありがたう。あなた樣の御心の內、わたくしは、よく〳〵御さつし申上候。さて江口さんゆくゑ、いろ〳〵たづね申したところ、やはり、あなた樣の、おほせのとほり本年の四月ごろから、自前で、かねためるためにはたらいてましたのです。また人のうはさでは、このたびの人は、さういふ人ではないさうな、虎どんにきけば、なに事もたよりがないゆゑ、なにぶんわかりかねるとの事いろいろともだちにきけば、なんでも下の關の方へいつたさうです。またあなたからの手紙は、一つもないさうです。本だけは店にありましたゆゑ內にとりかへしました。本人の事はさらにわからぬ。かんじんの虎どんがしらぬと申します。わたくしも、よほど、とひあはせましたが、これしきやわかりませぬ。いづれおや

の内へは手紙がゆくでせう。とりあへず、この事おしらせまで

十一月廿八日　　たまより

おんトのさままゐる

下の關の方に行つたらしい。といふので、足利の姉の外國に行くと話したことや、大阪にゐる頃、時々耳にした客の、影のやうな心當りから想像して、私は、朝鮮か臺灣に渡つたのであるまいかと思ひました。

足利の姉からは、それから幾度となく、妹の處から手紙は來ぬか、居處が分つたら直ぐ知らせてくれ、もし自分の方へ先きに分つたら、すぐ其方へも知らするから。あなた樣のお心の内は、私、よく察してゐる。私も日々心の内で大日樣や、お天とさまを拜んでゐまする。もし朝鮮や臺灣へでも行つてゐると知れたら、私、どんなにしても妹の處に行きます。と、いふやうな面と向つて會つたよりも一層打明けた切ない手紙を寄越してゐました。眞實、姉も兩親はありはあつても、無いも同然なり、自分には子はないし、父ゆゑに不仕合せな妹のことを『あの子〳〵』と、いつていとしがつてゐました。

私も、大阪にさへ行けば何日でも逢へると思つてゐた、その大阪にももう居なくなつてしまつたと思へば、一層逢つて見たくもあり、起誓の如く取交してゐた此方の手紙も取戻したし、姉の許へ行先きの少しも早く知れるのを待つてゐましたけれど、姉から聞いたことなど後から種々に思ひ合はして見ると、虚僞をいつてゐたことも段々思ひ當る。流石賣り物安物だ。姉へも江口への恨みを書き、自分はもう彼樣な女は諦めた。肉身の姉妹だから諦められなからうけれど、妹は無い者と諦めなさい。と口說いて遣りました。すると、この正月の三日に姉からまた手紙が來ました。

取りいそぎ申上候。さて一月一日まゐり候あなた樣の御手紙ありがたく拜見仕り候。あなた樣には妹ゆゑにいろ〳〵御心配に相成り候御儀、私、よく〳〵御

察し申上候。ついては、妹種のところより今晩の八時頃書面まゐり、ゐどころ相知れ申候。べつにくはしき事申し居らず、たゞ兄上や私に手紙のとりやりして下さいと申候。私からは、すぐさま、あなたさまのこと、それからお種の身のうへのことなど、こまかに書いてやり申候。それのみならず勝山さまは、足利へ來て一晩とまり、その後も私の處と手紙のやりとりをしてゐられることなで申しつかわし候。妹が勝山さまへ手紙を上げねば、私が勝山さまへ大變に申わけがありませぬゆゑ、ぜひ〳〵あなたさまへお手紙を差上げるやう申しつかわし候。あなた樣より、すぐ妹へ、私が、ひどく立腹してゐると御申遣はし下され度ぜひぜひ御願ひ申上候。あなたさまも私のやうな者と手紙のやりとりするとは、私も妹の處と、とりやりする心いたし候。ぜひ〳〵この後とも御親切になし下され度存じ候。

私の書いた手紙など、あなたさまには、さぞよみにくきことゝぞんじ申候へども、おさつしねがひ上げ候。

一月二日夜

勝山さまへ

まさより

（妹種の處は、臺灣、臺北、樺臺街榮泉堂内）

いよ〳〵推量に違はず臺灣であつたと知つたから、私も早速手紙を書きました。

お前は「勝山との」といふ名を、よもやまだ忘れはしまいねえ。京梅で稻荷さまを祭る時、おまへと揃ひの提燈を上げた時にも記した名で、大阪にゆけば、ちやんと殘つてゐるだらう。併しさういふ思ひ出はお前には何でもなからう。商賣をしてゐる女が旦那が出來て、足を洗つて素人になつたところへ、出てゐた時分の馴染の客が手紙をやるのは、隨分未練がましく、いづれ長火鉢の傍でお前達のお笑ひ草になるのだらうと、知つてはゐるが、お前の姉さんから懇々との頼みゆゑ

此の手紙な書く。そしてついでに私の怨みをもいはう。

去年の十一月の二十二日だつた。大阪へも一と月から歸らぬので、おまへの事が心にかゝり、京梅とおまへとにあて魚河岸で二本鮭を買つて鐵道便で送つた。さうしたら、すぐに京梅のおかみから手紙が來て、ちやうどその二十二日の日に、とつぜんお前の引き祝ひといつて、京梅へも赤飯をもつて來たさうだ。京梅では、私が東京から金を送つて身受をさしたにちがひないと思つて、いろ〳〵噂さをしてゐる處へ、私から鮭と一緒に送つた手紙を見て、これでは、とのさまではないといふことが、はじめて分つたさうだ。

おれは、お前がもう大阪をば何處ともなく立ち退いたとは露しらず、心づくしに鮭などを送つて、おまへから返事のあるのをまつてゐると、京梅から、さういふしらせだ。十一月の二十五日にその手紙を受けとると、わたしは直ぐに淺草の停車場から足利へ行つて、お前の姉さんに會つて一と晩泊つていろ〳〵話しをした。姉さんにきけば、去年の四月ごろからおまへは、自まへでかせいでゐたのだつたさうな。わたしなどゝちがつて、しつかりした旦那がついてゐて、身受けをしてもらつたのは何よりも結構なことであつた。しかし、わたしがそれをしらなかつたのは、どこまでも、こちらがのろまさ。のろまではあつたが、おれは、お前に何度となく、いゝ旦那があつて、わたしよりも先きへ金づくで身受をするといふ者があれば、情けないが力が及ばぬから、此方はきれいに手を引く。私が、かうしてぐづ〳〵してゐる間に身受けをするといふ客があるだらう、お前ほどよく賣れる女で、一人や二人そんな客のない筈はない。といつてきいても、お前は、何時も、ない〳〵としらばかり切つた。そりや自前で儲けて稼いでゐるのだから、假ひ情夫でないまでも客は大切だ。さういふことを打明けてしまへば客がおちる。わたしのやうな懐中の覺束ない客をも、おきやくと思つて、こちらのいふことを一々柳に風で扱かつてゐたと分つて見れば興が冷める。それとは知らずこちらの

眞實は何も斯もお前の嘘八百で玩弄にされた。上州の高崎を振り出しに、品川、吉原から大阪の難波新地とその半玉より小い豆のやうな股にかけ、浮きつ沈みつ渡り歩いて、散々ぱら男をだました凄い腕には今更感心するばかりだよ。

しかし、いくら男をだますが商賣の女郎にでも、約束をした男を棄てるにや、唯の葉書一枚でもこれ〳〵の事情があつて、かねての約束は遂げられない。と、綺麗に斷はつて行つたつて、まんざら罰も當るまい。お前も泥水稼業で十年の間苦勞をした人間にしちや、ちつと汚穢が拔けなさ過ぎるよ。「一處にならう。なりませう。」とは、私ばかりが口に出した約束ぢやない。夜毎日毎に變つた男と枕を交はす女郎の身にしては。お客といふ客毎に夫婦約束をしてゐては體が千あつたつて、萬あつたつて足りなからう。今更おれは、振つた女に野暮はいはない。しかし、大阪を立ち退けや立ち退くと、逢ひ初から一年の間、お前にやつた手紙の數は積つて束にするほどあるはずだ。私の處へ來る時に一緒に持つて行きますと、頼かつて置いた書物と一緒に送つて返すくらゐの深切はあつたつて、大した損ぢやあるまい。

足利の姉の處によこした手紙には、十一月の十六日に、五六日のうちに他へ行くと書いてゐる。それに何んだ、私のところへよこした手紙には、やつぱり十一月の十六日に書いた手紙に、「あなたはいつ大阪へお歸り下さるか。」といつてゐる。お前は棄てる男を、棄てる日までもだまさねば腹が治まらないのか。京梅のおかみが手紙をよこさねば、お前はやつぱり大阪にゐるものと思つて、おれは、べん〳〵と東京から、またぞろ大阪にお前を憧れて歸つて行つたにちがひない。

そんな薄情な賣女に赤練はないが、「長くつきあひませう。長くつきあつて御覽なさい。私は義理堅いから。」と、自分でいつた事はよもや忘れはすまい。京梅のおかみの手紙を見て、江口にみれんはないが、あの手紙と書物だけは、取り返したいから。と、いつてやつて、虎どんに尋ねてもらつたら、本だけは店に

置いてゐたさうだ。たとひ商賣にもせよ。一年の間引き付けておいて、棄てゝ行く間際に手紙一つ書くのも怠儀だつたのかい。

忘れもせぬ九月の十六日に有馬から出て來て、京梅から返事をすると、遠出をしたとか他處ゆきをしたとかいつて、中遲くから入つて、お客につれられて神戸に行つてゐたと言つた、その臺灣の方へ行つてゐた客が、こんどの男だらうとは、東京にゐても大抵見當はついた。

お前くらゐ了見の定つてゐる女なら臺灣の土人の中にゐたつて、あごは涸かない。おいらは東京にゐさへすれば、帝國劇場も見られる。かぶき座も見られる。人を騙す狐の住む臺灣なんぞへ行く氣にやなれない。大阪にだつて、もう行きやしない。憎まれ口はもうよすが、しかしお前も苦勢をした女ならば、男が返せと賴む私の手紙は一切返してもらひたい。棄てるほど嫌ひな男から遣つた文を、お前が持つてゐたつて何の役にも立つまい。あんな厭な男でも、手紙一枚で斷はりもせず、棄てゝしまつたとおもへば、あんまり寢覺めのいゝこともあるまい。手紙だけはどうあつても返してもらひたい。

姉さんは、なんと書いて手紙をだしたか知らぬが、棄てられた上は、私はお前にみれんはない。併し姉さん達は堅氣だから、おまへのことは本當に心配して、私の處へもどうぞ妹の行くさきを探してくれと、何度手紙をよこしたが知れない。私はもう、お前で泥水稼業の女には懲々だ。いづれそちらへは好きな人につれられて行つてゐるのだから、騙された上棄てられた男の私から手紙をやるのはいくぢのないことだけれど、姉さんの賴みだからも少し書く。お前はかねぐ姉さん達の深切のないことをこぼしてゐたが、それはおまへが小さい時から他人の處でまゝ子根性に育てられて、その上にさういふ泥水稼業を長くして來たから、心がひねくれてゐるので、姉さんが今度、お前が去年の十一月の末に手紙をよこしたきり音信なく、行くさきのわからなくなつてからといふものは、それはく心

配で、私の處へも何度手紙をよこして、妹の行くさきを大阪のお茶屋へ聞き合はしてくれ、もし朝鮮へでも行つてゐるなら、自分はどんなことをしても妹をつれに行くとまでいつてよこしてゐるのだ。お前の姉さんが、お前のことを「あの子、あの子」と、いつて、どんなに可哀さうに思つてゐるかそれは一と通りや二通りぢやない。

お前は、吉原が燒けた時にも、姉さんに羽織のお古を一枚貰つたきりだといつてゐたが、それは、その通りであつたかも知れぬが、一體姉さんの御亭主は、分らない、量見のまづい人間といふことは、わたしも直ぐに分つてゐる。お前の事につき、姉さんが私と手紙のとりやりをしてさへ、御亭主は妬氣をするのださうなから、よつほどわけの分らぬけちな人間らしい。お前がみす〳〵泥水に身を沈めてゐても、鐚一文出してやらうといふ氣はなかつたらしい。それだから、姉さんが一人で心の中でやきもき思つてゐても駄目なのだ。だから假ひ錢は姉さんの手から出すことが出來ないといつても、それは無いのだから仕方がない。一と口に錢を出さぬから姉さんも深切がないとはいへぬ。

こんど臺灣につれて行つた人は、先から私には隱してゐた骨董屋で、身受けをしてくれた人で、私が有馬から出て來て、夜遲くまで待つた時、多勢でお客につれられて神戸に行つてゐたといふ人だらうが、その人間などは、とてもお前の姉さんがお前のことを明け暮れ心配するほど思つてはゐないだらうと思ふ。

棄てられた俺がかういふと、おれがみれんがましくいふやうだけれど、おれはお錢をこしらへて渡さぬ間に、騙されてゐたことが分つて、まあよかつた。たゞ姉さんは、あのとほり自分には子供もないし、それは〳〵お前のことを心配してゐるのだ。錢を出さぬからといつて、不深切だとも、思つてゐてくれないともいへない。金のある人の五百圓千圓道樂に使ひ棄てるよりも、姉さんが内證にくれる五圓のお金の方がありがたいと思はねばならぬよ。

私はもう棄てられ、深切を仇で返へされた人間だから、これつきり今後手紙などは出さぬ。たゞくれ〳〵も姉さんの心の内を察してこの通り長々と書いた。たんと好きな人に可愛がつておもらひ、臺灣三界までつれられて行つた男だから。

一月七日　勝山より

お種どの

すると、半月ばかり經つて女からひじきの行列のやうな手紙が來ました。

前文略御免下され度候。さて此度、私の當地にまゐり候には、いろ〳〵とわけのあること故何卒御ゆるし下され度候。あなたさまの厚き御世話に相成り候こと、幾年の後までも、かならず〳〵忘れはいたさず候。私もあなたとお別れ申候てより、いまだに御許さまのことは忘れかね、何かの時には思ひだし居り候。あなたさまからの御文まことに嬉しく拜見いたし候。必ず色戀にてまゐりしとはちがひまする。長くゐるつもりではありません。半年か一年ぐらゐで歸へるつもりであります。私は、あなたと、どこまでも一緒になるつもりでありまする。私もあなたの處をさがしたいために、大阪の店へ虎どんに手紙をやりました。私からあなたさまにあてた手紙が虎どんの手に渡してあります。寫眞も本も渡してあります。東京はさぞお寒いこと〻思ひます。まだ臺北は暑いくらゐです。あなたも遊びかた〳〵お出で下されば、私は、そんな嬉しいことはありませぬ。主人の目をぬすみ、二人で、どこへなりとも遊びにまゐります。今では心淋しく暮して居ります。臺北には長く居ません。本月の二十三日に福州へまゐります。家がきまりましたら、すぐ手紙を出します。お手紙下さる時には、足利の姉の名にて御出し下されたく、またお出で下さるせつには、足利の兄だといつて下さい。船は神戸からでも門司からでものれます。三日か四日で着きます。申上げたきことは山々あれども主人が寢た間に書いたのですから、よみにくきところは、お察し下され度候。

私も東京へかへりたく相成り申候。あなたのかほや、姉上のかほが見たく相成り申候。あなたは福州へは來られませんか。一月でも二月でもよろしい。私が毎日遊びにまゐります。寒さはげしきゆゑ、ずゐぶんからだ御大切に遊ばされたく候。まづは取りいそぎおしき筆とめ候。

一月十六日　たねより

こひしき勝山さま

こんな手紙をよこしたものですから、忘れかけてゐた大阪での事をまたいろ〳〵想ひ起して、それでも福州へ行つてから、手紙をよこすかと思つてゐましたが、それッきり音信がありません。一年の間、彼女の爲に大阪にゐて熱病に罹つてゐたやうなものです。（をはり）

津の國屋

一

昨夜から靜かに降つてゐた初雪が薄く地に敷いてゐた。

千草は、昨日の晩遲く東京から到着した爲替を毎時の郵便局で幾枚かの五圓紙幣に換へて懷にすると、少し行つてから、下駄屋に入つて、崩し初めに足駄を買つた。千草は乏しくなつてゐた懷中へ新らしく幾許かの纏つた錢が入つて來ると、眞先に新らしい履物と足袋とを買ふ癖があつた。

その新らしい樫齒で輕く白い雪に鮮かに二の字を刻みながら戎橋の通りを難波新地の方に歩いた。低く空を鎖してゐた灰色の雲が何時の間にか散らけて靑磁色に光つた靑空から暖かい日が照つて來た。大阪は雪が少い。

木理の眼立つまでに洗ひ磨かれた千本格子の軒並に華奢な注連飾りが張られて、しつとりと落着いた難波中筋の粹な古い街筋は茶屋の男、女の忙しい往復に踏まれて、泡雪が大方泥濘んでゐる。その軒下の雪の上に竈や白を据ゑて、餅屋が急がしさうに餅を搗いて廻つてゐる。形の好い蔦を着た千草は、細く疊んだ蝙蝠傘を杖のやうに下げながら「夕霧阿波鳴渡」の「年の内に春は來にけり一臼に、餅花開く餅搗きの、賑々はしや九軒町、嘉例の日取り吉田屋の、庭の竈は難波津の、歌の心よ井籠の、湯氣の大杵。……」といふ情景を聯想しながら、東京と違つた大阪の歳の暮れを珍らしさうに見て歩いた。

二

晝間でも薄暗い津の國屋の三和土の上に靜つと立つて、千草は、

『今日は。』と、小い聲を掛けた。

家の中が閑寂としてゐるので、

『今日は。』と、今度は少し大きい聲を出した。

すると、長火鉢に寄りながら開閉て出來るやうになつてゐる、上り框の二疊のも一つ奥の間から、庭に向いた小い切り窓の小障子を、内側から細目に明けて、

『どなた？』と、いつて顔を見せた。

『あゝ、若旦那、お出でやす。暫らくだしたな。さアお上りやす。』

津の國屋の主婦は、客脚の絶えた午後に、シャン〳〵湯氣の立つ鐵瓶のかゝつた火鉢の向に丹前を被つて、横になつて微睡してゐた眼を覺ましながら、

『ようこそ。……今日もあなたのお噂をしてゐましたんや。昨日か一昨日小夜衣はん、自家の前を通つたついでに、ちよつと寄つて、若旦那から手紙を貰ひました。今度あなたがお出になつたら、もしお花に行てゐても、都合をして來ますから、ぜひ待つてゐて耳入れして貰ふようにいふてはりました。今時分だすから、大抵家にゐやはりまへう。』主婦は時計を見上げて『すぐに返事を出して見ます。……どうぞお二階にお上りやす。』

千草は黑光りのするほど拭込だ箱段を踏んで二階の八疊の間に通つた。濃い群青を塗つた土佐繪風の二枚折りの金屏風が壁の隅に立てゝあつて、違ひ棚には赤い締め紐の眼に立つ太鼓や舞ひの扉子などが置いてある。

主婦は後から直ぐ茶と火とを運んで來て、

『外はお寒うおまつしやらう、……今ちよつと皆な出てゐまして、……すぐ返事をして見ますよつて少し待つてゐておくれやす。』

さういひながら床の上の脇側を取つて千草の脇に置いて降りた。

二十日ばかり前の晩、宵のぞめきにこの家の前を漂々と通りすがつて、つひ呼び込められて一現で逢ひ初めてから、これで三度めで千草は小夜衣に逢ふのである。

東京から大阪に來てゐて、藝者を遊ばないでこどもを呼ぶといふのが、千草の獨りの心に何となく自尊心を傷けるやうな心持ちもするし、大阪の女を遊びたいと思つてゐながら、東京者といふのが物足りなくもあるのだが、逢ひそめから種々の點に男性の情を引着ける處があつて、千草には、あてもなく探してゐた物を、偶然探しあてたやうな力强い興樂に身をそゝられてゐるのである。さうして今まで永い間萎びてゐた心を十分にその興樂に醮したいやうな氣分に促されてゐた。

十日ばかり前、二度めの時にも懷中の用意が乏しかつたり、遊ぶ勝手がよく分つてゐなかつたりして後髪を惹れるやうな悲しい思ひに胸をとぢられながら、十二時までゝ歸つた。

遊女は、寒い夜更に、華麗な夕禪模樣の長襦袢の上に黑い縮緬の羽織を被つて二度までも、はばかりに行くやうにして長火鉢の處に降りて行つて、仲居や主婦と何か話して來たらしい。濃い房々とした銀呆返しの頭髪に埋れたやうに、蒼いほど白い小さい顏を仰向きに枕の上に載せて、ちよつと思案してゐる樣子を傍から見ると、曲線の纖細い顆顆の處に心持ち青い靜脈が浮いてゐるのが幽暗い行燈の光の中にも見えて、長く薄のやうに切れた活々とした黑い瞳で何處かを凝乎と見てゐる。

『おい、何をそんなに考へてゐるの？』

千草は自分の今思つてゐる通りのことを、遊女も思つてゐるのだと考へながら脅かすやうにいつた

『何も考へてゐやしない。』　遊女は一時澄んだやうに靜かであつた姿態を初めて崩しながらいつた。

『ぢや、あなた、今日は十二時までゞお歸んなさい。』　自分も諦めて、男を嫌すやうに優しくいつた。

『私が、どうかしても可いんだけど、最初からそんなことをすると階下でお母ちや

んなど變に思ふから、……十二時までゞ歸した方が可いといふの。』

『あゝ、歸るよ、けれど雨が降つて來たのに、これから歸つて行くのは辛いなア。……電車が無くなりやしないか知ら。……これだけで何うかなりやしないかなア。』

『あなたまだ持つてゐるの。……あるんなら朝迄にして下さいな……私もこれからまた他へ行くのは、それは辛いわ。』

『もう持つてやしない。此處にこの通り、あるだけさ。』

『ぢや、とにかくお歸んなさい。そして近い内に是非來て下さい。でももし電車がなかつたら歸つておいでなさい。直ぐだつたら、私まだ此家にゐますから。……その代り此次は來て見て、私がゐないからと言つて、寄席なんぞへ行くんぢやありませんよ。今晩も此室に靜と寢て待つてゐればよかつたのに……あんまりお錢を使はないやうになさい。』

優しくいたはるやうにいひつゝ起き上つて、跳ね返した夜具に背をよせかけるやうに、小高く重ねるやうにした長襦袢の膝頭の上に懷中鏡を取り出して鬢のほつれを直してゐた。

さうして、まだこれから他へお花に行くつらさをくどくゝと繰返しながらも、手早く長襟袢を脱いで着物に着更へながら、それをめりんす友禪の小風呂敷に包んでゐた。

千草はその夜十二時を過ぎてからびしよくゝと降る雨の中を、わびしく歸つて行つたのだ。

主婦が降りて行つてから千草は紙卷煙草を喫へたまゝ手枕をして横に脚を伸しながら、もそつとのとで涙の流れて出さうであつたその夜の情けなかつたことを種々に追懷して、そこへ小夜衣の顏の見えるのを今かと待つてゐた。

壁一重隔てた隣の家で、娘が淨瑠璃のお浚ひをする調子の高い撥音に連れて、六ケしい曲節を嚴重に語らうとする、まだどこやら稚氣の脱けきれぬ生な嗄れた肉聲

が耳元近く響いて來る。それを好い心地に聽いてゐると千草は、大阪でなければ味はふことの出來ないやうな古い淨瑠璃の情調と自然に心が融合つたやうになつて、今語つてゐる「柳」と彼れとは何の關係もないのであるが、「……絶り歎けば父親は、涙に聲も枯柳、枝に流るゝ血汐の涙。」といふ音調が、小夜衣は賤しい遊女でも自分は構はぬ、苦界の女だから尙ほのこと可哀さうだといふ考に胸をそゝられた。

三

少許しておかみは上つて來た。

『若旦那、あの小夜衣さんを訊きにやりましたらな、今日はどないしても外すことの出來んお座敷で行けまへんいふのだすが、今日は私が美いのを見立てますよつてどうぞ他のんで辛抱しておくれやすな。』

故郷の九州の方で長い間藝者をしてゐて、それから七八年前に大阪に來て南地からも出てゐたといふおかみは、千草の仰向いて臥てゐる胸の上に覗きかゝつて、人を外らさぬやうに笑顔を作りながら大阪とも九州とも東京ともつかぬ辯で言つた。

千草は、それを聞いて失望を感じたが、まだ遊ぶ勝手もよく分らず、殊に深い馴染でもないお茶屋なので、いくらか氣を兼ねながらも、

『どうかして貰つて來られないの。僕は彼女が氣に入つたんだから。』千草は失望の色を和げるやうにつとめながら野暮を微笑に隱して、子供のやうに淡泊に、主婦に縋るやうにいつた。

『えゝ、それやもう、貰へさへすれば、仰しやるまでもない貰うて來ますが、それが貰へんから、今日はどうぞ他のにしておくれやす。あの女が若旦那の氣に入つてゐるのは、それは分つてゐます。私がちやんとあなたには、あの遊女と思うて見立てたのだすもの。さうだすから、もうあなたにはあの女と定めて置いて今日だけは私

に免じて他なのにしておくれやす。その代りこの次からは必ず彼女を呼びますさかい。』

主婦はそこに手を突いて拜む眞似をしたり輕く掌で襦袢の襟の處を打つやうにしたりして哀願した。

千草は折角の思ひで今日こそはと樂んで來たのに、他の女には鐚一枚も惜しいと思つたけれど、それは胸の底に藏ひながら、かういふ時に强ひて我意を外に表はさぬものと諦めて、

『ぢや兎に角もう一遍貰ふやうに話して見て、それでもいけなかつたら仕方がないから他のにするとして。』千草は、矢張り仰向いたまゝ表面にはさまで小夜衣に心がないかのやうに輕く言つた。あんまり初手から獨りの遊女に愛着してゐる心の底を、斯ういふ眼先きの利くらしい主婦に見破られるのが恥かしいやうな氣がした。

『それぢやもう一遍貰うて見て、それで行けなんだ時は他のにするとして、それで、他のは何樣なのにしまへう。若いのにしますか、少し年を取つたのにしまへうか。どんなのでも、若旦那のお好きなのを私が見立てます。』撫で廻すやうに御意を伺つた。

『あんまり若いのはよくない……』

『やつぱり少し年を取つたのが面白いでせう。……彼女くらゐなのを。よろしい私が受合ひました。……あゝ、今、お茶持つて參じます。』

おかみにはあゝいつたけれど、千草はどうしても小夜衣でなければならなかつた。女に段々數多く接して來るにつれて彼れの頽廢的興味はます〳〵病的に鋭敏になつてゐた。女の皮膚の色や手脚の形によつて、男性の享受する快樂の種類を考へて見たり、「心中よし、意氣方よし、床よしの小春どの」といふ近松の淨瑠璃に今待つ遊女を比べて見たりしてゐた。發汗したやうな、感情の疲勞したやうな一刹那

血液の循環が止つたかと思はれるまでに蒼白く亢奮した弱々しい小い顔が房々とした黑い頭髪に埋れてゐる有樣が強く彼れの眼の底に膠着いてゐた。薄くて小い上唇が丁度早蕨を上に向けて卷いたやうに、心持ち伸びてゐる眞中の處が、ちよいと小高くなつてゐて、そこの處の何ともいへない柔かさが種々なことを聯想せしめた。彼れは横になつたまゝそんなことを想ひ浮べて、卷煙草の吸口をきゆつと強く吸つた。

主婦はまた上つて來た。

『お嬉びなさい。小夜衣さんが今來ます。』晴やかにいひながら、千草の横に座つた。

千草は嬉しさに覺えず顔を崩して、

矢張り寢たまゝわざと不機嫌さうにいつた。

『他の者では分らんから私が今自分で行て、座敷に出て居るのを、ちよつと蔭に呼んで貰うて、これ〳〵で若旦那が、ぜひ小夜衣さんに來てもらひたいといふ話しをしましたら、小夜衣さんも、あの人なら、行くから。というて、今すぐ來ます。』

『もう來るの？』

『もう直き來ます。その代り今日はちよつとだすせ。挨拶というて隱れて來て貰ひましたのやから。あなたも直ぐ階下に來ておくれやす。階下にお寢間を取らせますよつて。』おかみは急いだ。

千草は、何のことやら少しもわけが解らぬながら、促さるゝまゝに箱段を降りて行つた。

降りながら、箱段の上り口の處を見ると、小夜衣が白い駝駱の襟卷を手に持つて此方を見上げて默つたまゝ顔中で笑つてゐる。

おかみは、茶室の、も一つ奥の八疊に急がしく綿のよささうな大きな蒲團を自分で運びながら、

『さあ、あなた方は此方へ。……今やから言ひますが自家のお客さんが昨日から小夜衣さんを呼んでゐて、今朝からまた他の貸座敷へこの女を連れて遊びに行てをるのを、今私が行て小夜衣さんに逢うて來てもらひましたんや。……自家の古いお客だすけどお茶屋筭が癖で、長うなると、もの二軒でも三軒でも歩いて廻る人やから。あんまり遲うなると、今に此方へ歸つて來ますから。……さあ〳〵此方へお越し。』

暮れ近くなると、茶の間の長火鉢の前には、定客らしいのが二人三人集つてゐた。

『どうしてゐて。さあ、彼方い行かう。』

小夜衣は、甘つたれるやうに、いつまでも笑ひつゞけながら、千草の袖引いて主婦の延べてゐる寢床の上を渡つて、硝子越しに隣家の大きな土藏に仕切れた猫の額ほどの小庭の見える障子の際に行つて、べつたりと座つた。

『まあこゝへお座んなさい。あれからどうしてゐて。』

小夜衣は座りながら、千草の兩方の袂を下から引張つて、千草は左甚五郎の爲るまゝになる京人形を見たやうに小夜衣に魂を奪られてゐでもするやうに引張られるまゝにきちんと腰を折つて、小夜衣の膝の上に自分の膝を突いた。

『あなたが來たといつて、此家のお母ちやんが自分で呼びに來たからお客にお菓子を買つて來るといつて、欺まして脫けて來てやつた。その代り長くゐられないの。……これ、今日は此樣な風をして可笑いでせう。』と、いつて、遊女は、肱を上げるやうにして寢卷のまゝの襦袢の袖口をこちらへ向けて見せた。

また雪空にでも變つたのか、急に暗くなつて、しん〳〵と底冷えがして來た。

『おゝ寒い！　彼方い行かう。』千草は羽織の兩袖をだらりと懷手をしたまゝ今主婦の延べて行つた蒲團の方に眼配せした。

『あゝ、あつちい行かう！』

その袖の端を捉つたまゝでゐた小夜衣は甘えるやうにいつた。

二人は厚い柔かい敷蒲團の上に行つて座つた。

『好きな人とお樂しみの處を、私が來て邪魔をして濟まないナ。』

『そんなことありますか。そんなことありますか。』

小夜衣は小さい齒を嚙み合すやうにして懷手のまゝでゐる千草の襟先を兩手に捉んでぐい〳〵押した。

『あゝ、もう可い！　〳〵』と、笑ひながら手足の自由を奪はれた千草は後にはねた掛蒲團の上に倒れかゝつた。

四

新春になつて初めて行つた時には都合よく出來て小夜衣は早く來た。

茶の間の主婦の座る頭の上には、壁のそこら中に南地五花街事務所の規定を木版にした藝娼妓の花代の細表が貼つてあつたり、新に披露目をした藝娼妓の名前を大きく誌した紙札が幾枚となく後から後からと重ねて貼つてあつた。

主婦は新しい茶を入れて長火鉢の向に座つた千草に出しながら、彼れがぶす〳〵

小夜衣に想ひ着くやうな噂をいろ〳〵してゐた。

『今日はまあ、丁度よく小夜衣さんが店にゐてよかつた。よく賣れる妓だすよつてなか〳〵こんなことおまへんのやで。あの通り別看板だすからナ。』と、おかみの眼指した柱の上には、「別座祝ひ」と特別に太く書いた大きな紙が貼つてあつた。

『私も、此の商賣をしてゐますから、自家でも隨分多勢の藝者や妓を手にかけますが、小夜衣さんのやうな女は、もうこの難波新地切つておまへんのや。「別座」といへば、花の賣り上げ高によつて、一等二等から下までいろ〳〵ある、その一等よりもまだずつと上で、別座に追ひ越す者はないのだす、あの女のことを皆な小どもの神樣々々というてゐます。上品で。賢うて、厭味がなうてそれで氣に張りがあつて、人情があつて、私はまだこの今の商賣をせん時分から、度々小夜衣さんとは一座を

してあの女の心はよう知つてゐます。あなたが初めて此家へお越しになつた時私、もう一と目ちらと容子を見て、このお客さんには小夜衣さんと、私もう自分で定めたんや。』　主婦は千草の顔を見ると、屢くそれを繰返へした。

なるほどさういはれて見ると千草にも小夜衣の上品で、賢さうな處は解る。さう思ふと彼れの心には小夜衣が次第に好くなつて來た。

『今日は、朝迄にしても可いんでせう。』

『あゝ』

『あゝ、嬉しい。』

『おれも嬉しい。初めて泊ることが出來て。この前は一寸だし。その前の時は雨の中を歸るし。あんな痛かつたことはない。』

『あたいも嬉しいわ。』

夜の更けるにつれて隣座敷にも二た組ばかりの客があがつて、三味線に太鼓を入れた騒々しい散財が初まつた。遠くの方からも、同じ物の音が、建込んだ家々に返響を返すやうに、はつきりと聞えて來た。枕の直ぐ下の街では新内や淨瑠璃の流しが幾群となく通つて行つた。戀ひのつじ占、身の上判斷が古い想ひ出のある聲を揚げて呼び歩いた。一時が鳴つても二時が鳴つても夜更しをする茶屋の男衆女衆などが食べるやうな物を賣る呼び聲が絶えなかつた。

まだ宵の中から小座敷に忍んだやうにして寢疲れてゐた二人は、遅くから連れ立つて湯に行つた。

『大丈夫よ、遊廓の湯は夜の三時まではあるから。』　遊女はさういつて向へ行つた。

『貴郎先に入つてゐらつしやい。私ちよつと自家に行つてお湯の道具を取つて來るから。』

置き屋の店には今時分まだ晝のやうな火影が輝いて、急がしさうに立ち働いてゐ

る入れ方が色彩の強い友禪めれんすの寢卷の小包を持ち廻つてゐるのが艶めかしかつた。湯屋の近くは濕つた暗の中に白い露かほのぐゝと立騰つてゐるのがそこの火光に映つて家根の空をぼうつと赤く取彩つてゐる。殊に女湯は立て込んでゐるらしく、しどけなく伊達卷きをした上に縮緬の羽織を被つて小走りの下駄の音を立てゝ驅込んで來るのがある。櫛卷に解いた頭髪に毛筋立を挿込んで襟頸を眞白に塗つた顏をてらゝさして暖簾を潜つて出て行く者もあつた。

千草には、强ひて見ようとしないのにいろんな色つぽい粧ひをした女が着物を脱いだり着たりするのがよく見えた。溫かい、甘酸ぱいやうな更けた湯の匂ひが柔らかに彼れの鼻を襲うた。東京の洗湯と違つて、大阪のは番臺の處に開きがなかつた。あつても平常開放してあつた。

浴槽の奥の仕切りの板に、何の用に供するのか、女湯と男湯とに出這り出來るほどの口が切つてあつて恍惚となつて湯に漬つてゐる千草に、其處の朦朧と湯氣の立つた中から、

『あなた、石鹸をお使ひなさい。』と、いつて遊女が手を差出した。

やつと三時を聞いてから、帳場でも一同寢床に入つたらしい。

『私、あなた、好き……あなたの、その頼りないやうな處が好き。』

小夜衣は、小供らしい口調で好くいふことを、またいつて染々と千草の目元を見詰めた。千草もまた小夜衣の黑い、能く働く瞳を食て了ひたいやうな心地で凝乎と見入つた。しなふやうに、白い腕で男の頸に卷きついた。白粉臭い浴後の匂ひがぷんと鼻を刺激した。

『あなたの眼は好い眼ねえ。』

『お前の眼の方が俺は好きだ。長く切れてゐて、鼻だつて細工が細かい。……それより此處の黑子が私には一番好い。』　さういひながら千草は、遊女の白粉の色鮮やかな頰の上を指の尖でちよいとついた。

二人は曉方になつてやつと睡つた。

五

また深い夢に入りながら。ぐつすりと寢込でゐる貸座敷々々の大戸を、情け容赦もなくどん〳〵叩いて、花街の遠くの方から朝迎へに來る茶屋男や茶屋女の呼び聲が霜に凍つた空氣に冴えて溫く寢てゐた千草の甘い曙夢を破つた。

『河半さん！々々。小式部さん！々々……。小式部さん、朝迎へ。』

『伊丹仲さん！々々。伊丹仲さん！々々。……勝山さんに東雲さん、朝迎へ。どうしまへう？……あゝ左樣かア。』

それが、女衆の呼び聲だと、『あゝ、左樣かア。』と、喚く言葉尻がある調子を帶びてゐて宛ながら、翌朝の別れを悲む歌でゞもあるかのやうに、靜かに眠つてゐる朝の街に流れて行つた。

初めてそれを聞く千草の耳には、その聲が何とも名狀し難い懷かしい情思をそゝるのであつた。芝居の好きな人には、幕明きの柝の音、笛の音が、どんなに懷かしく聞えるであらう。相撲の好きな者には氣負うたやうな呼び出し奴の聲が、どんなに嬉しく響くであらう。

けれども千草がかういふ旅の空で、疲れた骸軀を淺間しい一現茶屋の寢床の上に横へて、敢果ない一夜妻の情にその爛れた悲しい心を委ねるのは、もつと賴りないことを賴みとするからであつた。ある年若い盲人は、その不具な盲目の爲に、人間として享有すべき種々な樂しみを享樂することが出來なかつた。さうして段々成長して物情がついて來るに從つて、倍々己れの身の不具を悲んで精神が沈鬱になり、果ては氣が變になつて、火事の時に打つ半鐘の音に聞入ることを好んで、後には秘に、自分で放火をして置いて、警鐘の鳴るのを物蔭で聞き惚れてゐたといふこであ

る。

恰度その朝迎への呼び聲が、若き日の多くの仇なる希望に失樂して些の生効もなく彷徨へる今の千草にはその盲人に半鐘の音が與へる如く、官能に不健全な快感を與へた。

『津の國屋さん！々々。津の國屋さん！々々。……小夜衣さん朝迎へ。』

と、いふ呼び聲は其の家に寢てゐる者の中では誰れより一番早く千草の神經に傳つた。

やつと寢呆けた聲を出して戸外に返辭をした仲居は、みしり〳〵箱段を踏んで襖の外から、

『小夜衣さん、朝迎へ。どういたしませう。』

と、いつて訊くのだが、後日には毎時も朝迎へは、もう後三本にして大抵朝後にした。さうして朝後はつひ晝までになり、晝まではまた晝後になり、暮れまでになり、夜半までになつて、流連けることもあつた。

六

千草の日は當分錢の入るあてもなく、暫らくは小夜衣の顏を見ることは叫はぬと、味氣ない宿に閉ぢ籠つて凝乎と諦めてゐたのに、午後になつてふと思ひもそめぬ東京のある處から僅かばかりの爲替が舞ひ込んで來た。千草はその書留の朱肉の印の捺された狀袋が机の上に載つてゐるのを見るとほと〳〵嬉れし涙が滲んで、これだけあれば悠然今晩一と晩小夜衣に逢へる。と、東京の方に向いて手を合して拜んだ、彼れは忽ちにして生き効を感じて來た。さうしてまたもや大阪の街にさまよひ出たのである。

丁度暮れちよつと前まで、時刻を移す爲にいろ〳〵なことを思ひ耽りながら貸し間をする家でもありはせぬかと、鰻谷町の方から疊屋町、笠屋町を經て、久し振りに心齋橋筋の美しい狹い通りの飾り窓などを窺いて歩いた。

桐壺や鶏飼の入口に、此家等ばかりは、まだ昔しの面影をとゞめた古風の行燈に覺束ない火影のさしそめた芝居うらを、忍び〳〵歩いてゐる千草は、わけもなく四邊の情調に誘はれて、小夜衣が首尾よく店にゐてくれゝばいゝがなアと、うはの空に思ひ詰めて、夕ぐれの寒さに、ぞつと戀ひ風の身に染む心地を覺えつゝ早く他からロのかゝらぬ間にと、急ぎ足になりながら有り合はした小店で鼻紙と手拭を買ひ小さく疊んで懐に入れた。それから二つばかり角を曲つたり露路を通りぬけたりして少し行くと丁ど小夜衣の店の筋向の本茶屋めいた店つきの家へ小聲に呼ばれるまゝに上つていつた。

『あゝ、小夜衣はん、お馴染だつか。』

と、いつて、聞きに行つた仲居が直ぐ歸つて來て、

『小夜衣はん、暮れまでになつてゐますよつて、もう三十分ほどしたら明きますさうだす。そしたらおこしますと申しました。どうぞ暫らく待つておくれやす。』

待つ間もなく小夜衣は仲居に連れられて階段を上つて來て、入り口の處で仲居が襖を明けて、身を横によける傍から、靜つと座敷の中を窺いて見て。

『御存じ？』と、仲居のいふのを餘處に聞いて、

『えゝ。……貴郎だつたのか。』いくらか浮かぬ面持になりながら、千草の火鉢の向に來て座つた。仲居が行つてから、

『どうして、あなた、此樣な處に來たの。津の國屋に何故行かないの。』

夕化粧の際立つ白い顔を、ぽつと亦く亢奮さしたやうにして詰問した。

『どうしてつて、俺は、津の國屋に行くのは何だか厭だから。』

『何だか厭だつて、何が厭なの。あなた厭でも、私がそれぢや困る。』

『お前、何うして困る。おれは客だ。何處からお前を呼ばうと勝手だ。』

『そりやあなたは何處から呼ばうと勝手でも、東京ぢやさうだけれど、大阪ぢやさう行かないんだもの。あなたが私を初めて津の國屋から呼んだらそれからは、どう

しても津の國屋から呼ばなければいけないの。さうしないと私が警察に呼び付けられて、拘留せられるんだもの。』　小夜衣は關東女の幾許か荒つぽい言葉で言つた。

『さうかい。そんなことをするとお前が警察に引張られるの。そんな酷いことをするの。ぢや、どうしよう？』千草はわざと呆れたやうに仰山に言つた。

『どうもしなくつても可いの。唯、男衆に、津の國屋に答へさしてさへ置けば。』

その代り、他の家から呼ぶと津の國屋へはその度毎に屆けなければならなかつた。もしそれを無斷でゐて、津の國屋に知れて五花街事務所に屆け出されると遊女は、警察に出なければならぬ規定であつた。千草は、大阪の斯かる商賣にも組合仲間の規定の恐ろしく嚴重なのに獨りで感心した。

『さうか、それならそれと早く理由を話して聞かすれば可いのに、最初ッから折角白粉を塗つて來た顏を赤くして、お前怒るから、俺は吃驚した。』　と、千草は何處までも浮戯けたやうに眞面目に言つた

『どうも濟みません。』　小夜衣は、急に平常の人懷しい調子に直つて、火鉢の向かから千草の兩掌を握つた、『まだ早いから、これから活動を見に行きませうか。』　甘えるやうに言つた。

千草は、東京でも大阪でも女が活動寫眞を觀ることを好いてゐるのを、恰も女がお薩を好いてゐるのに何處も變りのないと同じやうに感じてゐるので、これまで顏さへ見れば活動へ行きませうか、お錢が掛らなくて面白いからと、强請むのを法善寺裏の寄席に落語を聞きに連れて行つたり、東吳や柴藤へ鰻を食べに連れて行つたりして誤魔化して逃れてゐたのだが、その晩は娘小供に父親がお供をするやうに、寛慈な心持ちになつて道頓堀の活動寫眞に行つた。

ユーゴオの何かを更にローマンチクにセンチメンタルに脚色した泰西劇だの、大阪式の新派劇だのを、千草は耐忍しい〳〵他の事を默想しながら見てゐた。眼に涙を滲ませて熱心に見てゐる小夜衣は新派劇の幕毎に映る「親の愛」とか「戀の惱

み」とか言つたやうな文字を小聲で讀んだ。

『お前は學者だねえ。』　千草は小夜衣の耳に口を當てゝ暗中に囁やいた。

彼れは、多勢の處に斯うしてゐるよりも早く二人ばかりの處へ行きたかつた。

下足場で散々群衆にもまれて、土間へ足袋裸足のまゝ突き落されたりしながら千草は漸との思ひで自分のと一緒に遊女の下駄を取つてやつた。

七

軒を並べた芝居と活動寫眞とが一時に閉會た道頓堀の通りは、群衆が押返すやうに蠢動いてゐた。一月末の冷たい夜風が襟先や腋の下のあたりから肌を刺すやうに浸みた。

『おゝ寒い〳〵！』

小夜衣は、がた〳〵身慄ひをしながら芝居の反對の側の店先の人影の疎らな處を選つて急いだ。

『お前は、また馬鹿に薄着をしてゐるんだもの。』

千草は、澁い壁色のお召の外套を着て、白い駱駝の襟卷をしてゐる小夜衣の貧弱な姿を、哀れみに充ちた眼で横から見守つた。懷手をしてゐる肩のまわりが小供のやうに小さくつて、外套の袖が下垂れを着たやうに垂れてゐた。明けて二十三になる小夜衣は、まだ十五六の小娘位の身體をしてゐた。

『渡良瀬川の上流から、この遠國の大阪まで流れて來て、何といふ淺間しい身の上であらう。』　と、思はれて、千草は名狀し難い哀傷に沈みながら歩いていつた。

『勤めは痛い！』

寢てゐる時など、どうかするとそんなことをいつて、ほつと太息を洩すことなどあつても、身體が二つあつても三つあつても引き足らぬほどよく賣れて、親方からは、衣裝から何から、他の多勢の抱妓とは、一人だけ別に大切に取扱はれてゐた。

溫順い女のわりに氣がさらくしてゐて、格別商賣を苦にもしてゐなかつた。

絣の好く揃つた大島紬の着物は、寢卷の長襦袢を着更ながら、幅のつまつた水色繻子の丸帶をきゆつと背後で男結びに締めて、その上をほんと一つ叩きながら、

『好いでせう。奴の小萬見たやうで。……自家で私くらゐ何でも構はない人間はないの。その代り信用があるわ。誰れでも小夜衣さんは、男のやうだつて。洒然してゐて。』

それは小夜衣が自身でいふ通りであつた。藝者上りらしい厚皮しい處もなければ、女郎臭い卑しい根性など微塵もなかつた。千草には何處よりも一番そこを蟲が好いたらしい。

下野の山の中に生れたにしては驚くばかり骨細で華奢であつた。容貌に何處か貴族的な遺傳があつた。

『斯樣な好い女性を運命は何うして斯樣な淺間しい境遇に陷らしめたのであらう。』

千草はまたもいうて歸らぬことを思ひながら、群衆を分けて歩いた。二三間先にも一人眼に着く銀杏返しの好い女が、斜に反對に向つて行くのが見えた。それは併し背が大きかつた。小夜衣が獨り小さかつた。千草の眼には覗きからくりの繪のやうにいろくな美しい女が映て行つた。

『おい、何を食べに行かう？』

『何でも、あなたが好きな物を。』

『ぢや、鳥？　それとも蠣船？……俺は東京にゐる時から長い間、大阪の蠣船を樂しみにしてゐた。蠣船と文樂座との爲に大阪へ來たと言つても可いのだけれど、蠣飯は案外不味ねえ。』

『さうねえ。あれで御飯がも少し味が付いてゐると可いんだけど。……おゝ寒い寒い。早く何處かへ入りませう。』

二人は、戎橋を渡つて行く者と、九郎右衛門町の方へ眞直に行く者と、難波の方へ

折れて歸へる群衆とを、立ちながら見るともなく眺めてゐた。

『あゝ、彼處に好さゝうな鳥料理があつたのを知つてゐる。』千草はさういつて九郎右衛門町の通りをずん〳〵先に立つて歩いた。さうして道頓堀の河岸の側の鳥辰と行燈にしるした洒落れた入口の、撒水した花崗石を踏んで行つた。

老舗らしい古い木造りの、清楚とした二階に通ると、好い鹽梅に客が隙いてゐた。

『大變靜かだわねえ。もう大分遲いのよこれから早く食べて歸つて直ぐ寢ましようよ。』

『あゝ、さうしよう。』

仲居が、ぽり〳〵青い火焔の燃え上つてゐる火をどつさり入れて持つて來た。

『おゝ、温かい。寒かつたわ！』小夜衣は身を慄はして見せた。

『戸外はお寒おまつしやろ。』

『寒ござんすねえ、姐ちやん。……今夜お酒を少し飲みませうか。』

『あゝ、飲まう。ぢや姐さんお酒を。』

小夜衣は眞白い胸當てを膝の上に擴げて、鍋の中に種々な物を取入れながら、

『あゝ、……成程此奴は甘い、何時か其處の明陽軒に行つた時ねえ、女中に任して置いたら、折角の牛肉の味を不味くしてしまつた。この家は、落着いた好い家だナ。』

千草は其處らを見廻しながら、心の中で東京の鳥料理の家などを思ひ比べてゐた。

一本の酒がまだ半分も減らぬ間に二人の顏は、もう火照つて來た。

『お前もすぐ顏が赤くなるねえ。』

『それに今日は寒かつた處へ急に飲んだから……目がちら〳〵するわ。』

『お前、その手をやると、手の切れさうな眼尻の長く切れてゐるのが、何ともいへず好い。』

千草はまたそれをいつて、灰汁抜けのした小夜衣の顔をじろ〳〵と見てゐた。折角かうして逢ひながら、多勢の中に交つてゐるのを千草は物足りなく思つてゐたのが、やつと二人ばかりになつて差向ひで飲食してゐるのが何とも言へず歡ばしかつた。

男でも女でも物を食べる時に下品なそゝつかしい食べ方をする者がよくあるが賤しい商賣の小夜衣は小さい口でいつも靜かな食べ方をした。

『お前の箸で取つておくれ。』

男は、女が箸で挾んで差出すのを食べながら、

『おい、もつと、此方へお寄り。』

『誰れか來ますよ。』

丁ど其處へ男女の客が大阪臭い言葉をあたり構はず高聲に話しながら上つて來た。

『あゝ、あんな奴が遣つて來た。早く歸らう。大阪の奴はよく隣の襖を明けて見る

よ。』

厚皮しい年增藝者などのキャッ〳〵云ふ聲がしたかと思ふと、さつと向の襖を一尺ばかり明けて此方を覗いた。

『失禮だわ！』小夜衣は屹度なつた聲でいつた。

夜はいたく更けた。二人は九郎右衛門町の通りを芝居裏の方に曲つて行つた。

『二人で斯うして歩いてゐる處を津の國屋のお母ちやんにでも見られたら大變だ。あなた、その鳶の襟をよく立てゝ！……もつと〳〵。その烏打ちの緣も下げて。』

小夜衣は、津の國屋の主婦に目付るのを大變なことのやうに恐れた。すると暗い横町を忍び〳〵歩いて行く處を、誰れかゞ擦れ違つて行きながら、

『小夜衣さん！』

と、聲を掛けた。

『あゝ、お母ちやん！』小夜衣は、直ぐ聲の主が分つたと見えて、後戻りしかけた。

『まあえゝわ〳〵。また此次。』

さう言ひ棄てゝ、津の國屋の主婦は定客らしい二三人連れと向へ行つて了つた。

『そら御覽なさい！　私の言つた通りだ。』

『津の國屋の主婦か。誰れかと思つた。』

『狹いんだもの。直ぐ見付つてしまふ。』

『見付つたつて構はないぢやないか。お前は大變に氣にするねえ。』

『そりや、あなたには何でもなからうけれど私が今日明日此の土地にゐなくなる者ならどうだつて構はないけれど、まだ此の土地に長くゐなければならない身體だもの。』

『向へ屆けて置いたと言つたから構はないぢやないか。』

『いくら屆けて置いたつて、あゝして二人歩いてゐる處を甘く見付かつたら惡いぢやありませんか。』

『さうさい、そんなに喧しいのかい。大阪ぢや女郎買ひも、なか〳〵六ケしいね。』

『あなた、もう私の處に來てくれなくつてもいゝから、津の國屋の外から私を呼ぶのは止して下さい。』

『さうか、來てくれなくつても可ければ俺も是非來なければならぬことはない。……ぢやこれから直ぐ歸らう。』

『えゝお歸んなさい。』

千草は一人で先にさつ〳〵と歩いて行つた。

一處に歸つて行くと、仲居は待ちかねてゐて、

『お歸りやす。えらう遲うおましたな。……どうぞ此方へ。』

仲居は、先に立つて三階の奥まつた小間に案内した。そこにはもう柔かい友禪の蒲團に炬燵を入れてあつた。

仲居は行き掛けながら蔭から、

『小夜衣はん、ちよつと。』と、呼んだ。

『店から男衆がもう先刻から何度も來て仕舞には自家で待つてゐましたんや。』

小夜衣は直ぐ入つて來て、

『おゝ寒い〳〵。まあ此處で少しあたりませう。あなたも其處へお入んなさい。』

さういつて夜具をはねて炬燵に入つた。

千草は何事でもなさゝうな津の國屋のことがまだ十分に得心出來ぬので先刻の小夜衣の膠もない物の言ひ振りが胸に納りかねてゐた。さうして懷手をしてそこに突立つたまゝ、

『店から何の用？……挨拶だらう。』

『いえッ、違ふ。まあ。おあたんなさい。』小夜衣は何事もなさゝうに頭振を振つた。

『貰ひか、挨拶だらう。それに違ひない。』千草は、今時分から挨拶になど遊女を出してやることを好まなかつた。

『津の國屋も、津の國屋ねえ。お客が自分の處へ來なければ、お客の氣嫌を惡くしたのは分つてゐるんだもの。仲居でも謝罪によこすが當然だ。』

『小夜衣はん、ちよつと。』また仲居が、室の外から聲をかけた。

千草は、一人で面白くなかつた。

『あなたねえ、これから今一寸此處で、寢て、今晩私は自家へ歸つて寢るから、あなたゞけ一人此處へ泊つて、あすの朝津の國屋から私を呼んで下さい、今男衆にさういつて遣つたから、後で津の國屋から姐ちやんが屹度此處へ謝罪に來るから、さうしたら、さうして下さい。……あすの朝私いくら早くても行くから。さうしないと、津の國屋に面が濟まぬ。』

千草は、小夜衣のいふことを聞いてゐて、腹の中で（甘いことを言やがるな）と思つた。他のお客が貰ひを掛けてゐるに違ひない。それを、津の國屋の事にかこつ

けて誤魔化さうとするのが憎らしい。

『ナニ、俺は朝寝坊だから、朝早いのは、眞平だ。』

『さうねえ、あんまり早いのもいけないわねえ。』

『挨拶に行つて、間男をしてお出で！』

千草は、少しづゝ神經的の皮肉を用ゐ始めた。

『挨拶に行つて來てもよくつて？』小夜衣は炬燵に寄りかゝりながら、ちらりと横に向いて、千草の顔を盗み見た。

その、女の眼尻に、千草は、一寸物凄い眼の働きを認めた。

『好きな男が宵から來て待つてゐるんだ。……お氣の毒だ。大阪には、ピカ〳〵する指環を三つも四つも篏めた色男が多いよ。……行つて逢つて來ると可い。』

『本當に行つてもよくつて？』冷かに言つた。

『……』

『行かないと、また男衆に、事件を五拾錢遣らなけりやならないよ。詰らないぢやなくつて。』

『五拾錢惜いと、何時いつた？　それを惜む位ならば、まだ明い内から面白くもない活動寫眞のお供をして苦しい目をしてお前の下足番なんかしやしない。』

『どうも濟みません。』口の先で言つた。

『寒いからと言つて烏料理に入つて、これから早く歸つて寢ようと言つたぢやないか。……今日はお前に御奉公をしたのだ。……挨拶に行かうと思へば行つてお出で。』

『ですからもう行きやしなくつてよ。……それよりお湯に行つて來ようか。』

『あゝ、湯に行かう。』

二人は湯に出て行つた。

『もう十一時だ。』千草は、通りの時計を窺いて見ていつた。

『十一時どころですか。もう二時だ。』小夜衣は小走りに走りながら『私、一寸自家に行つて道具を取つて來るから、あなた先へ行つていらつしやい。寒いからよく暖まつて入らつしやい。』さう言ひ棄てゝ店の方に去つた。

千草は悠然湯に漬つて歸つて來ても小夜衣は容易に戻つて來なかつた。彼れは、段々心が面白くなくなつて來た。靜と獨りで床の中に横つてゐられなくなつた。急性に手を拍つて仲居を呼んだ。

『女は如何した。』

『どうも相濟みません。えらうお湯が長うおますな。』

『湯ぢやないんだよ。畜生め、人を馬鹿にしてゐやがる。』

『お湯と違ひまつか。』

『違ふよ。挨拶に行きやがつたんだよ。』

『まあ、さうだすか。私、また旦那はんと一處にお湯に行つたことゝ思うてました

のや。さうだすかそれはどうも相濟ません。一遍店に見にやります。』

仲居は降りて行つた。

暫らくすると、仲居はまた上つて來た。

『御免やす。……やつぱりお湯に行てはります。今直參りますからどうぞ少しの間辛抱しとくれやす。……茶熱いのをお上りやす。』

今まで待つたよりも、また倍も待つたけれど小夜衣はまだ歸つて來なかつた。

仲居は幾度となく三階まで上つたり下りたりした。

『……小夜衣はん、本當にどないしなはつたんやろ。もう三時過ぎてまんがな。自家でも表締めて寢んなりまへんがな。ほんとに旦那はんに申譯おまへん。もう一度行つて急いで參りますよつて、どうぞもう暫らく待つとくれやす。』

仲居はしとやかに宥めて置いて降りて行つた。その後から千草は堪へずまたパチ〳〵手を拍つて、

『俺はもう歸るからな。畜生人を馬鹿にしてゐやあがる。』千草は憤然として寢床から起き上つた。

仲居は驚いて狼狽てゝ、其處に膝を突きつゝ、着物を着ようとしてゐる千草の兩の袂を執るやうにしながら、

『もうちよつと待つとくれやす。今また他の者を迎へにやりましたから、旦那はんにそんなことしられますと私等後で帳場で叱られます。どうぞお願ひだす。ちよつと待つとくれやす。……挨拶と知つたら女を出して遣るんやおまへなんだに。』仲居は悲しげに千草を引留めた。

『いや、お前方には濟まないがなあ。あの女が惡いんだよ。……ヘン人を馬鹿にするないッ。贅六の啄きッ枯した女郎なんか此方で厭だ。』

千草は獨り語を言ひながら仲居の留めるのも聞かず颯々と着物を着て蒲を被つて歸へる用意をした。

今時分好きな男の處へ行つてあゝもしてゐる、斯うもしてゐると想像すると忌々しさに胸が引搔れるやうだ。寢ながら今か今かと待つてゐると、ゐても立つてもゐられない心地がするけれど、斯うして潔よく起き上つて歸る決心をして見るといくらか胸が透いたやうだ。あんな一と晩の中にさへ幾人と數知れぬ男に肌を觸れる遊女が何處が好いんだ。どうしてあんな女に思ひ染んだのだらう。丁度今宵を好い機會にきつぱりと思ひ斷る。さうすれば心が樂だ。俺は歸るんだ。歸つた後へ小夜衣が戻つて來て、俺が居なかつたら何と思ふか、その時自分がかうして歸つて行く、せめてもの効がある。小夜衣に何とか思はしさへすればいくらか腹が治まる。

彼れは三階の奥から降りた。

『いますぐ參ります。もう店まで歸つてゐますから。』

さういつて仲居が二人かゝりで引留めたけれど、千草は颯々と通りに歩いて出ねば腹の蟲が抑へきれなかつた。さうして一人の仲居は小女の行つてゐる後からまた

店へ走つて行つた。一人は千草の袖を捉へながら中筋の通りを何處までも追うて來た。夜更しをする煮賣屋さへ影を隱した表の通りはもう何處のお茶屋も潛戸を締めて寢てゐた。

『おれはもう歸るんだから、其處を放してくれッ。』

少しく邪見に言ひ切つて、すた〳〵道を急いだ。十七八日頃の冬の月は、人足絶えた街を蒼白く照してゐる。千草は振り返つて見ると、仲居が月光を浴びながら空しく突立つて此方を見てゐるのが見えた。それを見るとまたすた〳〵歩いた。少し行つて此度振り返ると、仲居はもう見えなかつた。さうすると千草は俄にまた遊女が腹立しくなつて來た。難波の通りに出ると夜働ぎの車が二三人街角に寒く固つてゐた。それを認めると千草は初めて電車も疾になくなつたことに氣が着いた。

小夜衣奴をどうしてくれようと焦れながら、復た〳〵先刻のお茶屋の方へ引返して來た。

『おゝ、旦那はんお歸りやす。小夜衣はん今直き參ります。』戸口に立つてゐた仲居が傍に寄つて來た。

『ナニ遊女なんかもう來なくたつて可い。……併しもう電車もなくなつたから私は泊めてもらはう。』

『どうぞさうしておくれやす。小夜衣はんは今家にゐました。私逢うて來ました。』

暫らく店先で仲居どもと話してから千草は元の小座敷に戻つて暖々と寢轉んだ。

さうしてゐる所へばた〳〵と足音を立てゝ小夜衣が梯段を駈け上つて來た。

『千いさん何うしてゐて？』息をはづませてゐる。

『待つたでせう。……もう何處へも行かないわ！』

『今から行かないのは當然だ。馬鹿にするないッ！』千草はくるりと背を向けた。

小夜衣は急いで着物を長襦袢に着更へながら、

『千いさん怒つちや厭。怒つちや厭。千いさん。』

と、いひながら兩手で男の頭を抱えて無理に自分の方へ捻ぢ向けた。

『寢る邪魔するな、總嫁め！』千草はまたくるりと向へ轉つた。（をはり）

大正七年七月十日印刷
大正五年十月二十日發行
大正五年六月一日再版發行

著作者　德田秋江

發行者　東京市神田區表神保町三番地　加藤好造

印刷者　東京市麹町區麹町二ノ九番地　小塩信三

印刷所　東京市麹町區麹町二ノ九番地　小塩印刷所

發行所　東京市神田區表神保町三番地　蜻蛉館書店
振替貯金口座　東京三二三七五

定價八拾五錢
郵税八錢

不許複製